

2024 年 2 月

食料安全保障月報

(第 32 号)



令和 6 年 2 月 29 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2024 年 2 月食料安全保障月報（第 32 号）

目 次

概要編

I	2024 年 2 月の主な動き	1
II	2024 年 2 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「ウクライナ情勢と EU の穀物需給への影響」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 1
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 2
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 3
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 5
5	食品小売価格の動向	1 9
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	2 0
7	FAO 食料価格指数	2 2

今月のコラム

	「インドの食料事情（3）：食文化（インド食）②」	2 3
--	--------------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2024/25 年度の冬小麦の生育状況が改善
	＜カナダ＞	2024/25 年度の生産量は 33.9 百万トンの見込み(AAFC)
	＜豪州＞	2023/24 年度の輸出量は、0.5 百万トン上方修正
	＜EU27＞	2023/24 年度の生産量は 5 年平均を上回る 134.0 百万トン (欧州委員会)
	＜中国＞	2023 年の輸入量は前年に比べ 13.7%増加
	＜ロシア＞	2023/24 年度の輸出量は史上最高 アルジェリアで輸出シェア拡大
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の輸出量は前月予測から 1.0 百万トン上方修正
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	収穫面積の増加により、生産量は史上最高の見通し
	＜ブラジル＞	2023/24 年度の生産量は大豆等への転換や高温乾燥により減少
	＜アルゼンチン＞	2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し
	＜中国＞	単収及び収穫面積の増加を受け、生産量は史上最高
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 27.6%減
3	コメ	1 5
	＜米国＞	2 月初旬の豪雪でシエラネバダ山脈の降雪量が増加

<インド> ラビ米の生育は良好も、降雨不足から灌漑用水不足が懸念
<中国> 2023/24 年度は播種面積が減少し、生産量が対前年比 0.9%減少
<タイ> 乾季米は灌漑用水不足や高温から減産見込み
<ベトナム> 南部メコンデルタ地域で冬春作（乾季米）の収穫を開始

II 油糧種子

大豆・・ 2 1

<米国> 収穫面積の減少により、生産量は前年度より 2.5%減

<ブラジル> 2023/24 年度の生産量(CONAB)は前年度より 3.4%減

<アルゼンチン> 2023/24 年度の生産量は、前年度より倍増

<中国> 2023/24 年度の生産量・消費量・輸入量は史上最高

<カナダ> 2024/25 年度の生産量は 7.0 百万トンの見込み(AAFC)

(参考 1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2023/24 年度)・・・ 2 7

(参考 2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

(参考 3) 各国のクロップカレンダー一覧（主要品目毎）・・・・・・・・ 2 8

【利用上の注意】

表紙写真：ブラジルの大豆圃場（マットグロッソ州、2024 年 1 月 31 日）
大豆の水分状況を確認しつつ収穫を開始。

(概要編)

I 2024 年 2 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2023/24 年度の作況について、北半球では収穫が終了した一方、南米では大豆等が生育期から収穫期を迎えている。

品目別にみると、2 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、前年度高温乾燥の影響を受けたインドや米国等で増産となるものの、前年度史上最高の豊作だった豪州等で減産となり、世界の生産量は前年度を下回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022 年 3 月に過去最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意については 2023 年 7 月にロシアが離脱し停止。黒海の臨時回廊からの輸出や EU 経由での代替輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル等で減産見通しであるものの、米国や中国で史上最高の生産量となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。大豆については、米国で減産となるものの、現在生育期のアルゼンチンで増産見通しとなり、世界全体の生産量は前年度を上回る見通し。いずれの品目も、旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況の中で、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、12 月の 119.1 から、1 月(最新値)は 118.0 と下落（参考：2023 年 1 月 131.6、2022 年 1 月 135.8、2021 年 1 月 113.5）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値と同程度の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2024 年 2 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の2月見通しによれば、2023/24年度の小麦は収穫が終了し、生産量は、前月から上方修正され2,340万トン（対前年度比9%増）。とうもろこしは収穫がほぼ終了し、生産量は前月から変更なく3,050万トン（同13%増）。輸出量は黒海沿岸を通る臨時回廊からの輸出が増加し、小麦、とうもろこしとも前月から上方修正されそれぞれ1,500万トン（同12%減）、2,300万トン（同15%減）（参考1）。

一方、ウクライナ農業政策食料省の2023年12月8日時点の予測によると、2023/24年度の穀物・油糧種子の生産量は天候に恵まれ8,130万トンと、10月時点の7,910万トンから上方修正された。ただ、ロシア侵攻以前において過去最高だった2021/22年度（1億600万トン）と比較すると23%減。

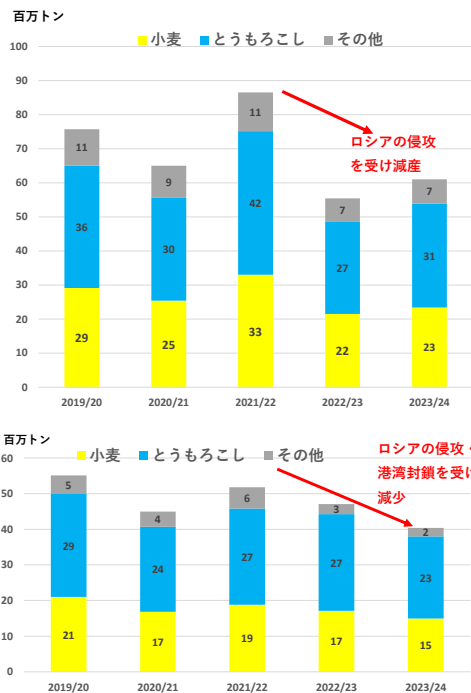
ウクライナ農業政策食料省によれば、2024年2月8日時点で小麦は収穫が終了し、2,248万トンを収穫済み。とうもろこしは収穫終盤で同日時点で2,871万トンを収穫済。

黒海穀物イニシアティブ停止後の動向（臨時回廊からの輸出増）

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、穀物等3,283万トンが輸出されたが、2023年7月17日にロシアの離脱で履行が停止。

一方、代替輸出ルートとして、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通る臨時回廊からの輸出や、運河等を利用しルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。代替輸出ルートのうち、陸路の輸送は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量は前年10月以降伸びているが、ロシアの侵攻や中東情勢の影響等引き続き注視が必要。

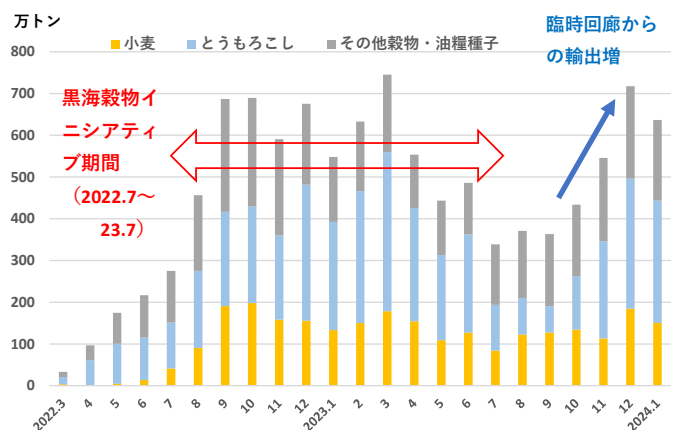
（参考1）小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2024.2）

注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022.3～24.1）



出典：現地調査会社調べ

注：その他はひまわり油・大麦など。

1 ウクライナ：臨時回廊からの輸出が増加

前年7月の「黒海穀物イニシアティブ」の停止後、ウクライナは、ルーマニアとの国境に面したドナウ川沿いの港からの出荷や、EU 経由の陸路等による代替輸出ルートへの拡充を試みてきた。ロシアの攻撃がドナウ川沿いの穀物輸出施設まで及んでいるほか、鉄道の軌道幅がウクライナと EU で異なる等のインフラの制約も課題となっている。このため、ウクライナはルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通る新ルートを IMO(国際海事機関)に通報し、前年8月以降「臨時回廊」の運用が開始された。

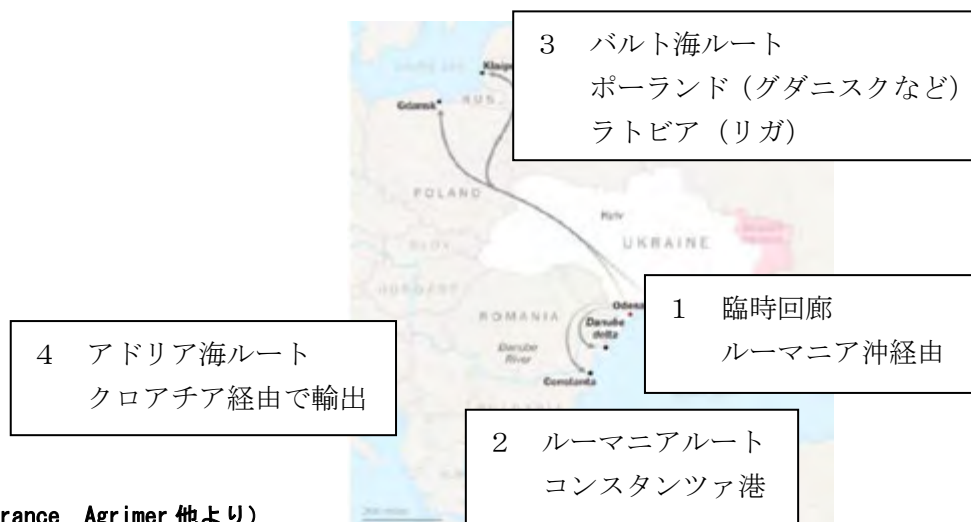
ウクライナの穀物・油糧種子の輸出に関し、「臨時回廊」を中心とした港湾からの輸出货量（一部ドナウ水路を利用したルーマニア経由の輸出含む）は7～9月に毎月230万トン前後で推移していたが、10月は313万トン、11月は430万トン、12月は614万トンと増加し、本年1月は549万トンで、輸出全体の7割前後を占めている。

EU 向け輸出については、EU による東欧5か国向けのウクライナ産穀物輸入禁止措置が前年9月15日以降解除されたが、トランジットを除き、ポーランド、ハンガリー及びスロバキアは独自の輸入規制を継続している。一方、ルーマニアは前年10月13日、在庫の積増しなどに限定しウクライナ産穀物の輸入を許可した。ウクライナ産穀物等の流入に関し、ポーランド、スロバキア及びハンガリーでは農業団体やトラック運転手の反発が強く、前年11月6日以降、国境検問所の封鎖等の抗議活動が断続的に行われている。本年1月には農家の抗議活動がフランスやベルギーまで広がった。今のところ影響は陸路に限定され、臨時回廊中心の ウクライナの輸出への影響は軽微。

東欧5か国の農相は1月15日、欧州委員会にウクライナ産穀物への輸入関税の賦課を求めたが、欧州委員会は2月1日、セーフガード等の緊急措置を含む無税での輸入を提案した。

※黒海穀物イニシアティブ停止後、代替輸出ルートとして、以下に掲げるものが実施又は検討。

- 1 臨時回廊 ウクライナのオデーサ港など黒海港湾から、ルーマニア・ブルガリア沖経由で輸出
- 2 トラックや鉄道輸送、ドナウ川の運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港経由で輸出
⇒ルーマニアのブカレストからウクライナ国境まで高速道路建設中。
- コンスタンツァ港で従来施設を改修しウクライナ産農産物専用ふ頭の運用が3月以降予定。
- 3 ポーランドを経由し、バルト海沿いのグダニスク港、ラトビアのリガ港等経由で輸出
⇒グダニスク港をウクライナ産穀物の輸出向け港湾として整備することに合意。
- 4 クロアチアを経由し、アドリア海から輸出



（出典：France Agrimer 他より）

2 米国：2024/25 年度のとうもろこし・小麦作付面積は減少、大豆は増加見通し

米国農務省は、2月15・16日に開催した農業アウトLOOKフォーラムにおいて、2024/25年度の主要作物の作付けや需給の予測を公表した。作付面積については、小麦は1,902万ヘクタール（前年度比5.2%減）、とうもろこしは3,683万ヘクタール（同3.8%減）といずれも減少見通しである一方、大豆は3,541万ヘクタール（同4.7%増）の見通し。また、小麦、とうもろこし、及び大豆いずれも前年度より単収が上昇する見通し。これらの結果、2024/25年度の生産量は、小麦5,171万トン（前年度比4.9%増）、とうもろこし3億8,203万トン（同2.0%減）、大豆1億2,261万トン（同8.2%増）となる見通し。

輸出量については、とうもろこしは、世界の貿易市場の拡大に伴う輸出増の期待から5,461万トン（前年度比2.4%増）、小麦は前年度減の反動で増加し、2,109万トン（同6.9%増）、大豆は供給増により5,103万トン（同9.0%増）となる見通し。

なお、期末在庫率については、小麦が40.3%、とうもろこしが17.2%、大豆が9.9%といずれも2023/24年度より上昇し、需給が緩和する見通し。

3 南米：ブラジルは減産もアルゼンチンは増産見通し

ブラジル食料供給公社（CONAB）の2月見通し（2024.2.8）によれば、悪天候で単収が低下し2023/24年度の穀物・油糧種子の生産量は対前年比6.3%減の2億9,980万トンとなっている。このうち、これから収穫を迎える大豆の生産量は1億4,940万トン（対前年度3.4%減）の見通し。また、とうもろこしは生産量全体の8割を占める冬作の作付けが開始されており、生産量は1億1,370万トン（対前年度13.8%減）の見通し。

一方、アルゼンチンの大豆やとうもろこしは生育期を迎えており、1月中旬までは降雨に恵まれてたものの、1月下旬から2月当初は乾燥傾向に転じた。ブエノスアイレス穀物取引所の週報（2024.2.15）によれば、大豆の生産量は5,250万トン（前年度比150%増）、とうもろこしの生産量は5,650万トン（同66%増）。収穫が終了した小麦の生産量は1,510万トン（同24%増）。輸出税に関しては、ミレイ新政権誕生後、引上げの検討もされたが、農業団体等の強い抵抗を受けて断念し、当面の間、以前から変更なしとみられる。

アルゼンチンでは、遺伝子組換え小麦が商業栽培されており、小麦の中国向け輸出が認めれたことから今後の動向に注視が必要。

4 中国：「食糧安全保障法」公布

中国政府は、2023年12月に食糧安全保障法を公布した。食糧とは、穀物、豆類、イモ類をまとめた概念。全11章からなり、総則、耕地保護、食糧生産、食糧備蓄、食糧流通、食糧加工、食糧緊急対応、食糧節約などの項目で構成される。

耕地保護では、耕地総量の保全、転用耕地の補償等、食糧生産では、種子や生産資材の安定供給、水利インフラの整備など生産振興について定められている。

食糧備蓄では、中央政府・地方政府の備蓄と、食糧加工業者の備蓄の確立、農家・農業企業等の自主備蓄の奨励が定められている。

食糧緊急対応では、突発事態による需給と価格の異常な変動に対応した買入れや売渡、輸送などが定められている。

2月3日に公表された中国政府と共産党の中央一号文件でも、食糧安全保障が冒頭の項目で取り上げられている。

II 2024 年 2 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、1 月末、210 ドル/トン台後半で推移。2 月に入り、ロシア産との競合やドル高による低下も、安値による買戻しから 210 ドル/トン台半ばから 220 ドル/トン台前半で上下。その後、2 月 15 日・16 日に開催された米国アウトルックフォーラムで 2024/25 年度の米国産期末在庫量が予想を上回ったことや、ウクライナ産、ルーマニア産との競争の激化から値を下げ、2 月中旬現在、200 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、1 月末、170 ドル/トン台後半で推移。2 月に入り、南米の降雨予想や米国農務省需給報告の米国産期末在庫が市場予想を上回ったことから 170 ドル/トン台前半まで下落。その後、下げの反動での買戻しがあったものの、2 月 15 日・16 日に開催された米国アウトルックフォーラムにおいて米国産の期末在庫率が市場予想を上回ったことにより値を下げ、2 月中旬現在、160 ドル/トン台前半で推移。

コメは、1 月末、670 ドル/トン台前後で推移。2 月に入り、旧正月（2 月上旬）でアジアの市場が停滞したことや、2 月上旬のインドネシア政府の入札が成立しなかったことのほか、2 月末から 3 月初めの乾季米の入荷待ちによる需要の軟化等から値を下げ、2 月中旬現在、620 ドル/トン台後半で推移。

大豆は、1 月末、440 ドル/トン台後半で推移。2 月に入り、米国の週間輸出成約高や南米の生産見通し、高温乾燥や降雨予報を受け上下動したものの、おおむね 440 ドル/トン台前半から 430 ドル/トン台後半で推移。その後、2 月 15 日・16 日に開催された米国アウトルックフォーラムにおいて作付面積、生産量、期末在庫量が市場予想を上回ったことから値を下げ、2 月中旬現在、430 ドル/トン台前半で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より 2.2% 増の 28.10 億トン。消費量は、前年度より 1.7% 増の 28.12 億トンとなり、3 年連続で生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率は前年度を下回り 27.6% となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前年度より、小麦で減少も、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.10 億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.12 億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、とうもろこしで増加も、小麦、コメで減少し、穀物全体で増加し、5.03 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.75 億トンと前年度より減少、期末在庫率は、前年度より減少する見込み。

（注：数値は 2 月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

IV 2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.59 億トン。消費量は前年度を上回り 6.44 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る 20.7% となる見込み。

（注：数値は 2 月の USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：ウクライナ情勢と EU の穀物需給への影響

この2月で、ロシアによるウクライナ侵攻から丸2年を迎える。穀物相場は、小麦が過去最高を記録するなど高騰した侵攻当初からは下落し落ち着いた動きをみせている。一方、ウクライナ産農作物は、黒海からの臨時回廊での輸出に加え、陸路を通じEUの東欧諸国へ輸出されるようになった。ここ数か月、臨時回廊からの輸出が増加している一方、安価なウクライナ産農産物流入に対しEU農家が反発している。最近の動向をまとめた。

注：文中の「2023/24 年度」等は穀物年度で、ウクライナ的小麦は 2023 年 7 月から 2024 年 6 月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P. 27 参照)。

1 ウクライナの穀物・油糧種子の生産は回復途上

図1 ウクライナの穀物・油糧種子生産量の推移

(1) 穀物

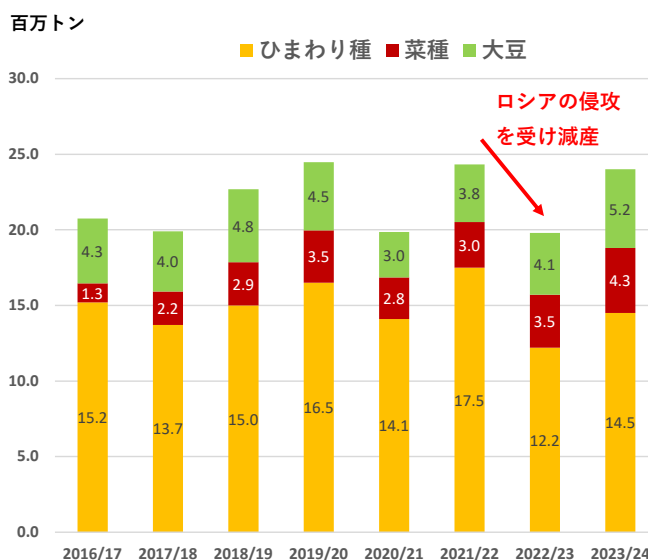
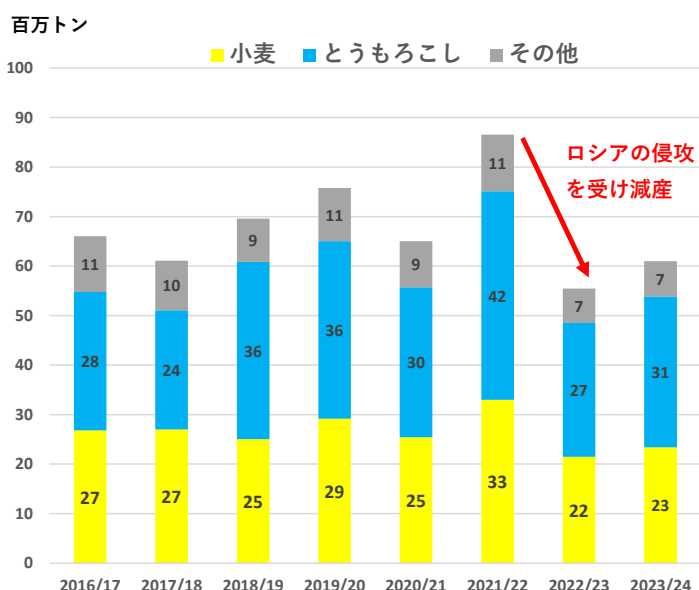
米国農務省の2月見通しによれば、2022/23年度の穀物の生産量は、ロシアの侵攻により引き起こされた、種子や肥料など生産資材の不足や、労働力不足、収穫・備蓄インフラへの影響などを受け、小麦2,150万トン(対前年度35%減)、とうもろこし2,700万トン(対前年度36%減)となり、穀物計で5,543万トン(対前年度36%減)まで減少。

他方、翌2023/24年度は、小麦は2,340万トン(対前年度9%増)、とうもろこしは3,050万トン(同13%増)の見通しであり、天候に恵まれ単収が上昇したのが要因。穀物の生産量は合計で6,102万トンと、対前年度10%増となった。ただ、過去最高の生産量であったロシア侵攻前の2021/22年度と比較すると、小麦は29%減、とうもろこしは28%減で、穀物計では29%減となっている。他方で、2016/17年度から2020/21年度までの5年間平均(6,751万トン)と比較すると1割減の水準までに回復している。

(2) 油糧種子

2022/23年度の油糧種子の生産量は、穀物と同様、ロシアによる侵攻を受け前年度比19%減の1,980万トンまで減少。

他方、翌2023/24年度の油糧種子の生産量は、2,400万トンで対前年度21%増。うち主要製品のひまわり種は1,450万トン(同19%増)、菜種は430万トン(同23%増)で史上



出典：米国農務省「PS&D」(2024.2)による。

最高、大豆も 520 万トン（同 27%増）で史上最高となっている。ロシア侵攻前の 2021/22 年度と比較しても油糧種子計で 1 %減に留まるとともに、2016/17 年度から 2020/21 年度までの 5 年間平均（2,153 万トン）と比較しても 1 割増の水準。

2 臨時回廊からのウクライナ産穀物・油糧種子の輸出増

（1）侵攻直後（2022 年 2 月～6 月）

ウクライナは、ロシアによる侵攻前から、主に小麦やとうもろこし、ひまわり油等を輸出し、小麦の輸出量は、2016/17 年度から 2020/21 年度の 5 年間平均で 1,795 万トンで、主にアジア及びアフリカ諸国向け、とうもろこしは同じく 2,450 万トンの輸出量で、主に中国と EU の西欧諸国向けにそれぞれ輸出されていた。

2022 年 2 月のロシア侵攻以降黒海が封鎖されたことから、ウクライナ産の穀物や肥料の輸出が事実上不可能となった。こうしたことを受け、小麦のシカゴ相場が史上最高を更新するなど穀物相場が高騰し、途上国の穀物輸入にも支障が出た。ウクライナは、隣接する EU の東欧諸国経由でトラックや鉄道を利用した陸路での輸出を試みようとしたが、鉄道の軌道幅が異なることや、貯蔵・輸送施設のインフラが未整備なこと等の事情もあり、穀物・油糧種子の輸出量は毎月 100 万トンから 200 万トン程度へと大幅に落ち込んだ。

（2）黒海穀物イニシアティブ（2022 年 7 月～23 年 7 月）

こうした中、トルコと国連が、紛争当事者のウクライナとロシアを仲介する形で、2022 年 7 月 22 日から「黒海穀物イニシアティブ」によるウクライナ産穀物輸出が開始された。同時に、ロシア産穀物と肥料の輸出に係る覚書も締結された。同イニシアティブは、2022 年 11 月、2023 年 3 月、同年 5 月にそれぞれ延長され、ロシアが同イニシアティブから撤退する 2023 年 7 月 17 日まで続いた。

黒海穀物イニシアティブが 2022 年 7 月から 2023 年 7 月まで機能していた間、ウクライナは同イニシアティブを通して小麦 891 万トン、とうもろこし 1,687 万トンなど、計 3,283 万トンの穀物・油糧種子を輸出した。輸出先別では、中国向けが 1 位で約 1/4 のシェアを占めた。陸路を含む輸出全体では、小麦は、スペインやルーマニアを中心に EU 向けが多く、また、とうもろこしもスペインやルーマニア等 EU 向けのほか中国向けが中心で、毎月 500～700 万トンの穀物・油糧種子が輸出された。

図2 ウクライナの穀物輸出量の推移

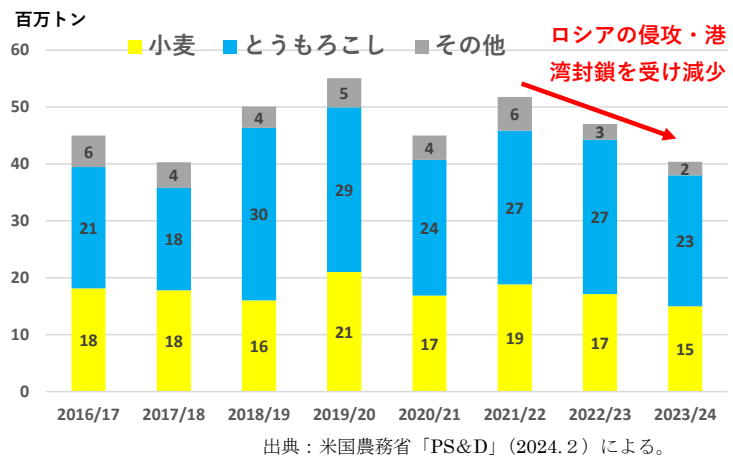
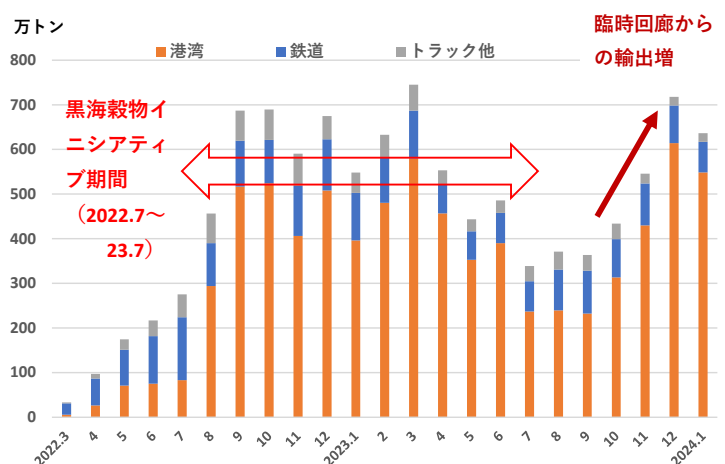


図3 ロシア侵攻以降の月別ウクライナの穀物・油糧種子輸出



(3) 黒海穀物イニシアティブ停止後の臨時回廊からの輸出（2023 年 8 月以降）

ロシアは 2023 年 7 月 17 日に、黒海穀物イニシアティブと同時に結ばれたロシアの輸出に関する覚書が履行されていないとして、同イニシアティブから撤退を表明した。その後、ロシアによるウクライナのオデーサ港等への攻撃も行われ、黒海からの輸出が再度困難となった。陸路での EU 経由の輸出も試みられたが、前述の鉄道の軌道幅の相違等のインフラの制約もあり、ウクライナはルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通る新ルートを IMO(国際海事機関)に通報し、2023 年 8 月以降「臨時回廊」の運用が開始された。穀物・油糧種子の 7 月から 9 月までの陸路を含めた輸出量は毎月 300 万トン台で推移していたが、その後臨時回廊の運用の本格化に伴い輸出量は増加し、12 月は 718 万トンと上記イニシアティブ期に匹敵する輸出量まで増加した。

表 ウクライナの小麦、とうもろこしの輸出時期別輸出先シェア

ロシアの侵攻後、東欧諸国への輸出が増加し、アフリカ諸国向けは減少した。

2023 年 5 月以降、東欧 5 か国向け禁輸（その後ルーマニアは解除）、スペイン増。

2023 年 7 月以降、中国向け減少

輸出先シェア の推移 (%) (万トン)	2020年7月－2021年6月 ロシア侵攻前		2022年3月－7月 ロシア侵攻直後		2022年8月－2023年6月 黒海穀物イニシアティブ期		2023年7月-10月 臨時回廊期	
小麦	インドネシア	15.7	トルコ	25.9	トルコ	21.4	スペイン	30.9
	エジプト	14.8	ルーマニア	24.2	スペイン	15.5	ルーマニア	20.7
	パキスタン	8.4	エジプト	20.2	ルーマニア	15.1	エジプト	12.2
	バングラデシュ	6.8	レバノン	7.0	バングラデシュ	6.6	トルコ	4.9
	モロッコ	6.5	イエメン	5.4	ポーランド	5.3	イタリア	4.7
	その他	47.9	その他	29.6	その他	47.9	その他	36.2
	月平均輸出量	138.7		20.1		150.6		115.8
とうもろこし	中国	35.6	ルーマニア	34.1	中国	19.7	イタリア	20.4
	オランダ	10.7	ポーランド	20.8	ルーマニア	15.6	スペイン	14.5
	エジプト	10.1	ハンガリー	7.6	スペイン	11.2	エジプト	11.9
	スペイン	8.3	中国	7.5	エジプト	7.4	オランダ	9.5
	イラン	5.5	トルコ	5.2	イタリア	7.3	ドイツ	7.7
	その他	29.8	その他	24.8	その他	38.9	その他	36.0
	月平均輸出量	199.0		109.0		256.5		95.1

現地調査会社調べ。黒海穀物イニシアティブや臨時回廊、陸路などすべての輸出の計

3 東欧諸国への影響と抗議活動

(1) 東欧諸国への影響

2022 年 2 月のロシアによるウクライナ侵攻以降、陸路経由を含む東欧へのウクライナ産の流入が増加したことから、東欧諸国の要望を受け、EU は 2023 年 5 月からウクライナに隣接するポーランド、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア及びブルガリア向けのウクライナ産小麦、とうもろこし、菜種及びひまわり種の輸入規制（第 3 国向けのトランジットを除く）を決定した。

しかし、2023 年 7 月に黒海穀物イニシアティブが停止し、陸路等によるウクライナ産農産物の東欧への流入が想定される中、EU が同年 9 月 15 日に輸入規制の解除を決定したことを受け、ポーランドを始めとする東欧諸国はこれに反発し、独自にトランジットを除くウクライナ産農産物の輸入規制を実施した。特に 2022/23 年産が豊作となったポーランドでは特に反発が強く、11 月以降、一部の農家やトラック運転手がウクライナとの国境検問所でたびたび抗議活動を行った。1 月中旬には上記東欧 5 か国の農相が不公正な競争を理由にウクライナの穀物に輸入関税を課すよう EU に要求したが、EU 側が拒絶。さらに、報道によれば、本年 2 月には、ポーランドでも通過が認められているリトアニア向けのウクライナ産穀物輸送トラックへの妨害行為が行われた。

ルーマニアでも農家の抗議活動が行われたが、ルーマニアはウクライナが提示した輸出管理メカニズムの調整に合意し、10月に小麦やとうもろこしの輸入禁止を解除した。こうした動きがみられる中で、東欧諸国向けに実際に流入するウクライナ産穀物はわずかとみられる。

また、東欧諸国を経由した第三国向けのトランジットについては認められているものの、報道されたウクライナ産農産物輸出に対応したグダニスク港（ポーランド）やコンスタンツァ港（ルーマニア）の整備については、現在進行中であるが完成の目途は立っていない。

（2） 西欧への広がり

東欧諸国の農家の抗議活動は、肥料や燃料コストの上昇、EUの環境政策や貿易自由化政策（南米メルコスールとの通商協議、安価なウクライナ産の流入など）に反対する形で、本年1月以降、ドイツやフランス、ベルギーまで拡大し、各国の首都へ向かう道路でトラクターが縦列し、物流を阻害するような事態まで発生した。

（3） 抗議活動の背景

ウクライナが東欧5か国の輸入規制に反発する中、東欧諸国の抗議活動を受け、チェコの農相は、1月下旬、ウクライナ産農産物輸入の関税免除を継続するに当たり、東欧5か国が実施している輸入規制には反対する姿勢を示した。さらに、EUの農家に環境保護の観点で課せられている休耕地の比率や、動物福祉の観点で定められている家畜の飼育基準が求められている中で、EUに輸入されるウクライナ産農産物に対しても同等の基準を求めるよう主張した。生産コストを要するEUの基準を域内農家に求める一方、EUの基準を求めないウクライナ産などを安価に流入させることへの反発が抗議活動の背景にあるとみられる。

4 世界の穀物貿易に与える影響

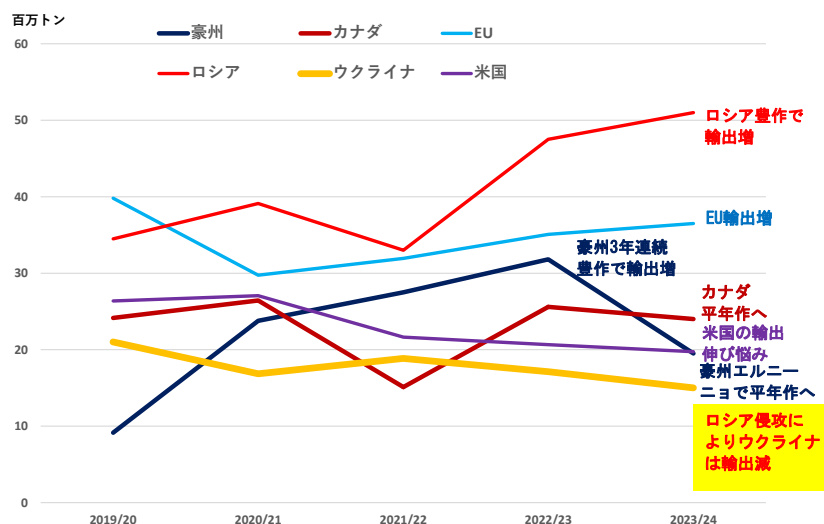
（1） 小麦貿易への影響

ロシア侵攻による穀物輸出への影響は、黒海穀物イニシアティブやその後の輸出回廊による輸出で一定程度緩和されたが、輸出先については大きく様変わりし、国際穀物貿易の商流に大きな影響を与えた。

小麦については、ウクライナから侵攻前に輸入していたインドネシア、エジプト、パキスタンなどアジア・アフリカの穀物輸入国は、他国か

らの調達に切り替えざるを得なかったとみられる。ロシア侵攻のあった2022/23年度は、豪州及びロシアの小麦の生産量が史上最高となったほか、世界の小麦輸入の上位を争うインドネシアは豪州産の輸入比率を増加させ、さらに、エジプトはロシア産の輸入を増加させたとみられる。豪州等の輸出国でウクライナの減産分がカバーされたが、豪州の輸出港が混雑し、輸送コストが増加するなど輸入国にとっては調達先の変更だけでなく輸入コス

図4 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2024.2）による。

トの増加につながった。特にアフリカ諸国への影響が大きかったとみられる。そこで、ロシアは小麦に輸出税を賦課しているにもかかわらず、友好的なアフリカの特定国向けに穀物の無償供与等を行う旨表明し、輸出シェアを拡大しようとした。

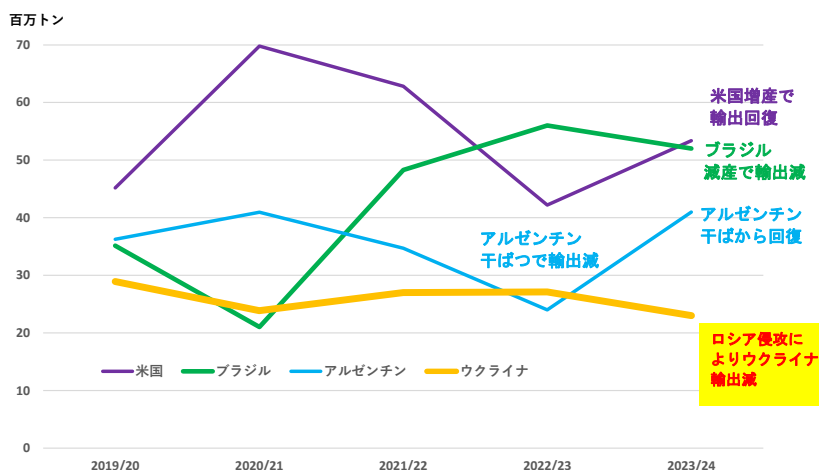
こうした中でウクライナ産小麦の輸入を増加させたのはスペイン、ルーマニア等の東欧諸国であり、スペインは2年連続の干ばつの影響で輸入が増加したのが要因とみられる。

(2) とうもろこし貿易への影響

とうもろこしについては、2022/23年度干ばつ被害を受けたEU諸国向けが増加し、4割近くのシェアを占めていた中国向けが減少した。中国は大豆調達の関係でブラジルの穀物インフラへの投資を行ってきたことから、とうもろこしについてもブラジルからの調達を進めた。

2022年末からブラジルからの中国向けとうもろこしの輸出が開始されると、ブラジル農家の冬とうもろこしの作付意欲を刺激し、2022/23年度は過去最高の生産量となった。他方、EUはもともとウクライナ産とうもろこしを輸入していたが、小麦同様、干ばつ被害を受けたスペインが目立っている。

図5 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2024.2)による。

(3) 国際穀物価格への影響

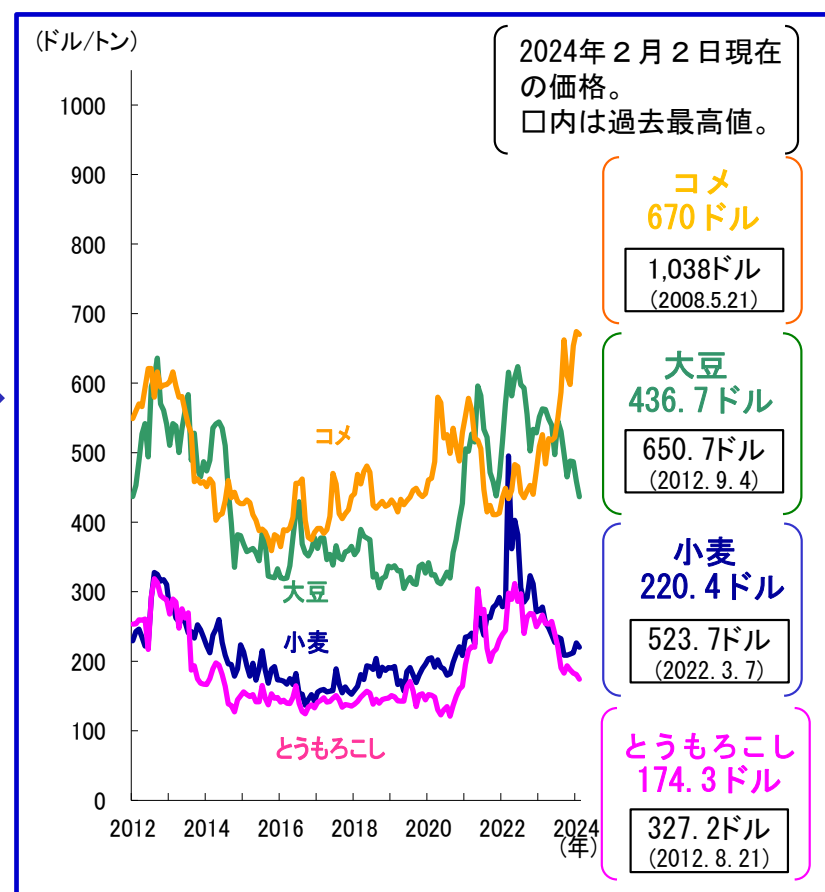
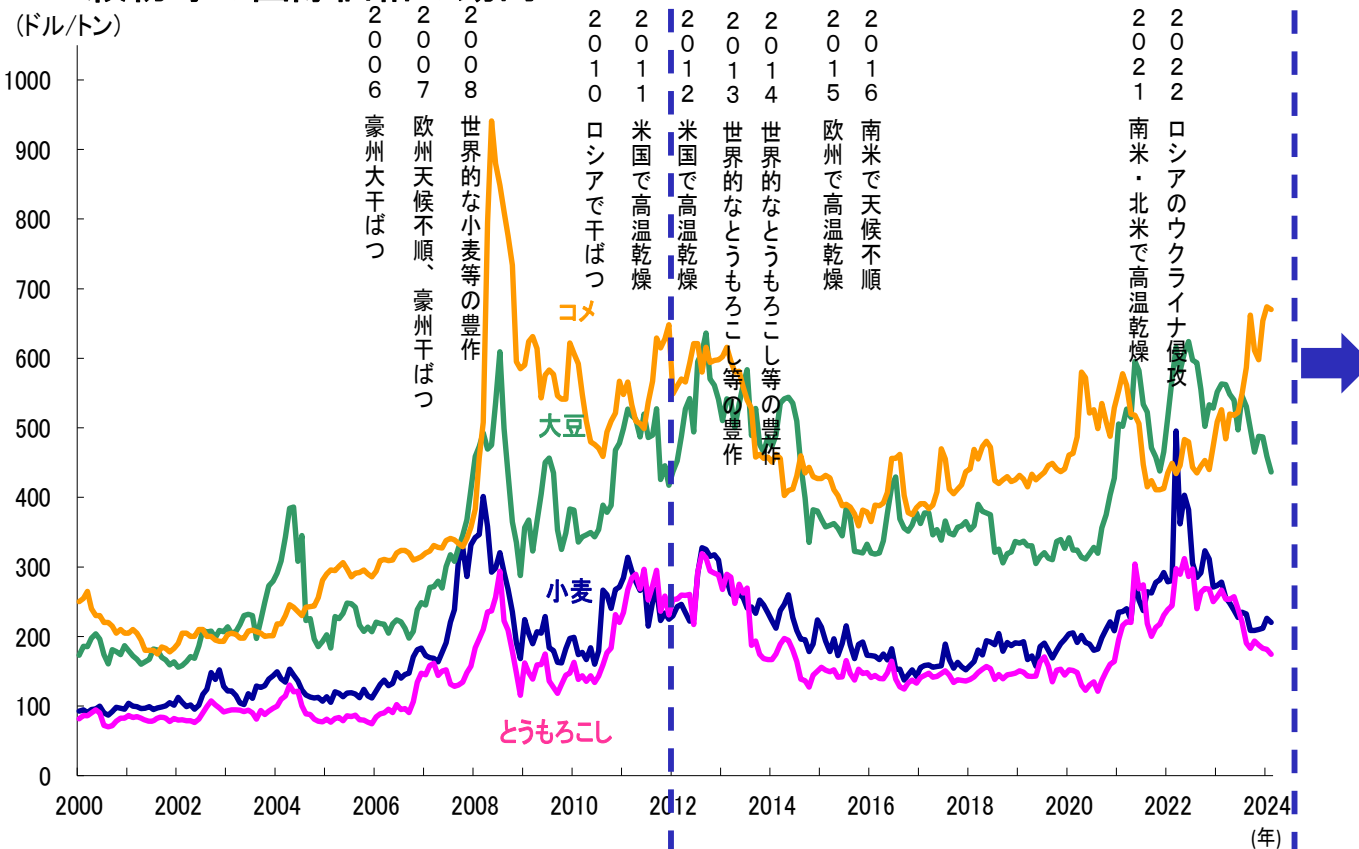
2022年前半は、ロシアのウクライナ侵攻を受けシカゴの小麦相場が14ドル/ブッシェルを超え史上最高値を記録するなど穀物価格が高騰したが、2022年後半以降、黒海穀物イニシアティブの運用の本格化に加え、輸入国側はウクライナ産とうもろこしをブラジル産へ、また、ウクライナ産小麦は豪州、ロシア産など他国産への切り替えもあり、穀物価格は徐々に落ち着きを取り戻した。2023年以降は、米国や中国でのとうもろこしの史上最高の豊作や、ロシアでの小麦の史上最高の5,100万トンの輸出見通し、さらには前年度に60年ぶりの干ばつを経験したアルゼンチンの増産などの状況を受け、本年2月中旬にはシカゴ相場の期近物でとうもろこしが4ドル/ブッシェル台前半、大豆が12ドル/ブッシェルを下回り、2020年12月以来の3年2か月ぶりの安値となるなど下落している。

EUやウクライナに関しては、ウクライナの穀物輸出が臨時回廊経由で順調に実施されており、陸路輸送に対する東欧における農家の抗議活動を受けた影響は現時点では軽微とみられている。一方、EUは、前年度の干ばつにより減産したとうもろこしについて2023/24年度は生産量が回復したものの、中国に並ぶ2,300万トンの輸入を行う見通しである。今のところ、抗議活動に参加しているのはEUの中でも一部の農家に限られているが、今後EUが打ち出す農業政策がEU及びウクライナにおける2024/25年度のとうもろこし等の作付動向に影響を与えた場合、生産動向いかなるウクライナ以外からのEUの調達量が増加することも想定され、国際穀物相場へ影響を与える可能性もあり、引き続き状況を注視していく。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの一時的な輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時の高騰から低下も、南米の乾燥等から侵攻前と比較し依然として高水準。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制導入と強化、インドネシアのエルニーニョによる減産を受けた需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



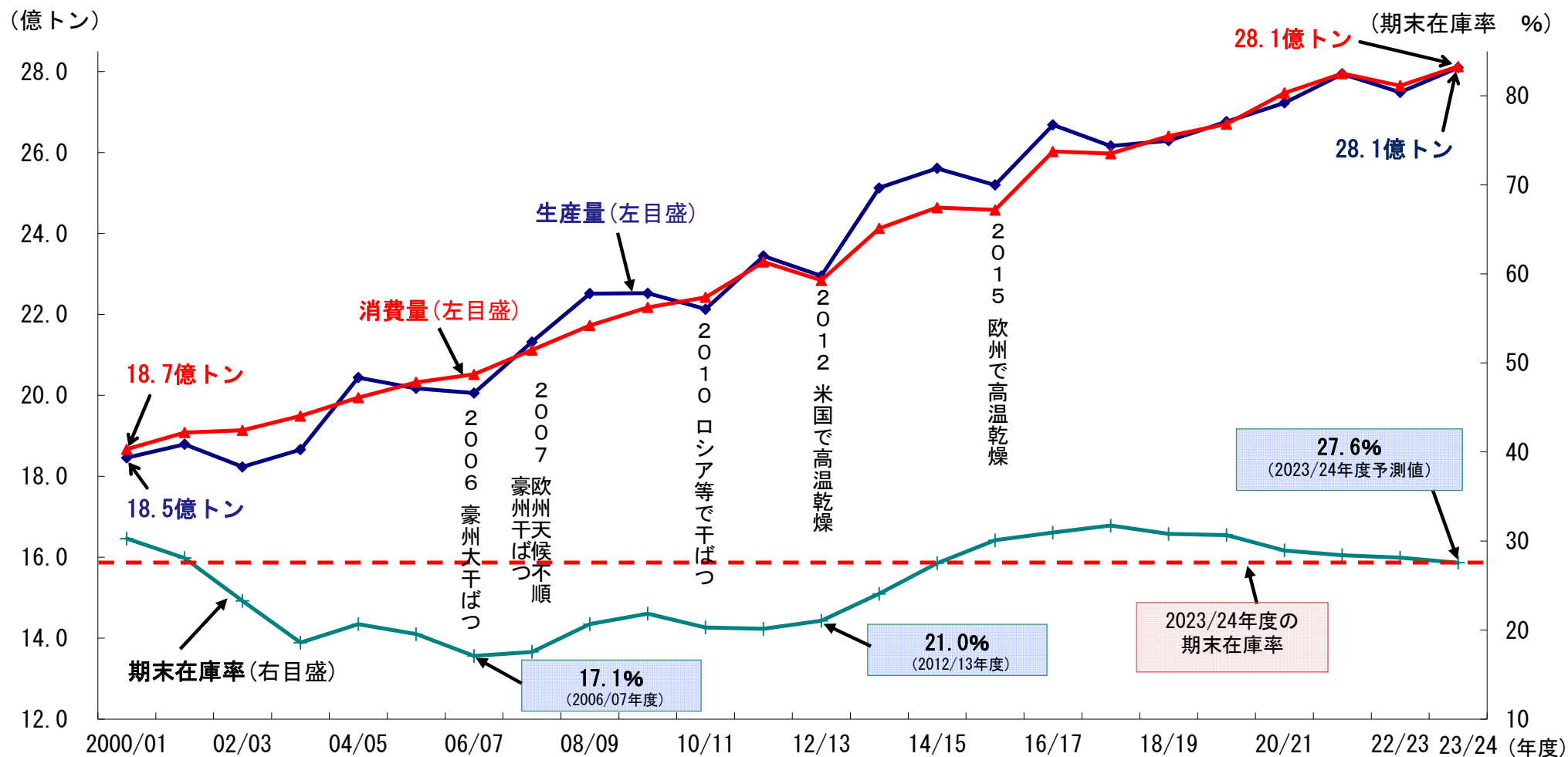
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。
なお、コメ価格は2024年1月31日の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2023/24年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2023/24年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、27.6%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

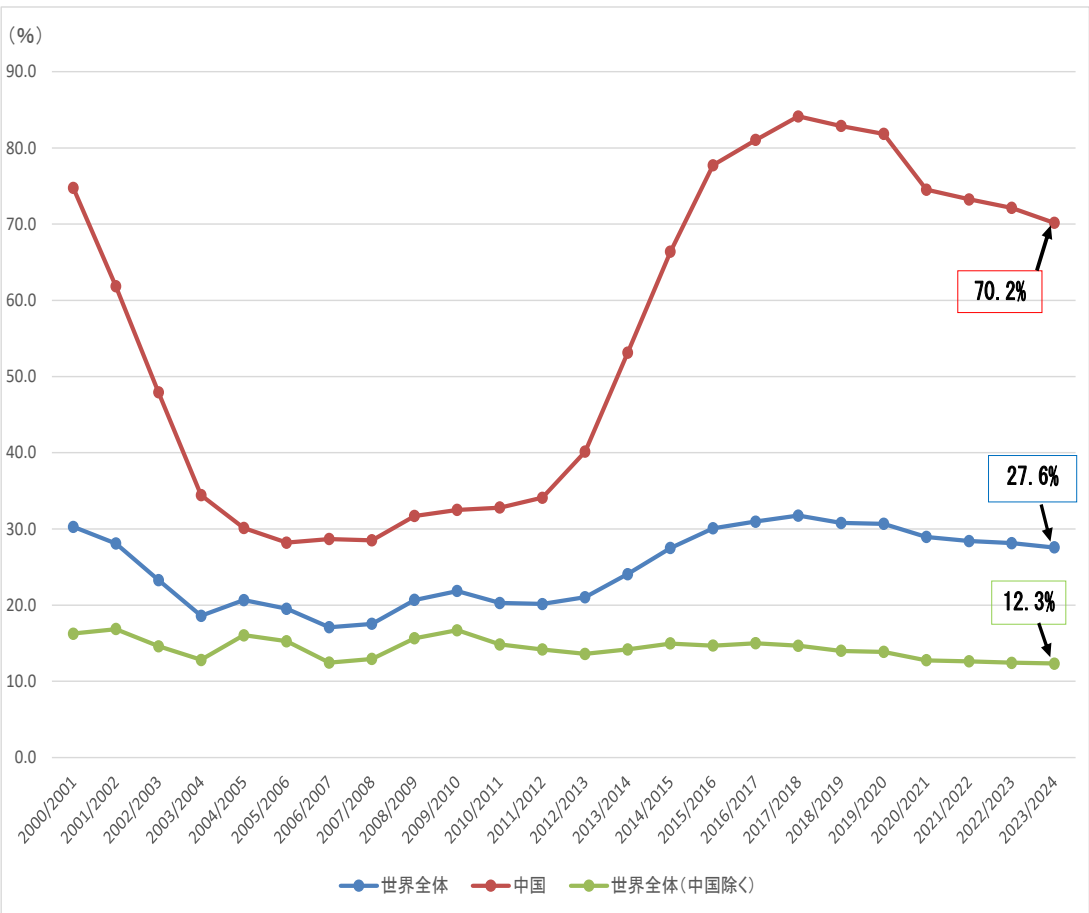


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(February 2024)、「PS&D」

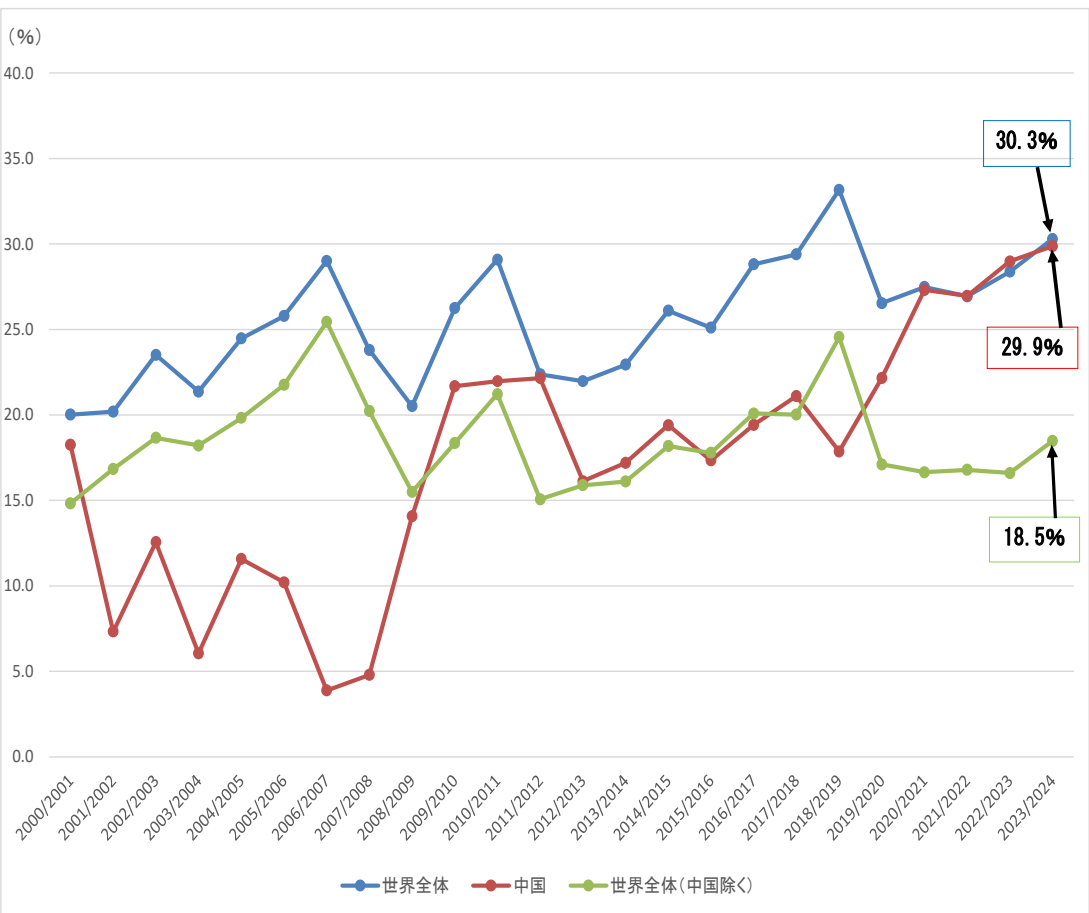
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



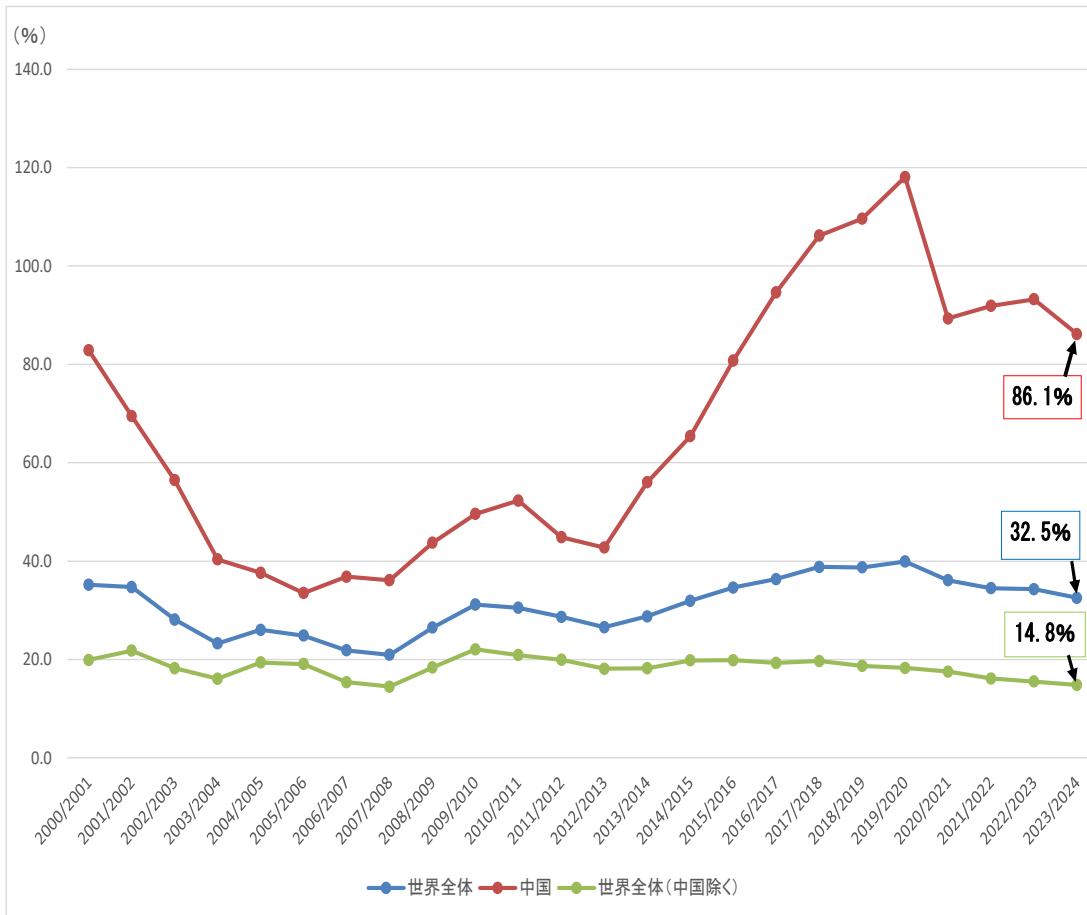
○ 大豆の期末在庫率の推移



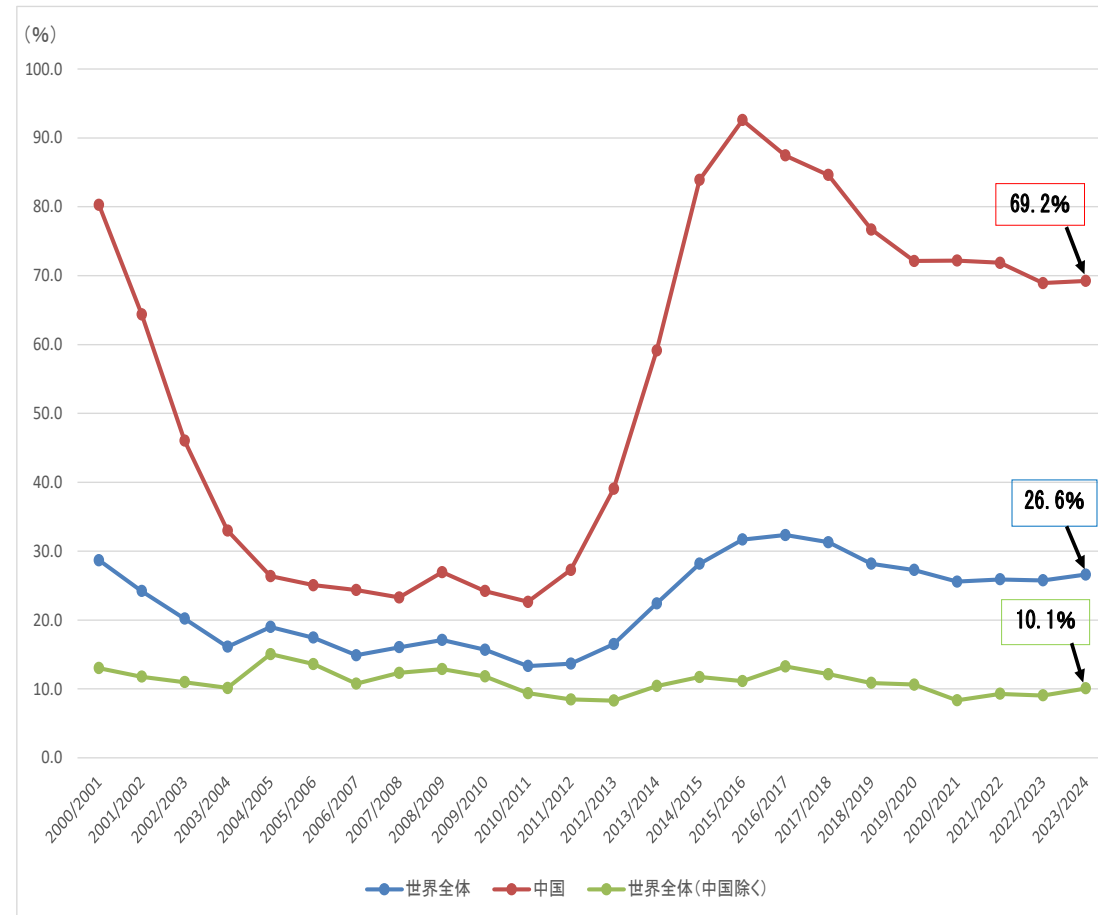
資料: 米国農務省「PS&D」(February 8, 2024)
 注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。
 2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100
 3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100
 4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(February 8, 2024)

注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

2)世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／(消費量＋輸出量－輸入量)×100

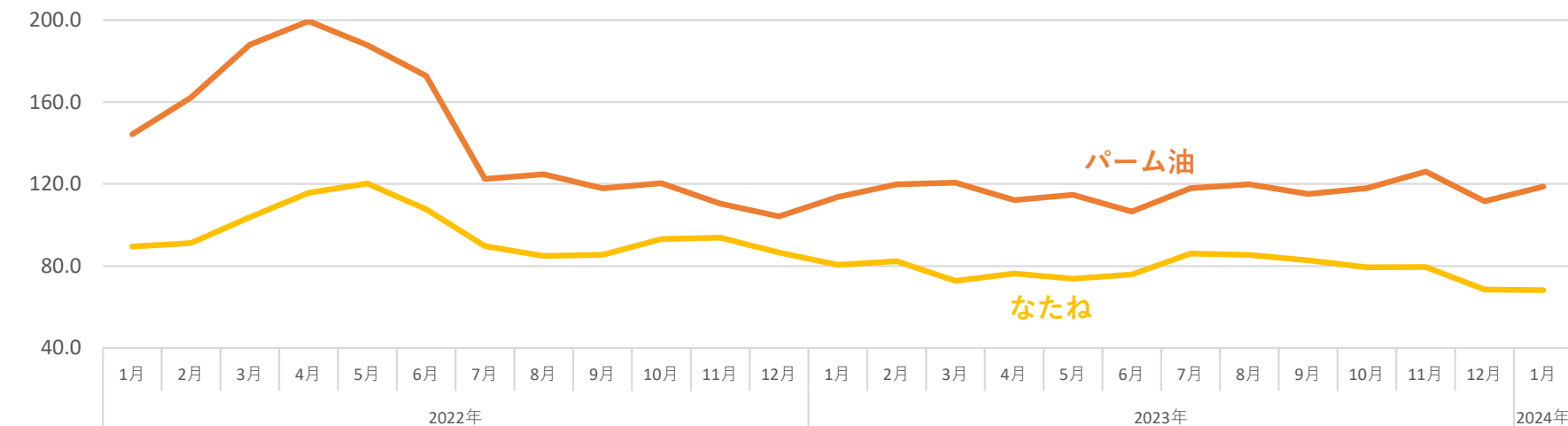
3)中国の期末在庫率(%)＝中国の期末在庫量／(中国の消費量＋中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)＝中国除く期末在庫量／(中国除く消費量＋中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油の需要の面では、世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などにより市場価格上昇の要因となっている。
- なたね、パーム油の供給の面では、なたねについては、**2021年**に主産地であるカナダで減産があったが、**2022年**以降は回復基調から平年並みの収量に近づいた。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日**解除）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも**2022年**の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面では、従来はアメリカやヨーロッパが消費の中心であったが、近年は中国やインドといった人口の多い国での消費の拡大等により、コーヒー消費量が増加したことを受け市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。

(千円/トン)

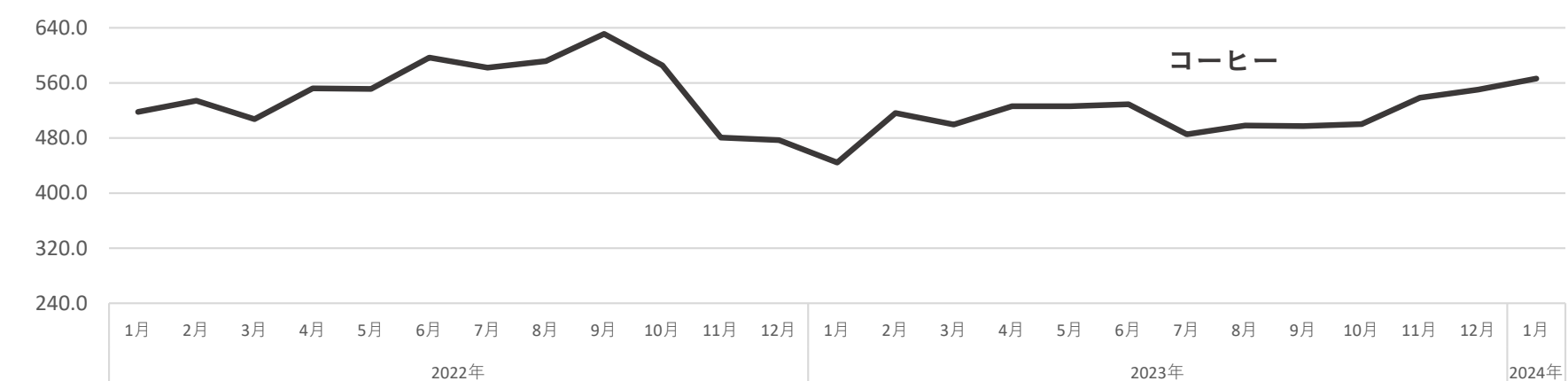


2024年2月20日現在
□内は2022年1月以降の最高値。

パーム油
118.7 千円/トン
199.5 千円/トン
(2022.4)

なたね
68.2 千円/トン
120.3 千円/トン
(2022.5)

(千円/トン)



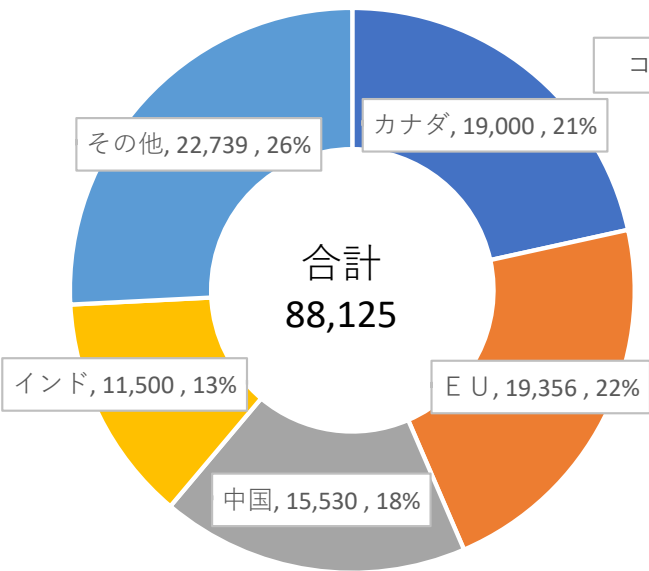
コーヒー
566.3 千円/トン
631.1 千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

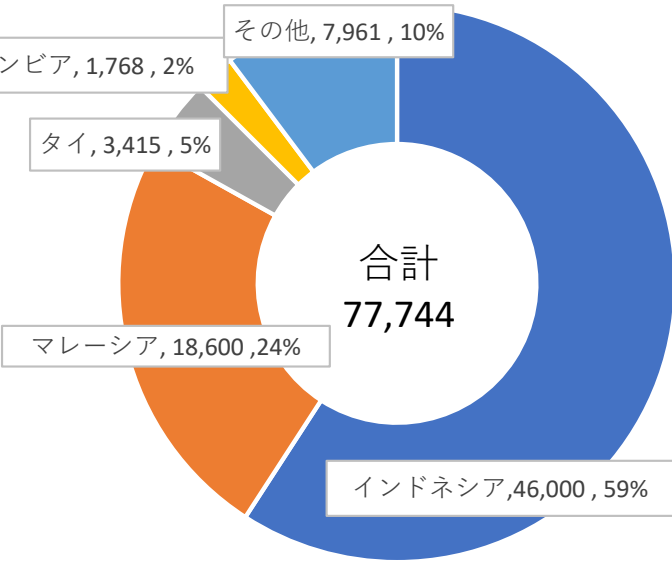
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）
（単位：千トン）



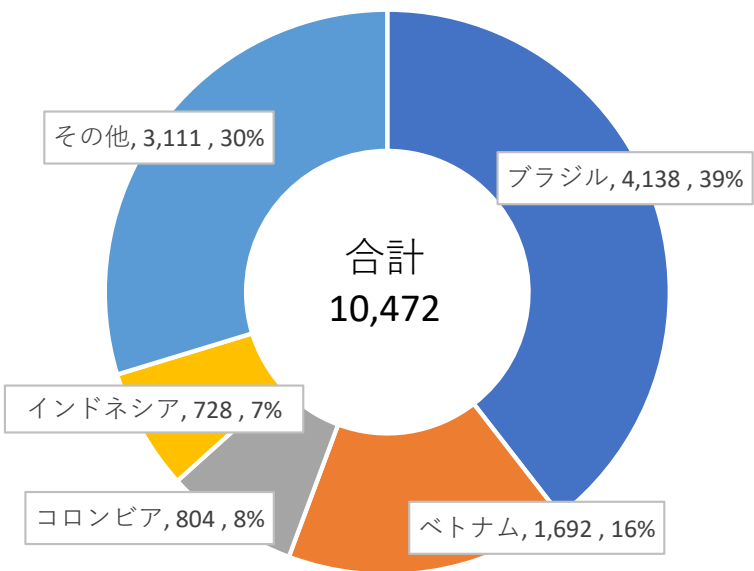
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2022/23）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2											
前月比	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5											
前年同月比	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6											

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7											
前月比	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4											
前年同月比	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4											

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コ ヒ	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3											
前 月 比	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9											
前 年 同 月 比	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4											

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和6年1月の国内の加工食品の消費者物価指数は111.5～153.5（前年同月比で-6.8%～20.7%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和5年8月～令和6年1月）

消費者物価指数（総務省）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5					R6	
品目	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	122.9	122.5	122.7	123.2	122.7	122.1	6.2%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	125.8	123.3	125.7	122.9	122.2	122.2	8.1%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	115.9	116.3	117.2	117.0	117.2	116.9	6.0%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	158.8	157.7	156.6	154.8	153.2	152.8	-6.8%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	107.5	108.8	110.8	111.4	111.0	111.5	6.7%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	155.7	154.7	154.2	153.9	154.7	153.5	11.8%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	136.2	135.0	135.2	135.0	131.3	133.0	11.6%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	112.2	111.5	111.6	111.3	115.5	119.0	20.7%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	113.8	114.3	114.8	115.2	115.1	115.0	5.9%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料: 総務省消費者物価指数

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和5年8月～令和6年2月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5					R6			
品目	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	118.6	118.2	118.0	117.1	118.6	117.6	117.4	-0.2%	6.1%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	122.8	121.6	122.2	122.2	121.6	119.8	121.0	1.0%	8.8%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	114.6	114.1	114.6	114.1	114.6	114.6	114.6	0.0%	6.0%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	158.7	158.7	156.8	155.5	153.3	153.3	151.4	-1.2%	-6.7%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	105.2	105.6	109.4	110.0	110.6	110.2	110.4	0.2%	6.8%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	143.7	144.1	144.8	143.7	143.7	144.1	144.4	0.2%	12.0%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	130.7	130.7	130.3	130.7	122.3	125.8	128.8	2.4%	8.8%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	111.4	110.7	111.4	110.5	115.0	118.3	118.5	0.2%	20.2%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2024年3月号（2月26日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）23年の牛肉生産量は前年比4.7%減、24年も減少の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003120.html

（EU）23年10月の牛肉生産量は主要生産国で前年同月を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003121.html

（豪州）24年1月の肉牛価格、降雨による牧草肥育農家の需要増で上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003122.html

（NZ）23/24年度の牛肉生産量、輸出量ともに前年度を下回る見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003123.html

◆豚肉

（カナダ）23年の豚と畜頭数は前年比0.5%増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003124.html

（チリ）23年の豚肉輸出量は3年ぶりに増加の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003125.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）23年12月の乳価は前年同月比16.6%安

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003126.html

（EU）23年11月の生乳出荷量は減少、乳価は上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003127.html

（NZ）バターやチーズなどの輸出量が減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003128.html

（中国）23年の生乳生産量は過去最高、乳製品輸入量は大幅減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003129.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）世界のトウモロコシ生産量は上方修正、引き続き過去最大の生産見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003130.html

（世界：大豆）米国の増産などで世界の大豆期末在庫は上方修正、引き続き前年度増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003131.html

（米国）米国のトウモロコシ生産、輸出は大幅増も、生産者平均価格は下落見込み

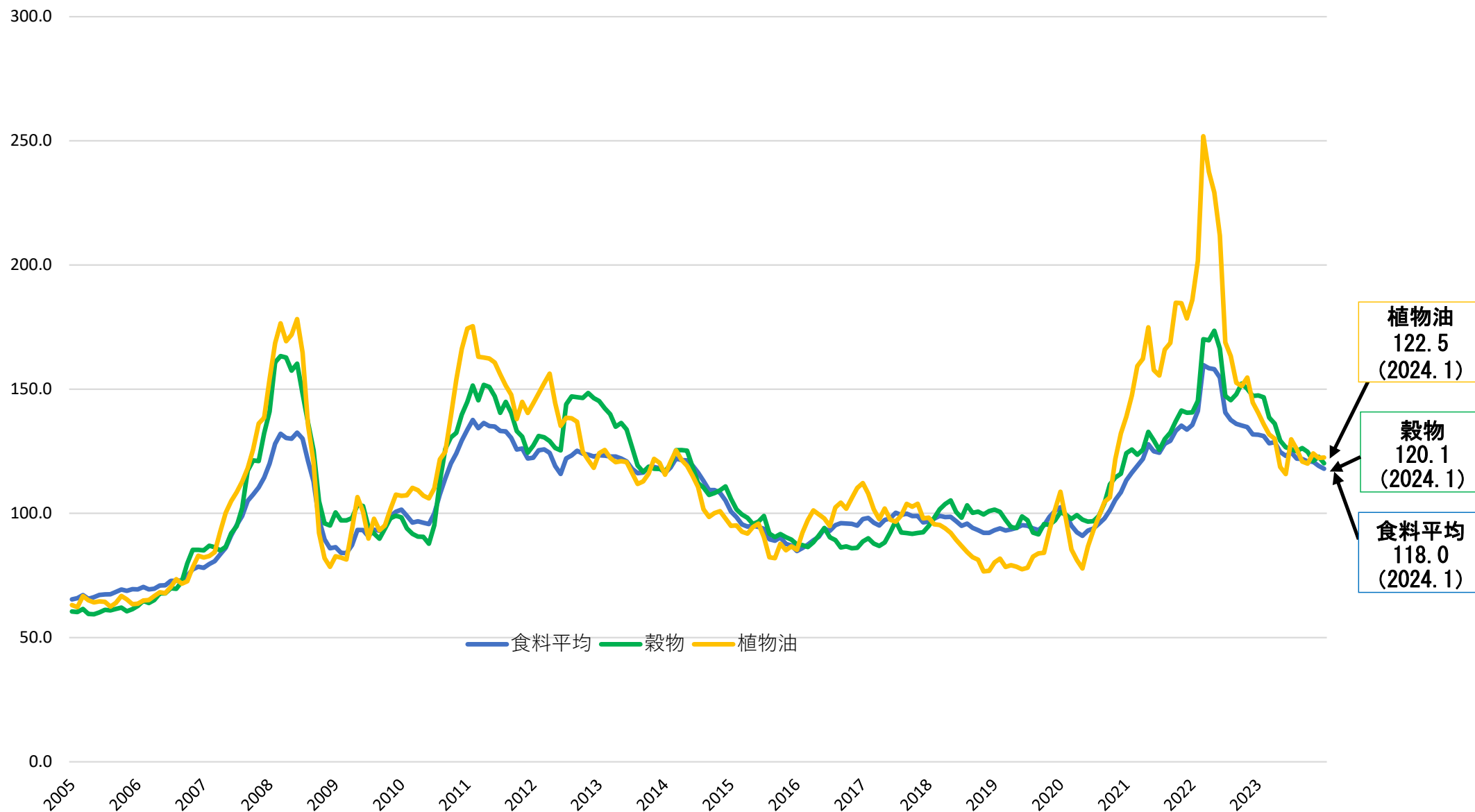
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003132.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003133.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2024.2)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

インドの食料事情（３）：食文化②

1 はじめに

前回に続き、今回もインドの消費シーンをみていきます。直近の統計では、インドの飲食料品消費額は 43 兆ルピー（約 64 兆円（2021 年平均レート 1.48 円/ルピーで換算））と日本の半分程度。しかし、過去 10 年間の年平均成長率は名目で 11.1%、実質で 5.2%（2011 年基準）と高い成長を続けています。最終回の今回は、この市場で何が消費されているのかの一端を紹介します。

2 インドの食シーン（前回の続き）

（１）主食

主食については、パン又はコメとなりますが、まずはインドのパンの概観を下图に示します。



図 主なインドのパンの外観 （画像：Dreamstime, Freepik, Pixabay）

コムギを使ったものとしては、全粒粉（現地では「アッタ」という）を使う「チャパティ」、「ブーリー」といったもの、精製したもの（現地では「マイダ」という）を使うナンがあります。日本では、インドの主食は「ナン」というイメージがありますが、現地では、普段使いは全粒粉の方が好まれている印象で、「チャパティ」の方が一般的という印象です。

また、コムギを使ったパンに「パラタ」という、ギー（バターオイル）を塗り、何層にも折り畳んでミルフィーユ状にして焼いたパンもあります。これにジャガイモやカリフラワーを煮たものを挟み込んで弁当として食べられるのも一般的です。

コムギだけではなく、米粉もよく使われています。米粉と豆粉と混ぜ合わせて、クレープ状の「ドーサ」は南インドの定番のパン。同様に米粉と豆粉を溶いたものを蒸して作る「イドゥリー」は、どこかのホテルの朝食バイキングで必ず見かける定番メニューです。筆者が最も好んだインドのパンに「アップラム」と呼ばれるものもあります。これは、米粉をココナッツミルクと水で溶いて、発酵させ、クレープ状にして焼いたものになります。ふわっと軽く、ほんのり甘いのですが、これはいくらでも食べられます。日本のインド料理店でもよく見かける「甘くないドーナツ」こと「ワダ」は豆粉から作られています。

コメについては、もちろん米粉で利用されているだけではなく、炊いたものをそのまま食べられることも多いです。インドと言えば、インディカ米（長粒種米）、特に香りの特徴的なバスマティ米というイメージがあるかもしれませんが、長粒種米だけではなく、短粒種米も含めさまざまなコメ

が栽培・流通しており、それぞれの地域で食されています。第1回で紹介した北東部では、もち米をちまきにしています（コメと関係ありませんが、北東部には納豆もあります（笠井（2023）も参照））。

インドのコメ料理と言えば、「ビリヤニ」を外せません。最近、日本でも、インド版炊き込みご飯として、人気があるという話も聞きます。この「ビリヤニ」は、インドの各地域でそれぞれのスタイルがありますが、有名なものは「ハイデラバード・ビリヤニ」ではないでしょうか。ハイデラバード・ビリヤニは、現在の形は、ニザーム藩王国（又はハイデラバード藩王国）の時代に、ムガル料理（ムガル帝国時代に確立されたインド宮廷料理）の影響を受けて作られたとも言われています。インドの炊き込みご飯として「プラオ」（ビリヤニと調理方法が異なり、ビリヤニよりもカジュアルで家庭料理）というものがあり、（起源について諸説ありますが、）ペルシア料理の流れを汲むものと言われています。主に北インドの歴史は、10世紀以降、ペルシアのイスラーム王朝の支配を受け、16世紀のムガル帝国でイスラーム文化とヒンドゥー文化の習合が進んだと考えられていますが、ムガル料理はその代表的なもので、ビリヤニやプラオにもそうした歴史の流れが凝縮されているように思います。実際、ムガル帝国の故郷とも言えるウズベキスタンには「プロフ」という炊き込みご飯がありますが、スパイスの効き具合を除けば、ビリヤニやプラオと瓜二つです（筆者個人は、プロフの方が日本人好みではないかと思っています）。



写真 左 ハイデラバード・ビリヤニ、右 プロフ

（2）フードデリバリー

歴史の話から現代の話に戻します。コロナ禍を経て日本でもフードデリバリーの利用が増えましたが、インドでは、IT先進国と豊富なマンパワーを活かし、より先に進んでいる印象があります。

そもそも、インドのムンバイでは、家庭で作った弁当を仕事場まで配達する弁当配達システム「ダッパワーラー」というものがあります（2013年に公開された邦題「めぐり逢わせの弁当」は、ダッパワーラーをモチーフとしています）。100年以上の歴史を有するこのシステムは、組織化・ロジスティクスの観点で優れており、ハーバード・ビジネス・スクールでも研究されたりしているそうです。

こうした伝統的なシステムに加えて、ITが活用され、インドのフードデリバリーのシステムがインド全土で展開されています。インド・フードデリバリーの最大手は Zomato（ゾマト）という現地スタートアップ企業であり、コロナ禍直前に、Uber Eats（ウーバー・イーツ）のインド事業を吸収し、コロナ禍を経て、顕著に成長しています。この Zomato をはじめ、インドのフードデリバリーは、インド人のみならず、駐在員にとっても重要なライフラインとなっています。同様に、食料品デリバリーの事業も大都市中心に急速に普及しており、最近では、こうしたデリバリー事業者がクイックコマース（注文して最短10分程度で商品を受け取ることができるサービス）も開始し、一般化しています。



写真 左 Zomato の配達員（電動原付に赤いユニフォームは定番）、右 配達してもらった「モモ」（インド中華の餃子）
（筆者同僚撮影）

(3) ストリートフード

インドの日常食シーンとして外せないのが「ストリートフード」です。街中を走れば、至る所に屋台が出ていて、屋台の周りには、食事をしながら、談笑している様子がそこかしこで見られます。前回紹介した雑穀を用いた岸田総理の歓待に際しても、インドの食文化を代表するものは「ストリートフード」であるとして、両首相が散歩する公園内に、(品のよい)屋台を設置するという演出をしていました。

また、インドのストリートフード事情の詳細については、さまざまなストリートフードを照会している YouTube チャンネル「今日ヤバイ奴に会った」を観ていただくとより理解が深まると思います。ただし、外務省のインドの衛生・医療情報でも注意喚起していますが、喫食する際は、生野菜や生ジュースには十分気をつけてください。



写真 ストリートフード店とストリートフードを楽しむ様子 (筆者同僚撮影)

(4) パーティー文化

最後に、インドの食シーンの1つとして、インドのパーティー文化を紹介します。

インドの結婚式が、数日にわたる盛大なものであるということは聞いたことのある方も多いかと思います。新郎側・新婦側それぞれの家がホストする結婚式行事が様々あるため、3日から5日程度の期間で開催されることが多いようです。期間だけでなく、招待客も多く、食事・飲料も盛大に振る舞われます。筆者も、大家家族の式と仕事のカウンターパートの方の式と、2度、結婚式に出席する機会がありましたが、どちらも数百人規模の大パーティーで、野外の会場には、ライブステージ、ライブキッチン、バーカウンターが設けられ、非常に賑やかで、人も多いため、どこに新郎新婦がいるのか分からないような様子でした。こうした結婚式は、ヒンドゥー教徒の人生の節目となる儀式の中でも、特に重要視されているようで、結婚する新郎新婦の両親が、時には数年がかりで準備をするそうです。開催費用について、具体的に教えてもらう機会はありませんでしたが、「君の年収の数倍だよ」と言われたことがありました。食事、飲料、そして、花がふんだんに使われるこの一大イベントは、大きなビジネスチャンスでもあるように思われます。

また、このようなパーティーは、結婚式に限られるものではありません。インドの富裕層では、頻繁に、客人を自宅に招待して、知人・友人も招いてのホームパーティーを行い、友人や客人の交流の場が設けられています。こうした大人のパーティーだけではなく、子どもたちの誕生日パーティーも、子どもたちだけでなく、様々な人が招かれて社交の場になっています。富裕層の子女の誕生日パーティーも、ホテルのバンケットホールや庭園で行われる事が多いですが、映画館や屋内遊技場を貸し切ったりすることもあります。このような結婚式以外のパーティーでも、ライブキッチンのカウンターが設けられますが、そこでは、インド料理だけではなく、イタリアン、中華といった料理が出されていることが多いのですが、こうした場所で、寿司を提供することがポピュラーになる日も遠くはないのではないかと期待しています。

3 インドにおける日本食・食文化

(1) 地方まで浸透している日本食品

次に、日本食・日本食品がインドでどのように受け入れられているかを紹介します。

日本食品の海外進出状況として、よく見られている場所は高級スーパーだと思いますが、インドにおいても、高級スーパーに日本食品が並んでいます。主に調味料や乾麺ですが、生産国は東アジアや東南アジアのものがほとんどです。

高級スーパーだけではなく、コンビニでも調味料(主にしょうゆ)を見かけることがありますが、こちらは日本のメーカーのものを米国から輸入したものが並んでいるのを確認したことがあります。

ちなみに、インドでも、コンビニ形態の小規模な食品・雑貨を扱ったチェーン店が登場しており、「24/7 (Twenty-four/Seven)」はその筆頭で、大都市圏では街中や駅ナカで見かけることが多いです。日本のコンビニ勢は、総合小売店への外資規制（出資上限 50%の規制）があることもあり、東アジア・東南アジアのような攻勢とはなっておらず、米国セブンイレブンとインド大手財閥リライアンスがフランチャイズ契約を締結し、3 年前に 1 号店を開店しています。

このように、日本食品の広がりはまだまだ限定的ではありますが、インドの農村部まで広がっている日本食品もあります。インスタント麺（カップヌードル）、柿の種と豆腐です。インスタント麺については、ネスレの「マギー」がインドではインスタント麺の代名詞ともなっていますが、日清食品も奮闘しています。柿の種は、亀田製菓が現地食品大手 LT Foods と合併企業を設立し、KariKari というブランド名で現地生産・販売し、インド市場に広く浸透しています。

そして、豆腐については、食品 EC でも扱われており、ヘルシーな食品として認知されています。都市部だけでなく、農村部にも広がっており、農村部で農家所得向上の施策として、栽培作物の多様化の一環で大豆栽培を指導した後、加工設備の導入等を支援し、豆腐が生産されています。農村部では、主にローカルマーケットで販売・消費されていますが、都市部も含めて、豆腐は、インドのチーズの一種である「パニール」を代用するヘルシーな食品として認知され、消費されています。

（２）外食市場での日本食

先ほど、パーティーでイタリアン、中華のライブキッチンが設けられるという話をしましたが、外食市場でも、イタリアン、中華の勢いが見られます。大都市圏では、イタリア料理店が路面店やショッピングモールへの出店を次々進めているほか、ピザの専門店やチェーン店の出店も堅調であるように見られます。その勢いは、最近の経済紙の記事では、2026 年までに、チェーン等の組織化された飲食店（organized food service industry）が非組織化飲食店（unorganized food service industry）を逆転するとの予測も紹介されています。

中華料理についても、似たような動向は見られます。また、インドのヒマラヤ山脈にかかる各州は、チベット文化圏の影響もあり、「モモ」と呼ばれる餃子があり、「チョウメン」（ハッカヌードル（右写真））と呼ばれる焼きそばがあるなど、「インド中華」と呼ばれる料理も存在しています。



グローバルブランドのファストフード店の進出も目覚ましく、人口数十万ほどの地方都市にも、ケンタッキークーピー等のファストフード店は既に進出しています。マクドナルドも主要都市ではよく見かけ、スターバックスも多いです。スターバックスは、最近、今後出店を更に加速させるとの発表をしていますが、インドのカフェ市場も急拡大していると思われます。「Cafe Coffee Day」、「Blue Tokai Coffee」、「Third Wave Coffee」といった現地の新興カフェチェーンも急成長・急拡大しています。インドと言えば「紅茶」のイメージが強いかもしれませんが、南インドではコーヒー栽培も盛んで、伝統的には「フィルターコーヒー」という粉末状コーヒーから淹れたコーヒーに砂糖・ミルクを加えたものがよく飲まれています。最近では、いわゆるロースタリーカフェで「本格的なコーヒー」が楽しまれています。上述の「Blue Tokai Coffee」は 2021 年から日本向けの通販を開始し、その後、東京都内でのポップアップ店の展開や栃木県矢板市に常設のコーヒースタンドを開設するなど、日本展開を積極的にしています。機会がありましたら、ぜひ、インドコーヒーを味わってみてください。

さて、日本食はどういう状況かについて話を戻します。上述のカフェは、チェーン店のみならず、独立店も次々に増えている状況ですが、こうしたカフェでは、「Sushi」が軽食としてメニューに載っていることが増えています。これらの Sushi（寿司）は、いわゆる裏巻きがほとんどですが、若い世代を中心に fashionable な食事としての評価を得つつあります。

日本食レストランの客層も、コロナ渦を契機に変化してきており、コロナ前は日本人や韓国人が主な客層でしたが、現在は、インド人客の方が多いところも増えてきているようです。枝豆、唐揚げ、焼き鳥といったメニューが人気ですが、最近はラーメンへの注目も高まっているという話をよく聞きます。先述のマギーは、スープがなくなるくらいまで煮込んで食べる食べ方を提案し浸透し

たという話に代表されるように、汁ありの麺を食べる文化がないことからラーメンは難しいと日本食・日本食品関係者の間では言われてきましたが、若い世代で変化が見られるようです。



写真 インド Coco 壱番屋 1 号店の様子（筆者撮影）

このような変化もあり、コロナ渦前後の時期から、日本食レストランの数は増え始めており、2021 年時点では 130 店だったところ、直近の調査では 410 店まで増えています。コロナ真っ只中の Coco 壱番屋のインド進出は日本でも話題になりましたが、この Coco 壱番屋も含めて、日本食レストランは、それまで駐在員を相手としたビジネスが多かったところから、インド人を主眼に置き始めています。また、インド人経営の日本食レストランもデリー、ムンバイ、ゴアなどで増えており、チェーン化が試みられています。5 つ星ホテルにも日本食が戻り始めており、最近ではインディアン・ジャパニーズのフュージョン料理を出す Izakaya がオシャレなレストランとして注目を集めています。今、まさに、インドにおける日本食ブームの黎明期が幕開けしているのではないかと思います。

4 まとめにかえて

以上、4 回にわたって、インドの農業・食料事情の概観を見てきました。繰り返しになりますが、広大で多様性に富んだインドの農業・食料事情をレポートで伝えることには限界があるかと思います。ぜひ、一度、インドに訪れていただき、インドの勢いを肌で感じていただくきっかけの一つに、今回のコラムを参考にしていただければと思います。

文責：渡辺 一行
(元・在インド日本国大使館 一等書記官)

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。

〔参考〕

インド統計計画実施省 National Accounts Statistics 2023

<https://mospi.gov.in/publication/national-accounts-statistics-2023>

笠井亮平（2023）『インドの食卓：そこに「カレー」はない』早川書房

ジェトロ・ニューデリー「10 分オンラインデリバリー」を試してみた」

<https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/2022/ce2c692118555558.html>

YouTube チャンネル「今日ヤバイ奴に会った」 <https://www.youtube.com/@tubotubowa>

Economic Times Retail “Indian organized food service industry may surpass the market share of unorganized industry by 2025-26:Report”

https://retail.economictimes.indiatimes.com/news/food-entertainment/food-services/indian-organized-food-service-industry-may-surpass-the-market-share-of-unorganized-industry-by-2025-26-report/107132513?utm_source=copy&utm_medium=pshare

農林水産省 海外における日本食レストラン数の調査結果（令和 5 年）

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・EU 等で下方修正されたものの、イラク、アルゼンチン等で上方修正され、前月から上方修正された。

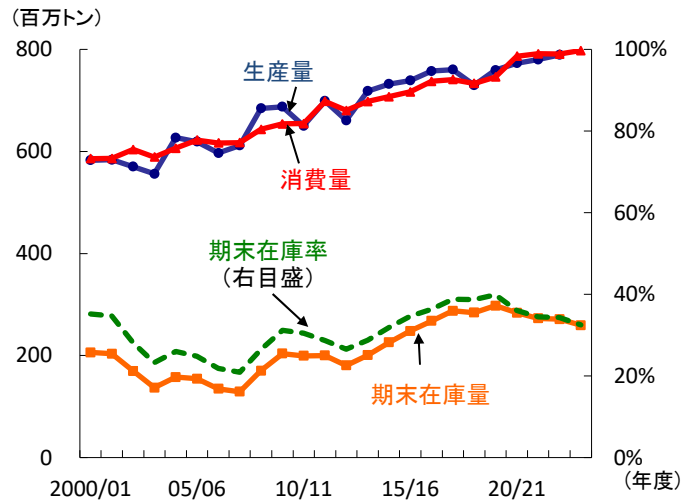
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ウクライナ等で下方修正されたものの、インド、EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・英国等で下方修正されたものの、ウクライナ、豪州、アルゼンチン等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料:USDA「PS&D」(2024.2.8) をもとに農林水産省にて作成

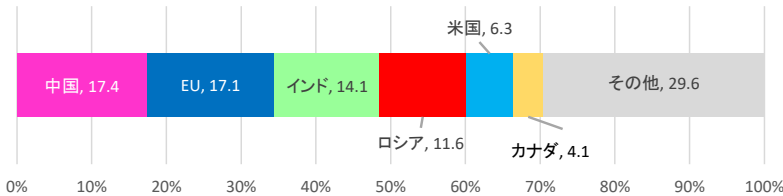
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

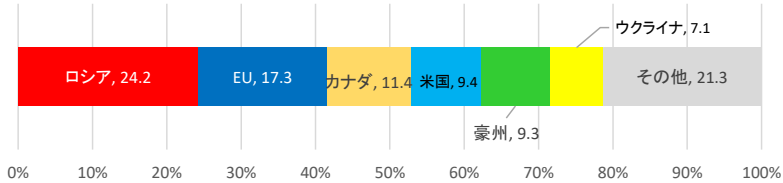
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	780.1	789.2	785.7	0.8	▲ 0.4
消 費 量	791.2	790.7	797.5	1.1	0.9
うち飼料用	160.2	153.7	160.5	▲ 0.6	4.4
輸 出 量	202.8	220.2	210.7	1.2	▲ 4.3
輸 入 量	199.9	211.5	209.9	0.7	▲ 0.8
期末在庫量	272.8	271.2	259.4	▲ 0.6	▲ 4.3
期末在庫率	34.5%	34.3%	32.5%	▲ 0.1	▲ 1.8

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (8 February 2024)

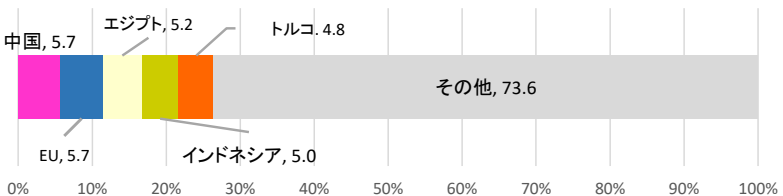
○ 2023/24年度の世界の小麦の生産量(785.7百万トン) (単位: %)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸出量(210.7百万トン) (単位: %)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸入量(209.9百万トン) (単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

< 米国 > 2024/25 年度の冬小麦の生育状況が改善

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 49.3 百万トンと、前年度に比べ 9.8%増、過去 5 年平均(48.6 百万トン)に比べ 1.4%増となる見込み。

USDA「Crop Production」(2024.2.8)によれば、冬小麦、春小麦及びデュラム小麦の生産量は、いずれも前月予測からの変更はなく、それぞれ 34.0 百万トン(前年度比 13.1%増)、13.7 百万トン(同 4.6%増) 及び 1.6 百万トン(同 7.3%減)の見込み。

2024/25 年度の冬小麦の生育状況は、1 月初旬は穏やかな天候であったものの、同中旬に中央平原から中西部まで吹雪が発生。この吹雪で干ばつの影響を受けていた中央平原では土壌水分が改善した。このため、2024/25 年度の冬小麦の作柄評価を表す「やや良～良」の割合は、冬小麦の主産地であるカンザス州では、11 月 26 日の 32 %から 1 月 28 日には 54%に増加した。同じく、ネブラスカ州やオクラホマ州でも「やや良～良」の割合は、それぞれ 49%から 69%、53%から 63%に増加した。

同「Winter Wheat and Canola Seedings」(2024.1.12)によれば、米国の 2024/25 年度の冬小麦播種面積は、小麦の市場価格が高く播種面積が増加した 2023/24 年度(14.85 百万ヘクタール)に比べ、市場価格の低下を受け 13.93 百万ヘクタールと 6.2%減少したものの、2022/23 年度に比べ 3.4%増加した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 19.7 百万トンと、前年度に比べ 4.5%減少し、1972/73 年度以降で最低の見込み。また、2023/24 年度のうち 2023 年 6 月～12 月の輸出量は、ロシアやウクライナからの予想を上回る小麦供給量や、国際市場で価格競争力が乏しいことから 10.2 百万トンと、前年度同期(12.5 百万トン)を 18.4%下回っている。

米国産の 2 月 6 日時点のハード・レッド・ウインター(HRW)の輸出価格(FOB)は、前月の 285 ドル/トンからはば変わらず 286 ドル/トンとなった。主要輸出 6 か国(米国のほか、ロシア、EU、カナダ、豪州、アルゼンチン)の輸出価格との比較では、カナダ(306 ドル/トン)、豪州(291 ドル/トン)に続き高い水準であり、多くの市場で競争力に欠ける状況が継続している。また、ハード・レッド・スプリング(HRS)は東アジアからの需要が強く、前月から 2 ドル/トン上昇し 306 ドル/トンとなった。

2023/24 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、17.9 百万トン。期末在庫量は 2017/18 年度の 32.1 百万トンから低下傾向となったが、2023/24 年度は前年度を 15.5%上回る見込み。

小麦－米国（冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年6月～24年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	44.8	44.9	49.3	-	9.8
消費量	30.4	30.4	31.1	▲ 0.3	2.4
うち飼料用	2.4	2.1	3.3	-	56.5
輸出量	21.7	20.7	19.7	-	▲ 4.5
輸入量	2.6	3.3	4.0	-	19.0
期末在庫量	18.4	15.5	17.9	0.3	15.5
期末在庫率	35.3%	30.4%	35.2%	0.7	4.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.03	14.36	15.08	-	5.0
単収(t/ha)	2.98	3.13	3.27	-	4.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(8 February 2024)

図 米国産冬小麦、春小麦、デュラム小麦の生産量の推移



資料：USDA「Crop Production」(2024.2.8)

写真 米国オレゴン州の冬小麦の圃場(2024.1.29)



オレゴン州シャーマン郡の冬小麦の圃場。最近の積雪によって十分な土壌水分量となった。雪が解けた圃場では、青々とした小麦が生育中である。
撮影者：サッド・イーケン氏

＜ カナダ ＞ 2024/25 年度の生産量は 33.9 百万トンの見込み(AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2024.2.16)によれば、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく 32.0 百万トンと、前年度に比べ 6.9%減少するものの、過去 5 年平均に比べ 1.6%増加の見込み。

種類別の生産量は、普通小麦は収穫面積が増加したものの、干ばつによる単収の低下を受け 27.9 百万トンと前年度比で 2.2%減少となるも、5 年平均比では 6.5%増加。デュラム小麦は、平原西部の干ばつによる収穫面積の減少と単収の低下を受け 4.0 百万トンと前年度比 30.1%減、5 年平均比 22.7%減の見込み。

2024/25 年度の小麦全体の生産量は、収穫面積の増加から前月予測に比べ 0.6 百万トン上方修正され 33.9 百万トンの見込み。作付面積が豆類やオーツ麦等の粗粒穀物の増加を受け前年度に比べ 1.9%減少するものの、干ばつから天候が回復し単収が例年並みとなると 6.2%増加する見込み。

種類別の生産量は、普通小麦は収穫面積の増加から前月予測に比べ 0.6 百万トン上方修正され 27.9 百万トンの見込み。世界的に潤沢な供給と価格低下による収益の低下を受け作付面積が前年度に比べ減少するものの、単収の回復から 0.2%増加。また、デュラム小麦は前月予測からの変更はなく 5.4 百万トンと、前年度に比べ作付面積の増加から 34.4%増加する見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され 23.5 百万トンとなるものの、生産量の減少を受け前年度比 8.6%減少の見込み。種類別の輸出量は、普通小麦は好調な輸出ペースから前月予測から 0.3 百万トン上方修正され 20.3 百万トンとなるものの、前年度に比べ 1.8%減少の見込み。デュラム小麦は前月予測からの変更はなく 3.2 百万トンと、生産量減少による輸出余力低下とトルコとの競合の強まり等を受け前年度に比べ 36.7%の減少。

なお、カナダ穀物委員会(CGC)によれば、2023 年 8 月から 12 月までの輸出量は、普通小麦が 9.1 百万トンと前年度同期比 12.9%増加した一方、デュラム小麦は 1.2 百万トンと前年度同期比 35.6%の減少。同期間の輸出先国は、前年度同期に比べ普通小麦は米国(251.9%増)、インドネシア(28.5%増)で増加も、中国(27.8%減)、バングラデシュ(14.9%減)で減少した。デュラム小麦はイタリア(68.2%減)で減少した。

2024/25 年度の輸出量は、前月からの予測の変更はなく 24.4 百万トンの見込み。種類別には、普通小麦は 20.0 百万トンと潤沢な世界供給から前年度に比べ 1.2%減少する見込み。デュラム小麦は 4.4 百万トンと、欧州や北アフリカへの輸出が回復するとみられることから前年度に比べ 35.9%増加する見込み。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年8月～24年7月)		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	22.4	34.3	32.0 (32.0)	-	▲ 7.0
消 費 量	10.2	9.3	8.7 (8.6)	-	▲ 6.5
うち飼料用	5.2	4.2	3.5 (4.1)	-	▲ 15.9
輸 出 量	15.1	25.6	24.0 (23.5)	-	▲ 6.2
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1
期末在庫量	3.7	3.7	3.5 (3.6)	0.0	▲ 4.1
期末在庫率	14.5%	10.5%	10.7% (11.1%)	0.0	0.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.20	10.08	10.68 (10.68)	-	6.0
単収(t/ha)	2.44	3.41	2.99 (2.99)	-	▲ 12.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2024)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(16 February 2024)

表 カナダ産小麦の輸出量と輸出先国

(普通小麦) (輸出量:百万トン、シェア:%)

2023/24年度 (2023年8月～2023年12月)			2022/23年度 (2022年8月～2023年7月)			2021/22年度 (2021年8月～2022年7月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
中国	125.6	13.8	中国	296.8	15.1	日本	159.2	13.8
インドネシア	99.4	10.9	インドネシア	213.8	10.9	インドネシア	128.1	11.1
日本	72.6	8.0	日本	167.3	8.5	コロンビア	102.4	8.9
コロンビア	58.8	6.5	ペルー	148.3	7.5	ペルー	79.2	6.9
バングラデシュ	57.7	6.3	バングラデシュ	144.4	7.3	中国	69.4	6.0
ペルー	46.1	5.1	コロンビア	109.9	5.6	エクアドル	65.8	5.7
その他	450.3	49.5	その他	886.1	45.1	その他	548.0	47.6
計	910.5	100.0	計	1,966.6	100.0	計	1,152.1	100.0

(デュラム小麦)

2023/24年度 (2023年8月～2023年12月)			2022/23年度 (2022年8月～2023年7月)			2021/22年度 (2021年8月～2022年7月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
モロッコ	27.8	22.5	イタリア	121.0	23.9	モロッコ	72.2	27.5
アルジェリア	24.7	20.0	アルジェリア	120.8	23.8	アルジェリア	44.5	16.9
イタリア	19.8	16.0	モロッコ	85.7	16.9	米国	40.9	15.6
米国	17.3	14.0	米国	50.4	9.9	イタリア	33.5	12.8
日本	10.0	8.1	チュニジア	32.5	6.4	日本	20.2	7.7
ベネゼーラ	7.6	6.1	日本	18.1	3.6	ナイジェリア	12.3	4.7
その他	16.6	13.4	その他	78.8	15.5	その他	39.0	14.9
計	123.8	100.0	計	507.3	100.0	計	262.6	100.0

資料：「Canadian Grain Commission」のデータを基に農林水産省で作成

＜ 豪州 ＞2023/24 年度の輸出量は、0.5 百万トン上方修正

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、25.5 百万トンの見込み。史上最高であった前年度に比べ、単収の低下と収穫面積の減少から、2023/24 年度の実生産量は 37.1%減少するものの、10 年平均(26.5 百万トン)に比べ 3.7%の減少に留まり、ほぼ平年並みの見込み。なお、エルニーニョ現象の影響は、播種以降に乾燥天候が生じたものの、播種時に十分な土壌水分が保たれていたことや、前年 10 月以降の成熟に適した降雨を受け当初予測より軽減された。

GIWA(西豪州穀物産業協会)(2024.2.9)によれば、ウェスタンオーストラリア(WA)州の実生産量は、前回予測(2023 年 12 月)から 0.3 百万トン上方修正され、7.7 百万トンの見込み。生育シーズン当初から土壌水分が不足し、その後も乾燥天候に見舞われ、史上最高の前年度の 13.9 百万トンを下回る見込み。全体的に品質は良好で、生産量に占める高タンパク質含有小麦の割合は前年度の 3 %を上回る 47%であった。

2023/24 年度の収穫状況は、現地情報会社によれば、ヴィクトリア(VIC)州で残っていた収穫も 1 月に終了し、小麦の収穫は完了した。品質は、WA 州で例年になく高タンパク質小麦が生産されたため、オーストラリアン・ハード(AH)等級の小麦が前年同期比で 10%増加し、全体の 23%を占めている。また、収穫期の降雨によりニューサウスウェールズ(NSW)州南部等では穂発芽が発生し、一部の小麦は飼料用グレードに格下げされたものの、全国レベルでその割合は 6 %に留まり 5 年平均を下回った。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、飼料用消費が下方修正され輸出余力が高まることから、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、19.5 百万トンの見込み。過去最高の前年度に比べ、乾燥天候による生産量の減少から 38.7%減少するものの、輸出実績が比較的好調であることや小麦の品質が予想より良好であることから、10 年平均(18.9 百万トン)に比べ 3.1%増加する見込み。

現地情報会社によれば、2023/24 年度(2023 年 10 月～2024 年 9 月)の 12 月輸出量は 140.5 万トンと前年度に比べ 47.4%減少。輸出先国は、中国(17.9%)、フィリピン(14.7%)、インドネシア(11.7%) の順。

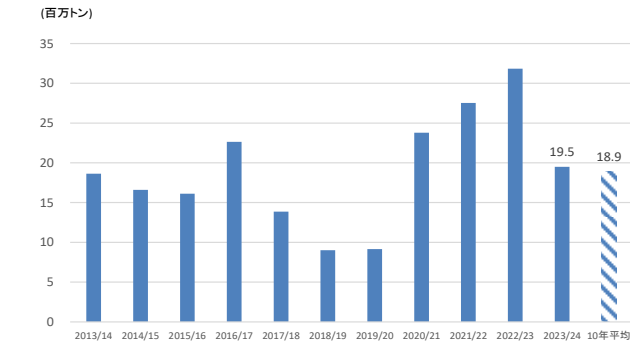
また、同年度 10 月～12 月の輸出量は 394.7 百万トンで前年度(645.4 万トン)に比べ 38.8%の減少。輸出先国は中国(17.7%)、インドネシア(13.4%)、フィリピン(11.9%)の順で、中国向けシェアは 2022/23 年度(23.8%)と同じく第 1 位である。アジア市場では、豪州産小麦は安価なロシア産と競合しているものの、紅海状況を受け迂回経路をとっているロシア産に比べて割安となるとみられ、今後豪州産小麦の需要が増加する可能性がある。

小麦一豪州(冬小麦を主に栽培)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
			予測値	()		
生 産 量	36.2	40.6	25.5	(25.5)	-	▲ 37.1
消 費 量	8.5	8.0	7.0	(7.7)	▲ 0.5	▲ 12.5
うち飼料用	5.0	4.5	3.5	(4.0)	▲ 0.5	▲ 22.2
輸 出 量	27.5	31.8	19.5	(18.6)	0.5	▲ 38.7
輸 入 量	0.2	0.2	0.2	(0.3)	-	-
期末在庫量	3.5	4.4	3.6	(3.2)	-	▲ 18.3
期末在庫率	9.6%	11.0%	13.5%	(12.2%)	-	2.5
(参考)						
収穫面積(百万ha)	12.73	13.05	12.50	(12.50)	-	▲ 4.2
単収(t/ha)	2.85	3.11	2.04	(2.04)	-	▲ 34.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2024)
IGC 「Grain Market Report」(11 January 2024)

図 豪州産小麦の輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2024.2.8)をもとに農林水産省で作成

表 豪州の小麦輸出量と輸出先国

2023年12月			2023年10月～2023年12月			2022年10月～2023年9月		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
中国	25.2	17.9	中国	70.8	17.7	中国	756.7	23.8
フィリピン	20.7	14.7	インドネシア	53.5	13.4	インドネシア	504.2	15.8
インドネシア	16.5	11.7	フィリピン	47.6	11.9	フィリピン	308.2	9.7
イエメン	13.8	9.8	ベトナム	40.4	10.1	ベトナム	285.0	9.0
ベトナム	13.5	9.6	イエメン	30.9	7.7	韓国	270.3	8.5
日本	8.4	6.0	日本	28.6	7.2	タイ	200.8	6.3
その他	42.4	30.2	その他	122.9	31.1	その他	859.1	27.0
計	140.5	100.0	計	394.7	100.0	計	3,184.3	100.0

資料：「Australian Crop Forecasters S&D Export Report」(2024.2)を
もとに農林水産省で作成

< EU27 > 2023/24 年度の生産量は5年平均を上回る 134.0 百万トン(欧州委員会)

【生育・生産状況】欧州委員会(2024.1.29)によれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され 134.0 百万トンと、前年度比で 0.3%減少も、過去 5 年平均比で 1.0%増加する見込み。

小麦全体のうち普通小麦は、前月予測に比べ 0.2 百万トン上方修正され 126.9 百万トンと、前年度比で 0.1%増加し、5 年平均比で 1.7%増加。また、デュラム小麦は、0.1 百万トン上方修正され 7.1 百万トンと、前年度比で 6.3%減少し、5 年平均比でも 10.2%減少見込み。デュラム小麦の実生産量は、2016/17 年度に 9.7 百万トンに達した後、2021/22 年度に 8.2 百万トンと一時回復したものの減少傾向にある。

欧州委員会によれば、2024/25 年度の冬小麦の 1 月の生育状況は、初旬に欧州北部が寒波に覆われ、バルト三国では、積雪が少ない状態で気温が急激に低下したため、冬穀物が霜害を受けた可能性が高い。他方、スペインの地中海沿岸及びイタリアでは、顕著な降雨不足となり、デュラム小麦が影響を受けた。

USDA によれば、1 月末から 2 月上旬にかけて、フランス及びドイツでは温暖な気温等から、休眠期に入っていた冬穀物の一部は平年よりも 1 か月以上早く再生長を再開した。

フランスアグリメール(2024.2.12)によれば、2024/25 年度のフランスの播種は、普通小麦は終了、デュラム小麦は播種進捗率が 89%(前年度 97%)となった。生育状況を示す「良～優良」の割合は、普通小麦は 68%、デュラム小麦は 75%となり、それぞれ前年度の 93%、93%を下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は飼料用小麦の輸入増加を受け、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 12.0 百万トンと、前年度を 0.8%下回るも過去 5 年平均を 79.1%上回る。

輸出量は前月予測からの変更はなく 36.5 百万トン(前年度比 4.0%増、5 年平均比 13.4%増)の見込み。輸出価格(1 月 10 日時点)は、黒海産との激しい競合を受け前月から 12 ドル/トン低下し 233 ドル/トンと、主要 6 か国(P2 米国参照)のうちロシア産(225 ドル/トン)に次ぎ安価となった。

欧州委員会によれば、11 月の輸出量は普通小麦が 268.1 万トン(5 年平均比 13.0%増)、デュラム小麦は 8.6 万トン(同 2.4%増)。輸出先国は、普通小麦がエジプト(20.5%)、ナイジェリア(11.1%)、モロッコ(10.9%)の順で、アフリカ諸国向けが多いが、10 月からはエジプト向けが特に増加した。デュラム小麦はスリランカ(38.2%)、サウジアラビア(14.2%)、チュニジア(12.7%)の順。なお、EU 産デュラム小麦の輸出量は 2022/23 年度にカナダに次ぎ世界 2 位となったが、2023 年 7 月～11 月の輸出量は 22.4 万トンと、2022/23 年度同時期に比べ生産量の減少から 46.3%の減少となっている。

小麦－EU27 (冬小麦を主に栽培)

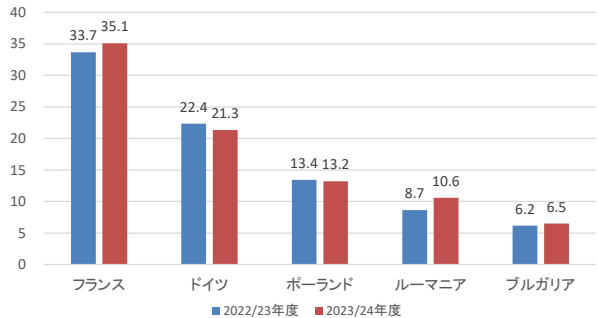
(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	138.2	134.2	134.0 (133.2)	▲ 0.3	▲ 0.1
消 費 量	108.3	108.0	110.5 (109.7)	0.5	2.3
うち飼料用	45.0	44.0	46.0 (45.2)	0.5	4.5
輸 出 量	31.9	35.1	36.5 (34.3)	-	4.0
輸 入 量	4.6	12.1	12.0 (8.9)	1.0	▲ 0.8
期末在庫量	13.3	16.5	15.5 (16.6)	0.2	▲ 6.1
期末在庫率	9.5%	11.5%	10.6% (11.5%)	0.1	▲ 1.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	24.29	24.38	24.38 (23.88)	0.16	-
単収(t/ha)	5.69	5.50	5.53 (5.58)	▲ 0.02	0.5

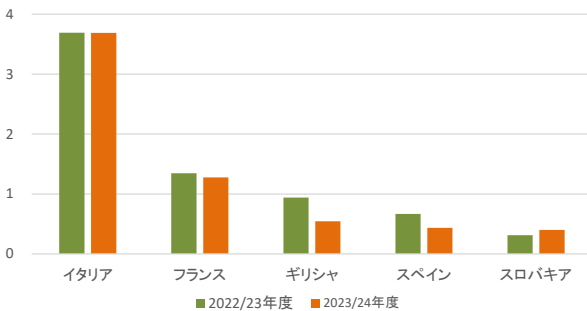
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2024)
IGC 「Grain Market Report」(11 January 2024)

図 EU の上位 5 か国の生産量の推移

<普通小麦>
(百万トン)



<デュラム小麦>
(百万トン)



資料：EU 委員会「EU Crops Market Observatory」(2024.1.29)をもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2023 年の輸入量は前年に比べ 13.7%増加

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、136.6 百万トンの見込み。史上最高の前年度に比べ、収穫面積は増加したものの単収の低下から、生産量は 0.8%減少したものの、過去 5 年平均の 134.8 百万トンを上回る。2023/24 年度は、収穫前に豪雨に見舞われたため、生産量が減少するとともに飼料用グレードの割合が増加した。

中国 農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 12 月号」(2024.1.15)によれば、2024/25 年度の冬小麦の生育状況は、12 月に主要産地の冬小麦のほとんどで分けつ期・越冬期を迎えた。12 月初旬、日照と適切な土壌水分に恵まれ、冬小麦の生育は良好であった。さらに、12 月中・下旬に広範囲で降雪があり、主産地のほとんどの冬小麦の圃場は、越冬に適した土壌水分となった。また、低温は病害虫を減少させる効果もあったものの、華北平原及び黄河、淮河流域の一部では、軽度から中度の凍害を受けた。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量のうち飼料用消費量は、2023 年 5 月の降雨被害による品質低下に伴う飼料用グレードの国産小麦増加を受け、飼料メーカーが、低品質小麦と発芽小麦の配合率を増加させるとみられることから、37.0 百万トンと前年度に比べ 12.1%増加する見込み。

2023/24 年度の輸入量は、EU からの輸入量が減少したことから、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、12.0 百万トンの見込み。前年度に比べ 5.3%減少するものの、2020/21 年度からの 4 年間平均で 11.4 百万トンを入力しており、2023/24 年度も前年度に続き世界第 1 位の小麦輸入国となっている。なお、中国は 1991/ 92 年度に史上最高の 15.9 百万トンを入力している。

同「中国農産品供需形勢分析月報」によれば、2023 年 1 月から 11 月までの小麦及び小麦製品の輸入量は、国際小麦価格が国内価格に比べ相対的に低いため、大幅に増加した。

中国税関統計によれば、2023 年 1 月から 12 月までの輸入量合計は 1,210.4 万トンで、前年に比べ 13.7%増加。同期間の輸入先国のシェアは、豪州 59.5%(前年同期 60.2%)、カナダ 19.6%(同 16.8%)、フランス 6.8%(同 16.0%)、米国 6.7%(同 5.9%)の順で、前年に比べカナダ及び米国のシェアが増加した一方、豪州及びフランスのシェアが低下。なお、米国産の輸入量は、2023 年 10 月に米国の農産物販売業者と中国の商品輸入業者の間で穀物購入協定が締結され増加するとみられたものの、11 月及び 12 月の輸入量は減少した。

USDA によれば、中国は輸入先の多角化を図っており、中国とアルゼンチンは中国向けアルゼンチン産の検疫手続に合意した。これにより、アルゼンチン産小麦の輸入が可能になった。

小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	137.0	137.7	136.6 (136.6)	-	▲ 0.8	
消 費 量	148.0	148.0	153.5 (149.5)	-	3.7	
うち飼料用	35.0	33.0	37.0 (32.0)	-	12.1	
輸 出 量	0.9	1.0	0.9 (1.2)	-	▲ 5.3	
輸 入 量	9.6	13.3	12.0 (12.7)	▲ 0.5	▲ 9.6	
期末在庫量	136.8	138.8	133.0 (139.0)	▲ 0.5	▲ 4.2	
期末在庫率	91.9%	93.2%	86.1% (92.3%)	▲ 0.3	▲ 7.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.57	23.52	23.63 (23.63)	-	0.5	
単収(t/ha)	5.81	5.86	5.78 (5.78)	-	▲ 1.4	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2024)
IGC 「Grain Market Report」(11 January 2024)

図 中国の小麦輸入量の推移

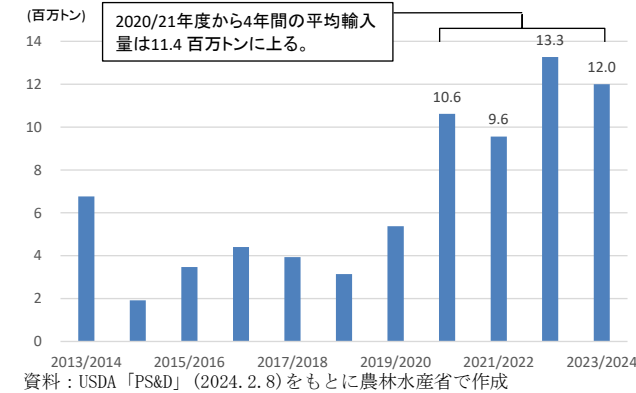


表 中国の小麦輸入量及び輸入先国

(輸出量:万トン、シェア:%)

2023年12月			2023年1月～2023年12月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
カナダ	34.9	57.6	豪州	720.3	59.5
豪州	15.2	25.1	カナダ	237.5	19.6
ロシア	3.9	6.4	フランス	82.4	6.8
米国	3.1	5.1	米国	81.4	6.7
カザフスタン	2.9	4.8	カザフスタン	54.1	4.5
その他	0.6	1.0	その他	34.7	2.9
計	60.6	100.0	計	1,210.4	100.0

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

＜ ロシア ＞ 2023/24 年度の輸出量は史上最高 アルジェリアで輸出シェア拡大

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく、91.0 百万トンの見込み。史上最高であった前年度(92.0 百万トン)に比べ 1.1%減少するものの、過去 5 年平均(79.6 百万トン)を 14.4%上回り史上 2 位となる見込み。

種類別の生産量は、冬小麦及び春小麦ともに前月予測からの変更はなく、それぞれ 64.0 百万トン、27.0 百万トンの見込み。冬小麦は単収が増加したものの、播種期の降雨を受け収穫面積が減少したことから、前年度に比べ 5.9%減少。春小麦は乾燥天候により収穫面積が減少したものの、当初の予想ほど乾燥天候の影響を受けずに単収が上昇したことから、前年度に比べ 12.5%増加する見込み。

2024/25 年度の冬小麦の播種面積は前年度同期(17.72 百万ヘクタール)を上回る 18.60 百万ヘクタール。ロシア気象センターによれば、2024 /25 年度の冬穀物の越冬状況は、ロシアヨーロッパ部北部及び南部の気象条件が「概ね並み」から「並み」となり、一時平年より寒冷となったものの、大部分の産地がスノーカバー(作物が積雪により外気の寒さから守られる)に覆われていたため被害はなかった。また、アジア部でも冬小麦の越冬状況は「並み」であった。

【貿易情報・その他】USDA によれば、ロシア産の輸出価格は、天候の回復によるロシアの港での積荷作業の継続から前月より 20 ドル/トン下落し 225 ドル/トンと、主要輸出 6 か国(P2 米国を参照)で最安値。現地情報会社によれば、小麦がハイペースで輸出されてきたものの、過剰な在庫水準が解消されないことがロシア産価格の低さの原因とみられる(連邦統計庁によれば、1 月の小麦在庫量は過去最高水準)。

2023/24 年度の輸出量は前月予測からの変更はなく 51.0 百万トン。好調な輸出ペースを受けこれまで史上最高であった前年度(47.5 百万トン)を更に 7.4%上回る見込み。2023/24 年度のうち 2023 年 7 月～2024 年 1 月のロシアの輸出量は 3,104.5 万トンと、過去最高の輸出量であった 2022/23 年度の同期間(2,384.3 万トン)を 11.0%上回った。また、1 月の輸出量も 401.4 万トンと過去 3 年平均(316.2 万トン)を 26.9%上回った。なお、1 月の輸出先国は、エジプト(17.3%)、パキスタン(11.6%)、トルコ(10.1%)の順。

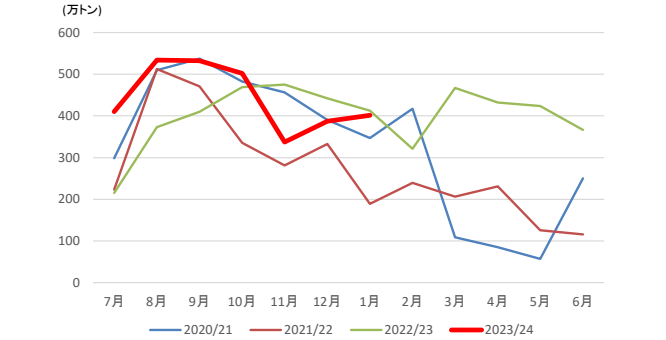
なお、現地情報会社によれば、ロシアは新規市場開拓として輸入量世界第 6 位のアルジェリアへの輸出を伸ばしている。アルジェリアの輸入量は年間約 8.0 百万トンで多くは EU 産。2021/22 年度にアルジェリアの検疫規制緩和により 5 年ぶりにロシア産 0.5 百万トンが輸入され、2022/23 年度には 2.1 百万トンに拡大。2023/24 年度は 7 か月で 1.6 百万トンと EU 産の 1.2 百万トンを超え市場シェアを奪っている。

小麦ーロシア (主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)
(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	75.2	92.0	91.0 (90.0)	-	▲ 1.1	
消 費 量	41.8	42.3	43.0 (43.6)	-	1.8	
うち飼料用	18.5	19.0	20.0 (19.0)	-	5.3	
輸 出 量	33.0	47.5	51.0 (50.1)	-	7.4	
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.1)	-	-	
期末在庫量	12.1	14.6	11.9 (11.4)	-	▲ 18.4	
期末在庫率	16.2%	16.3%	12.7% (12.2%)	-	▲ 3.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	27.63	29.00	28.80 (29.00)	-	▲ 0.7	
単収(t/ha)	2.72	3.17	3.16 (3.10)	-	▲ 0.3	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2024)
IGC 「Grain Market Report」(11 January 2024)

図：ロシアの小麦の月別輸出量の推移



表：ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2024年1月)		2023/24年度 (2023年7月～2024年1月)		2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)		2021/22年度 (2021年7月～2022年6月)	
国 名	輸出量 シェア	国 名	輸出量 シェア	国 名	輸出量 シェア	国 名	輸出量 シェア
エジプト	69.5	トルコ	440.4	エジプト	836.8	トルコ	669.7
パキスタン	46.4	エジプト	387.9	トルコ	682.1	イラン	626.6
トルコ	40.8	バングラデシュ	249.1	バングラデシュ	199.2	エジプト	500.5
バングラデシュ	38.9	パキスタン	170.2	パキスタン	155.2	サウジアラビア	97.3
イエメン	26.5	アルジェリア	163.2	イラン	149.6	ナイジェリア	73.5
インドネシア	18.7	インドネシア	117.9	アゼルバイジャン	136.9	スーダン	71.2
n/a	17.6	イエメン	108.0	カザフスタン	125.5	アゼルバイジャン	69.7
その他	143.0	その他	1,467.8	その他	2,521.5	その他	2,521.5
計	401.4	計	3,104.5	計	4,806.8	計	3,260.2

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2023/24 年度の輸出量は前月予測から 1.0 百万トン上方修正

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく23.4百万トンの見込み。前年度に比べ、収穫面積は減少も、良好な天候による単収の上昇を受け、前年度(21.5百万トン)を8.8%上回るものの、5年平均(26.8百万トン)に比べ12.8%下回る。

2024/25年度の冬小麦の播種面積は4.16百万ヘクタールと、前年度同期(3.64百万ヘクタール)を14.3%上回った(2023年11月27日現在)。なお、ロシアのウクライナ侵攻前の2021年の播種面積(6.25百万ヘクタール)に比べると33.4%の減少となる。生育状況は、12月は降雨に恵まれたが、1月は気温の変動が大きく一部地域の広範囲な圃場で土壌表面が氷に覆われたことから、作物への悪影響が懸念されている。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、主にEU向けの輸出が堅調なことから、前月予測から1.0百万トン上方修正され15.0百万トンとなるものの、前年度に比べ12.4%減少、5年平均(18.0百万トン)に比べ16.5%減の見込み。黒海のおデーサ港等の主要輸出港からのアフリカ及びアジア向け輸出が黒海穀物イニシアティブの履行停止の影響を受け輸出量は前年度に比べ減少した。なお、その後の輸出は一時停滞したものの、臨時回廊の設置で10月以降輸出量は増加している。

ウクライナ政府等によれば、2023/24年度のうち2023年7月から2024年1月までの輸出量は921.8万トン。この間、黒海穀物イニシアティブの履行されていた7月の輸出量は82.4万トンに減少したものの、臨時回廊の設置を受け、輸出量は増加傾向となり1月の輸出量は150.4万トンとなった。また、8月から1月までの同イニシアティブの履行停止後の輸出量は100万トンを超え、同期間の平均輸出量は139.9万トンとなった(黒海穀物イニシアティブ履行期間中の平均輸出量:151.5万トン)。前年7月から1月までの輸出先国はスペイン(35.0%)、ルーマニア(10.9%)、エジプト(7.8%)の順。このうち、スペイン向けシェアが高い要因は、同国の乾燥天候による生産量の減少と飼料用小麦の需要増加や、ウクライナ産小麦の飼料用グレードの増加、ウクライナからアジア等よりも近く輸送コストが低いこと等による。

また、輸送手段別の小麦輸出量は、臨時回廊が設定された8月は船舶79.4%、鉄道13.0%、自動車4.1%であったが、1月は、船舶91.5%、鉄道6.7%、自動車1.3%となり、船舶の利用率が増加した一方、鉄道・自動車の利用率は減少しており、ウクライナが設定した臨時回廊が順調に機能しているとみられる。

この背景には、船舶輸送が陸上輸送よりコストが低いこと、臨時回廊向け船舶保険メカニズムの始動による海上保険料コストの低下がある。

小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）
(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	33.0	21.5	23.4 (28.7)	-	8.8	
消 費 量	9.0	7.7	8.0 (13.9)	▲ 0.6	3.9	
うち飼料用	3.0	2.7	3.0 (3.0)	▲ 1.0	11.1	
輸 出 量	18.8	17.1	15.0 (14.0)	1.0	▲ 12.4	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	33.3	
期末在庫量	6.8	3.5	4.0 (3.8)	▲ 0.4	13.7	
期末在庫率	24.3%	14.1%	17.3% (13.5%)	▲ 2.1	3.2	

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.41	5.60	5.05 (6.32)	-	▲ 9.8
単収(t/ha)	4.45	3.84	4.63 (4.54)	-	20.6

資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2024)
IGC 「Grain Market Report」(11 January 2024)

図 ウクライナ産小麦の輸送手段別輸出量の推移

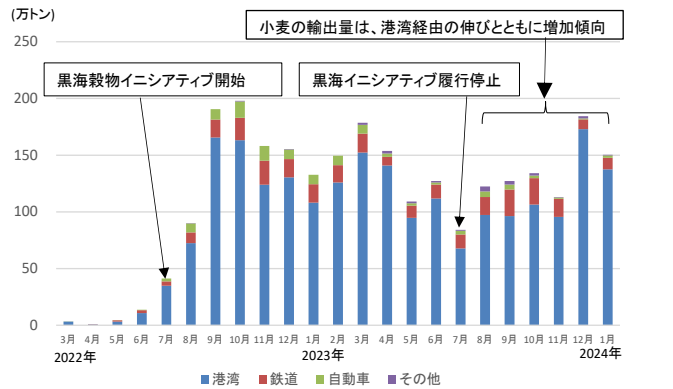
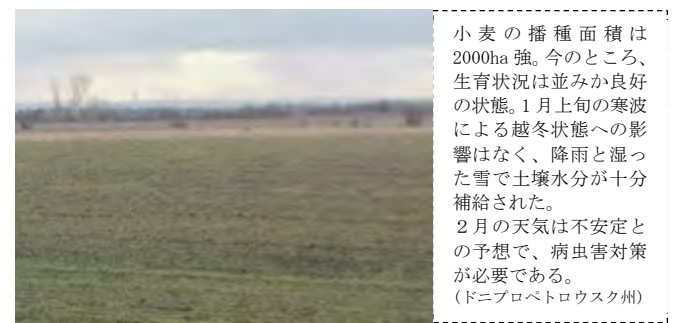


写真 2024/25 年度の冬小麦の圃場(2024. 2. 5)



2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比  前月比 

・インド、トルコ等で上方修正されたものの、ブラジル、メキシコ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

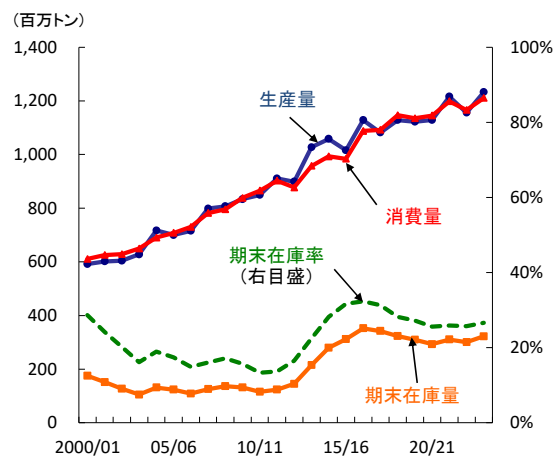
消費量 前年度比  前月比 

・インド、トルコ等で上方修正されたものの、パキスタン、ウクライナ、バンラデシュ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

・ウクライナ、パキスタン等で上方修正されたものの、ブラジル、インド、セルビアで下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料：USDA「PS&D」(2024.2.8)をもとに農林水産省にて作成

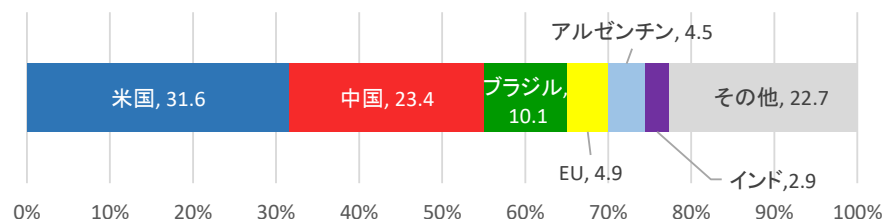
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

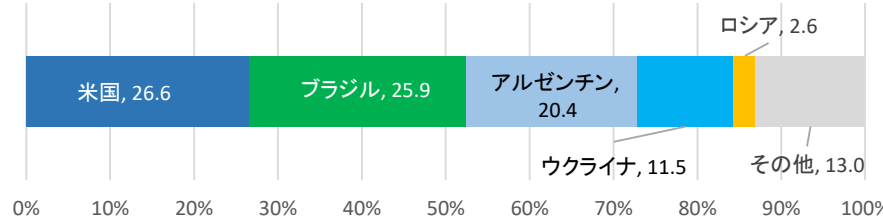
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,215.9	1,155.9	1,232.6	▲ 3.2	6.6
消 費 量	1,198.4	1,166.2	1,210.8	▲ 0.3	3.8
うち飼料用	743.2	728.5	761.8	▲ 2.0	4.6
輸 出 量	206.6	181.0	200.8	▲ 0.1	11.0
輸 入 量	184.5	172.6	189.8	▲ 0.9	10.0
期末在庫量	310.5	300.3	322.1	▲ 3.2	7.3
期末在庫率	25.9%	25.7%	26.6%	▲ 0.3	0.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(8 February 2024)

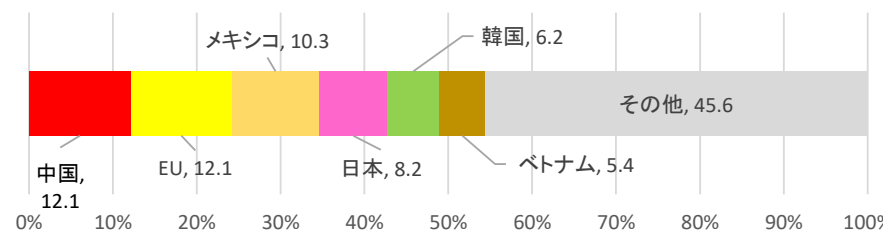
○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,232.6 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸出量(200.8 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸入量(189.8 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 収穫面積の増加により、生産量は史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の増加（対前年度比 9.9%増）や単収の増加（同 2.2%増で史上最高）を受け、前年度より 12.4%増の 389.7 百万トンと史上最高の見通し。収穫面積の増加については、肥料価格の高騰が前年度から落ち着いたことを受けて、とうもろこしを選択した農家が増加したことも要因とみられる。米国穀物協会によると、品質は良好としている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、直近の食品加工用等消費の減少を受けて前月予測から 0.3 百万トン下方修正されたものの、飼料用、エタノール用等の需要の増加により、前年度に比べ 3.4%増の 316.4 百万トンの見通し。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、国際的なとうもろこし価格の低下に伴う需要増加を受けた輸出の回復期待から、前年度より 26.4%増の 53.3 百万トンの見込み。他方で、2023/24 年度に輸入が増加すると見込まれる中国への輸出をめぐり、前年度が史上最高の生産見通しとなったブラジル産等との輸出競争が激化する見通し。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2024.2.8) によれば、本年 2 月の米国産の輸出価格は、国内在庫の増加と、南米産の供給増の影響を受けた米国産需要の低下を受け、2 月 6 日現在、前月から 14 ドル/トン低下し 198 ドル/トン。なお、2023 年 9 月～2024 年 1 月の輸出量は 1,614 万トンと、前年同時期の 1,206 万トンより 33.9%増加。輸出先国の内訳は、メキシコ (772.0 万トン)、日本 (243.7 万トン)、コロンビア (230.3 万トン) の順となっている。飼料需要が増加した一方、干ばつにより減産したメキシコ向けの輸出量が増加しているが、この背景としては、航行制限のあるパナマ運河を経由せず米国から直接輸出できることもあるとみられる。

USDA によれば、2023/24 年度の実在庫量は、2023/24 年の消費量が下方修正されたため前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、増産となったこともあり前年度より 59.7%増の 55.2 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より 5.0 ポイント上昇し 14.9%と、過去 3 年平均 (9.2%) を上回っている。

とうもろこしー米国

(単位：百万トン)

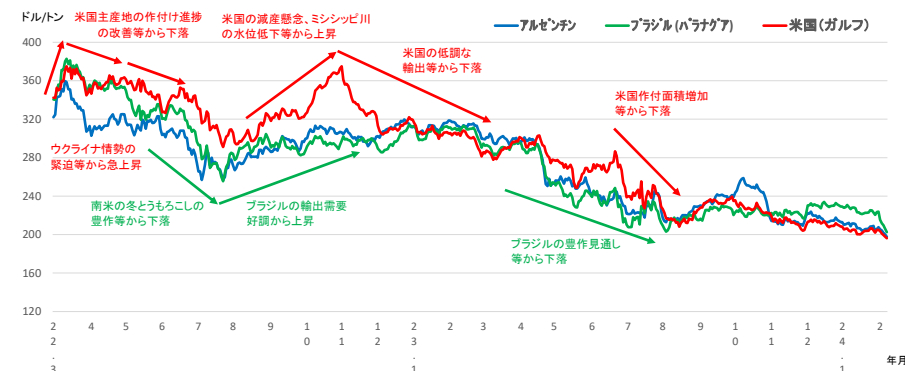
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年9月～24年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	381.5	346.7	389.7	-	12.4
消 費 量	315.7	306.0	316.4	▲ 0.3	3.4
うち飼料用	144.0	139.4	144.2	-	3.4
エタノール用等	135.1	131.5	136.5	-	3.8
輸 出 量	62.8	42.2	53.3	-	26.4
輸 入 量	0.6	1.0	0.6	-	▲ 34.7
期末在庫量	35.0	34.6	55.2	0.3	59.7
期末在庫率	9.2%	9.9%	14.9%	0.1	5.0

(参考)

収穫面積(百万ha)	34.39	31.85	35.01	-	9.9
単収(t/ha)	11.09	10.89	11.13	-	2.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2024)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）



資料：IGC のデータをもとに農林水産省にて作成。

＜ ブラジル ＞ 2023/24 年度の生産量は大豆等への転換や高温乾燥により減少

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、冬とうもろこしの収穫面積の引下げを受けて前月予測から 3.0 百万トン下方修正され、前年度より 9.5%減の 124.0 百万トンの見通し。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2024.2.8）によれば、2023/24 年度のとうもろこしの生産量は、前年度比 13.8%減の 113.7 百万トンの見込み（P.23 大豆ーブラジルのクロップカレンダー参照）。夏とうもろこしは、エルニーニョ現象による南部での降雨過多の影響等により、生産量が引き下げられた。冬とうもろこしも、とうもろこし価格の低下による大豆等への作付けシフト等を受けた収穫面積の引下げや、中西部での高温乾燥の影響を受け、前月から下方修正された。

USDA によれば、夏とうもろこしが主に栽培されている南部では、2月上旬、季節外れの高温乾燥が広がった。一方、冬とうもろこしが主に栽培される中西部のマット・グロッソ州では、2月上旬、高温乾燥を和らげる降雨があった。

南部のリオ・グランデ・ド・スール州における夏とうもろこしの作付けは2月8日時点でほぼ完了した。一方、中西部のマット・グロッソ州において、大豆の収穫が順調に進展し、その後作付けされる冬とうもろこしの作付け進捗率は2月9日時点で42%と、前年のペースを上回っている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用及び加工用ともに需要増加等から、前年度より 2.0%増の 77.5 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、冬とうもろこしの供給減の見込みと輸出ペースが当初予想より低調なことから、前月予測から 2.0 百万トン下方修正され、史上最高となった前年度より 7.1%減の 52.0 百万トンとなり、米国に次ぐ世界第2位の輸出国に後退する見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024 年 1 月の輸出量は 4.9 百万トンで、前年度比 20%減。内訳は、中国（1.2 百万トン）、エジプト（0.5 百万トン）、イラン（0.5 百万トン）の順。2022 年 11 月末以降に開始された中国向けとうもろこし輸出は、大豆の輸出が一巡した 2023 年 7 月以降本格化しており、一部の港で滞船が見られたものの概ね順調に輸出されている。

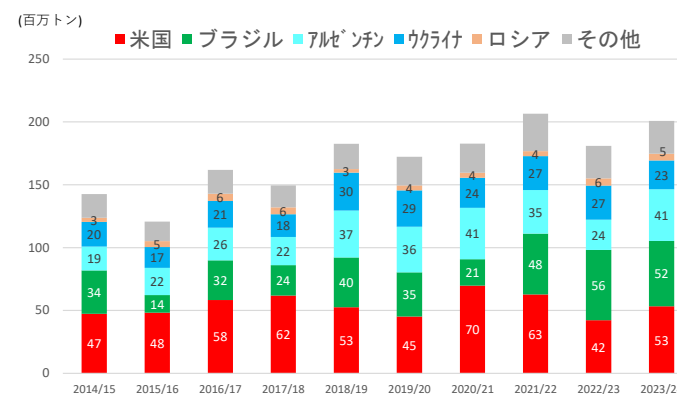
とうもろこしーブラジル

（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約 8 割、夏とうもろこしは約 2 割）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年3月～25年2月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	116.0	137.0	124.0 (119.7)	▲ 3.0	▲ 9.5
消 費 量	70.5	76.0	77.5 (79.8)	-	2.0
うち飼料用	59.5	63.0	63.5 (54.8)	-	0.8
輸 出 量	48.3	56.0	52.0 (47.0)	▲ 2.0	▲ 7.1
輸 入 量	2.6	1.3	1.2 (1.5)	-	▲ 7.7
期末在庫量	4.0	10.3	6.0 (4.6)	▲ 1.0	▲ 41.9
期末在庫率	3.3%	7.8%	4.6% (3.6%)	▲ 0.7	▲ 3.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	21.80	22.40	21.90 (21.16)	▲ 0.50	▲ 2.2
単収(t/ha)	5.32	6.12	5.66 (5.66)	▲ 0.01	▲ 7.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2024)
IGC 「Grain Market Report」(11 January 2024)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移
（ブラジルは減産により世界第2位の輸出国に後退）



資料：USDA 「PS&D」 (2024.2.8) のデータをもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により生産量が激減した前年度に比べ降雨に恵まれ単収が増加することを受けて、大きく回復する見通しから、57.1%増の 55.0 百万トンで史上最高となる見込み。

一方、アルゼンチン政府によれば、2 月 14 日時点でとうもろこしの作付けは完了。

ブエノスアイレス取引所週報（2024.2.15）によれば、作付面積は 7.2 百万ヘクタールと、2022/23 年度（7.1 百万ヘクタール）を 1.4%上回っている。1 月下旬から 2 月当初まで高温乾燥が続いたものの、2 月上旬、主産地の大部分で降雨があり、土壌水分量は増加している。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い需給が緩和し、飼料用需要が回復することから、前年度より 20.5%増の 14.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により減産した前年度から生産量が大きく回復し、供給余力が出てくる見通しから、前年度より 70.8%増の 41.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1～12 月の輸出量は 24.0 百万トンで、2022/23 年度産の減産を受け、前年度同期比（35.7 百万トン）で 33%減となった。輸出先の内訳は、ベトナム（321.9 万トン）、ペルー（299.2 万トン）、アルジェリア（229.4 万トン）の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定しており、2022/23 年度のとうもろこし輸出上限数量は 20 百万トン。

2023 年 12 月 10 日、新大統領に右派のミレイ氏が就任した。同 12 日、カブート経済相は通貨ペソの公式レートを現行の 1 ドル＝350 ペソから 50%以上切り下げ、1 ドル＝800 ペソとした。なお、「OIL WORLD Weekly」（2024.2.2）によれば、政府は、とうもろこしの輸出税を 12%から 15%に引き上げることを検討していたものの、農業団体等の強い抵抗を受けて断念し、当面の間 12%のまま維持される見通し。ペソの更なる切下げも見送られている。

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年3月～25年2月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.5	35.0	55.0 (61.0)	-	57.1
消 費 量	14.2	11.7	14.1 (20.6)	-	20.5
うち飼料用	10.1	7.5	9.8 (15.5)	-	30.7
輸 出 量	34.7	24.0	41.0 (40.9)	-	70.8
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	1.8	1.1	1.0 (3.8)	-	▲ 7.2
期末在庫率	3.7%	3.1%	1.9% (6.2%)	-	▲ 1.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.10	6.70	6.90 (8.20)	-	3.0
単収(t/ha)	6.97	5.22	7.97 (7.44)	-	52.7

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2024)
IGC 「Grain Market Report」(11 January 2024)

写真：北部サンタフェ州の早植えとうもろこしの圃場風景 (2024 年 1 月 29 日撮影)



本圃場のとうもろこしの生育ステージは黄熟期から成熟期にある。
収穫作業は、3月上旬を予定している。
予想単収は 10 トン/ヘクタールの見込み。

< 中国 > 単収及び収穫面積の増加を受け、生産量は史上最高

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、中国国家统计局による収穫面積及び単収の増加見込みを受けて、前年度より4.2%増の288.8百万トンとなり、史上最高となる見込み。

中国国家统计局「2023年糧食生産量データ」(2023.12.11)によれば、2023/24年度の実生産量は前年より4.2%増の2億8,884万トン。播種面積が前年より2.7%増加したことに加え、単収が前年より1.5%増加したことが増産の要因。なお、東北地区の一部で降雨過多の影響があったものの、他の地域では天候に恵まれた。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、とうもろこし国際価格の低下等から、前年度より2.3%増の306.0百万トンと史上最高の見込み。背景には国内の堅調な食肉需要があり、中国国家统计局(2024.1.17)によれば、2023年の食肉生産量は9,641万トンと、前年同時期比で4.5%増。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内の飼料用需要の増加を背景として、国内価格が国際価格を上回っているほか、特に2022年末から開始されたブラジルからの輸入が増加すると予想されていることもあり、前年度より22.9%増の23.0百万トンの見込み。

農業農村部によれば、2023年1～12月の輸入量は、前年同期より30.3%増の2,687.6万トン。内訳は、ブラジル(1,255.9万トン)、米国(714.1万トン)、ウクライナ(550.4万トン)の順。2023年12月のブラジル産輸入量は401.1万トンと前月比で34.9%増。2022年11月以降開始されたブラジル産とうもろこしの輸入が、2022/23年度のブラジル産の豊作による安価な輸出価格を受けて大幅に増加し、第1位の輸入先国となった。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報2023年12月号」によると、12月の国内価格は、新穀の豊作による供給増を受けて、2,480円/トンと前月(2,720円/トン)から下落した。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、国内産の増産と輸入の増加により前年度より2.8%増の211.9百万トンの見込み。

とうもろこし—中国

(単位: 百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	272.6	277.2	288.8 (288.8)	-	4.2
消費量	291.0	299.0	306.0 (310.9)	-	2.3
うち飼料用	209.0	218.0	225.0 (210.0)	-	3.2
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-
輸 入 量	21.9	18.7	23.0 (20.0)	-	22.9
期末在庫量	209.1	206.0	211.9 (173.9)	-	2.8
期末在庫率	71.9%	68.9%	69.2% (55.9%)	-	0.3

(参考)

収穫面積(百万ha)	43.32	43.07	44.22 (44.20)	-	2.7
単収(t/ha)	6.29	6.44	6.53 (6.53)	-	1.4

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2024)
IGC「Grain Market Report」(11 January 2024)

表: 中国のとうもろこし輸入量と輸入先国

(輸入量: 万トン、シェア: %)

2023年12月			2023年1月～2023年12月			2022年1月～2022年12月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	401.1	81.0	ブラジル	1,255.9	46.7	米国	1,487.8	72.1
米国	64.7	13.1	米国	714.1	26.6	ウクライナ	526.4	25.5
ウクライナ	13.8	2.8	ウクライナ	550.4	20.5	ミャンマー	19.4	0.9
ミャンマー	5.3	1.1	ブルガリア	74.1	2.8	ブルガリア	14.7	0.7
ブルガリア	4.7	1.0	ミャンマー	34.3	1.3	ロシア	9.3	0.5
ロシア	2.8	0.6	ロシア	29.3	1.1	ラオス	5.2	0.2
その他	2.6	0.5	その他	29.5	1.1	その他	0.6	0.0
計	495.0	100	計	2,687.6	100	計	2,063.4	100

資料: 中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成。

＜ ウクライナ ＞ 2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 27.6%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より収穫面積が減少（前年度比 1.2%減）も、天候に恵まれ単収が上昇（前年度比 14.4%増）したことを受け、前年度より 13.0%増となった。ただ、侵攻前の史上最高の豊作だった 2021/22 年度比では 27.6%減の 30.5 百万トンとなる見通し。

ウクライナ農業政策食料省によれば、2 月 8 日現在、収穫進捗率は 91%と、前年度同期（93%）よりやや遅れている。単収は 2 月 8 日時点で 7.79 トン/ヘクタールと、前年度より 16%増となる見通し。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、輸出増により国内消費向けに限られることを受けて前月予測から 0.5 百万トン下方修正されたものの、増産による供給増を受けて前年度より 2.0%増の 5.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、臨時回廊による輸出増を受けて前月予測から 2.0 百万トン上方修正されたものの、2023/24 年度の期首在庫の減少、黒海穀物イニシアティブの停止、主要輸出先である EU での増産による輸入需要の減少の影響を受け、前年度より 15.2%減、侵攻前の 2021/22 年度からも 14.8%減の 23.0 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2023 年 10 月～2024 年 1 月の輸出量は 966.0 万トン（海上輸送、陸路等による全ての輸出が含まれる）と、臨時回廊により輸出量が増加（2023 年 7～9 月平均と比較し、月平均で 178.2%増）したものの、黒海穀物イニシアティブが履行されていた前年同時期比では 5%減。輸出先国は、スペイン（297.4 万トン）、中国（163.8 万トン）、エジプト（134.1 万トン）、イタリア（96.9 万トン）、オランダ（91.8 万トン）の順。

USDA によれば、2023/24 年度の実在庫量は、輸出増を受けて前月予測から 1.5 百万トン下方修正されたものの、増産による供給増から前年度より 90.0%増の 5.3 百万トンの見込み。2023/24 年度の実在庫率は、前年度から 10.3 ポイント増の 19.0%となる見込み。黒海穀物イニシアティブの履行停止後に減少した輸出量は、臨時回廊の利用等で回復しつつあるが、増産に伴い在庫は前年度より増加するとみられる。

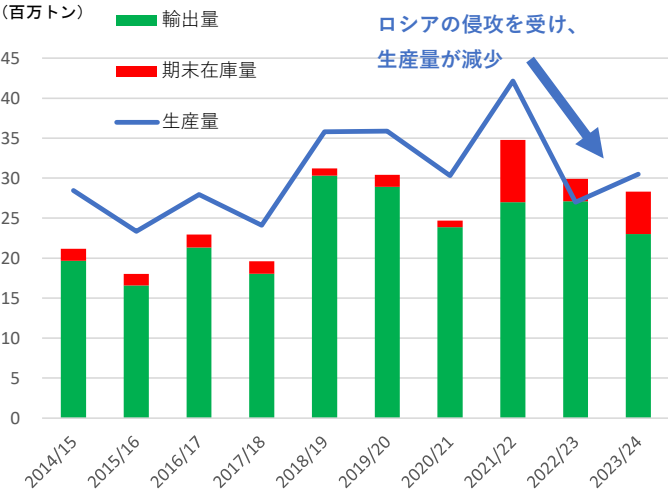
とうもろこしーウクライナ

(単位：百万トン)						
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	42.1	27.0	30.5 (30.0)	－	13.0	
消 費 量	8.2	4.9	5.0 (6.3)	▲ 0.5	2.0	
うち飼料用	7.2	4.0	4.0 (4.5)	▲ 0.5	－	
輸 出 量	27.0	27.1	23.0 (19.5)	2.0	▲ 15.2	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	－	－	
期末在庫量	7.8	2.8	5.3 (5.5)	▲ 1.5	90.0	
期末在庫率	22.2%	8.7%	19.0% (21.5%)	▲ 6.7	10.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.49	4.05	4.00 (4.06)	－	▲ 1.2	
単収(t/ha)	7.68	6.67	7.63 (7.40)	－	14.4	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2024)
IGC 「Grain Market Report」(11 January 2024)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移

(2023/24 年度の実輸出量は、2017/18 年度以来の低水準の見通し)



資料：USDA 「PS&D」 (2024. 2. 8) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・フィリピン等で下方修正されたものの、スリランカ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

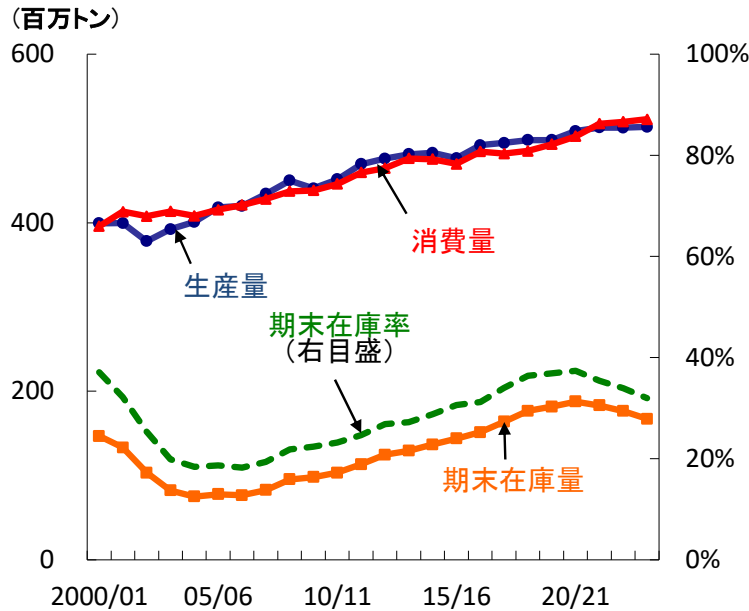
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・インドネシア、サウジアラビア、フィリピン等で上方修正され、前月から上修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・米国等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2024. 2. 8）をもとに農林水産省にて作成

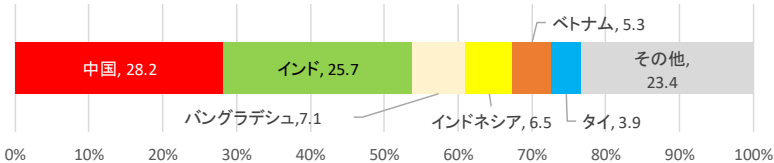
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

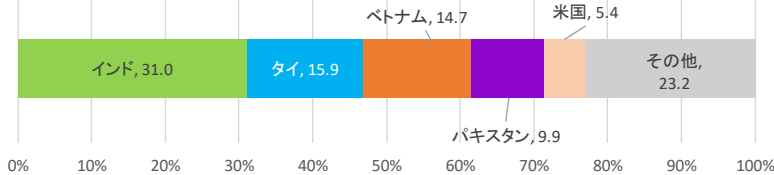
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	513.1	513.0	513.7	0.2	0.2
消 費 量	517.6	519.9	522.9	0.8	0.6
輸 出 量	56.9	54.3	51.6	0.1	▲ 4.9
輸 入 量	54.5	55.1	49.2	▲ 0.5	▲ 10.6
期末在庫量	183.3	176.4	167.2	▲ 0.1	▲ 5.2
期末在庫率	35.4%	33.9%	32.0%	▲ 0.1	▲ 1.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（8 February, 2024）

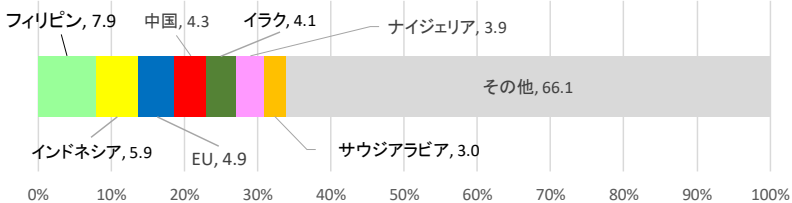
○ 2023/24年度 世界のコメの生産量(513.7百万トン)（単位：%）



○ 2023/24年度 世界のコメの輸出量(51.6百万トン)（単位：%）



○ 2023/24年度 世界のコメの輸入量(49.2百万トン)（単位：%）



（２）国別のコメの需給動向

＜ 米国 ＞ ２月初旬の豪雪で 2024 年の灌漑用水源となる降雪量が増加

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度比 36.4%増の 6.9 百万トンの見込み。特に 2 年連続の干ばつに見舞われ生産量が激減していた中・短粒種の生産量が 2.0 百万トンと、前年度比で 204.0%に大きく回復することが要因。長粒種の生産量は 4.9 百万トンと、前年度比で 19.8%増加。

カリフォルニア州水資源部によると、2024 年の灌漑用水源となるシエラネバダ山脈の降雪量は、1 月末時点で 21.6cm と、平年の 50%程度に留まっていたが、2 月当初の豪雨・豪雪により積雪が増え、2 月上旬には平年の 70%の水準まで回復した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、増産による供給量増加の見込みから、前年度比 11.5%増の 5.1 百万トンと、史上最高の見込み。

2023/24 年度の輸入量は、2023 年 8～12 月にかけてタイ等アジア諸国から食用の香米の輸入が当初予想を上回ったことや、本年 1～7 月も輸入が継続される見込みから、前月予測よりわずかに上方修正され、前年度比 7.9%増の 1.4 百万トンと、史上最高となる見込み。

2023/24 年度の輸出量は、1 月下旬からの長粒種の輸出ペースが予想を上回り、本年 7 月までは同ペースでの輸出が継続する見込みから、前月予測より 0.1 百万トン上方修正された。国内生産量の増加と、それに伴う価格競争力の改善から、前年度比 35.3%増の 2.8 百万トンの見込み。2023/24 年度(2023 年 8 月 1 日～2024 年 2 月 1 日)の主な輸出先国はメキシコ (53.8 万トン)、日本 (20.7 万トン)、ハイチ (20.0 万トン) の順。

USDA 「Rice Outlook」(2024.2.12)によれば、2 月 6 日までの週のイラク向け長粒種 (2 等、碎米 4 %混入) の価格は 765 ドル/トンと、昨年 11 月以来の高水準を維持しているものの、インドの輸入規制やインドネシアの減産による輸入拡大等を受け、2008 年 11 月初旬 (772 ドル/トン) 以来の高値となっている (P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照)。他方、地中海向けカリフォルニア米 (1 等、碎米 4 %混入) である中粒種は生産量の増加見込みを受け 950 ドル/トンと、2023 年 9 月初旬の史上最高値から 700 ドル/トン下落し、昨年 12 月上旬以降、2021 年 5 月以来の安値となっている。

期末在庫量は、輸出量の上方修正を受けて、前月予測からわずかに下方修正されたものの、前年度より 40.6%増の 1.4 百万トンの見込み。

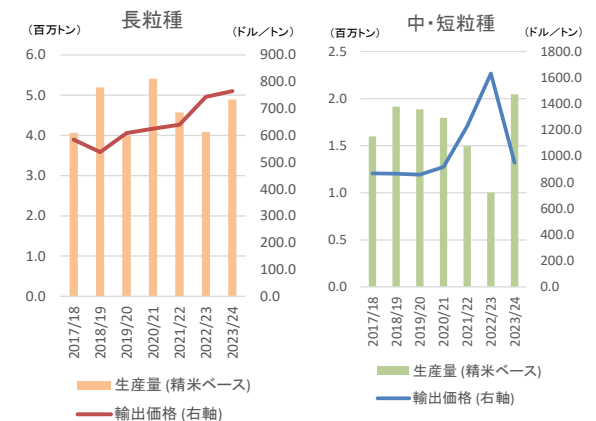
コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23 年 8 月～24 年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)
生 産 量	6.1	5.1	6.9	-	36.4
消 費 量	4.7	4.6	5.1	-	11.5
輸 出 量	2.7	2.0	2.8	0.1	35.3
輸 入 量	1.2	1.3	1.4	0.0	7.9
期末在庫量	1.3	1.0	1.4	▲ 0.0	40.6
期末在庫率	17.1%	14.4%	17.1%	▲ 0.5	2.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.00	0.88	1.16	-	31.8
単収(もみt/ha)	8.64	8.28	8.57	-	3.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February, 2024)

図：米国の長粒種と中・短粒種の生産量・輸出価格の推移



資料：USDA 「Rice Outlook」(2024.2.12) より。価格は年度内の平均価格。なお、2023/24 年度は 2024 年 2 月の価格。

< インド > ラビ米の生育は良好も、降雨不足から灌漑用水不足が懸念

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく132.0百万トンと、前年度比で2.8%減も、過去5年平均比で5.6%増の見込み。2023年8月の極度の降雨不足を受け、インドのコメ生産量の85%を占めるカリフ米の単収減少予想が減産の要因。単収は4.21もみトン／ヘクタールと、前年度比で1.2%減も、過去5年平均比では2.3%増の見込み。

現地情報によると、本年の乾季の降雨量は、インド全土で例年より58%少ないとのこと。この降水量不足が2月に解消されない場合、灌漑用水が不足し、穀物生産に悪影響が出る可能性がある。コメの二期作エリアでは、移植～初期栄養段階にあり、移植は2月末までに完了する予定とのこと。

インド農業農民福祉省によると、ラビ米の作付済面積は、2月2日時点で3.93百万ヘクタール、作付け進捗率は74.8%と、前年同期(4.04百万ヘクタール、76.9%)とほぼ同水準。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、11月初旬に政府が、2024年1月以降の穀物配給計画を5年間延長したことから、前年度比3.0%増の118.0百万トンの見込み。政府の配給プログラムは8.13億人が対象となっており、コメ等が低所得世帯向けに無償又は低価格で配給される見込み。調達量は、52～55百万トンの見込み（インド全体の消費量の半分に相当）。

2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、輸出規制強化による直近の輸出量減少で、前月予測から0.5百万トン下方修正され、前年度比21.0%減の16.0百万トンの見込み。ただ依然として世界第1位の輸出国を維持しており、世界の輸出量の約31%を占める。2023年1月から11月までの主な輸出先国は、ベナン（148.4万トン）、サウジアラビア（111.3万トン）、セネガル（93.5万トン）の順。なお、サウジアラビア向けはバスマティ米の輸出が主流となっている。

なお、インドは、非バスマティ米を中心に、2022年9月9日以降、様々な輸出規制を発動・強化している。詳細は右表を参照のこと。

USDA「Rice Outlook」（2024.2.12）によれば、インド産米（碎米5%混入）の価格は、輸出規制強化後のデータが提示されていない。なお、規制前の2023年7月時点の輸出価格は485ドル/トンと、アジア主要輸出国の中で最低水準の価格となっていた（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

2023/24年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、消費量の増加から前年度比5.7%減の33.0百万トンの見込み。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ(小麦)の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	129.5	135.8	132.0 (129.3)	-	▲ 2.8
消 費 量	110.5	114.5	118.0 (113.2)	-	3.0
輸 出 量	22.0	20.3	16.0 (13.6)	-	▲ 21.0
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	34.0	35.0	33.0 (36.3)	-	▲ 5.7
期末在庫率	25.7%	26.0%	24.6% (28.6%)	-	▲ 1.3

(参考)

収穫面積(百万ha)	46.28	47.83	47.00 (47.70)	-	▲ 1.7
単収(もみt/ha)	4.20	4.26	4.21 (2.85)	-	▲ 1.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February, 2024)
IGC「Grain Market Report」(11 January, 2024)（単収は精米t/ha）

表：インドのコメ輸出規制(2022年9月9日～)

対象品目	措置内容	発動日
全ての種類のコメの粳 (HS 1006 10)	輸出税 (20%)	2022.9.9～
全ての種類のコメの玄米 (HS 1006 20)	輸出税 (20%)	2022.9.9～
バスマティ米・精米 (HS1006 30 20)	関税：12,000ルピー/t (日本円で約2万円/t)	—
	最低輸出価格導入 (1,200 ドル/トン→950ドル/トンに引き 下げ (2023.10.26～))	2023.8.27～
バーボイルド米・精米 (HS1006 30 10)	輸出税 (20%)	2023.8.25～ 2024.3.31
バスマティ米・バーボイ ルド米以外の精米 (HS1006 30 90)	輸出禁止	2023.7.20～
碎米 (HS1006 40 00)	輸出禁止	2022.9.9～

※食料安全保障上の理由でインド政府が認める場合は、輸出を許可。
※有機米は本措置の対象外。
資料：インド政府の公示等をもとに農林水産省にて作成。

< 中国 > 2023/24 年度は播種面積が減少し、生産量が対前年比 0.9%減少

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、2023 年 7～9 月の豪雨等により東北部（特に吉林省、黒竜江省及び遼寧省）で播種面積が引き下げられたことから、前年度比 0.9%減の 144.6 百万トンの見込み。ただし、良好な土壌水分等を受け、単収は史上最高の見込み。なお東北部では、政府による大豆作付推進政策の反動を受けコメ作付面積が減少傾向にある。

中国国家统计局「2023 年糧食生産量データ」（2023.12.11）によれば、2023 年のコメの播種面積は 28.9 百万ヘクタールと、前年比 1.7%減少した。他方で、単収は、天候に恵まれたことも受けて 7.1 トン/ヘクタールと、前年比 0.8%増加した。生産量（もみベース）は 206.6 百万トンと、前年比 0.9%減少した。

なお、現地情報によると、収穫は 2023 年 11 月に終了した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、とうもろこし等飼料用作物の価格低下を受けた飼料用米の需要減少から、前年度比 3.3%減の 149.9 百万トンの見込み。

2023/24 年度の実輸入量は、インドの輸出規制や国際コメ価格の高騰から、前月予測より 0.6 百万トン下方修正され、前年度比 52.1%減の 2.1 百万トンの見込み。中国は、もち米や香米に加え、特にとうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、代替としてインド等から碎米を輸入してきたが、2022 年 9 月以降、インドの輸出禁止等により輸入量は規制前の年度（2021/22 年度、6.0 百万トン）と比較して 65.0%減少している。中国海関統計によれば、2023 年 12 月の輸入量は 23.2 万トン（前年同月比 44.5%減）、同年 1～12 月の輸入量は 263.6 万トン（前年同期比 58.2%減）となった。輸入国別では、1 位がベトナム（35.4%）、2 位はミャンマー（19.8%）、3 位がタイ（19.7%）の順。

一方、USDA によると、「一帯一路」政策の賛同国を拡大する目的から、同政策の関係国に対しコメの輸出促進を図っており、2023/24 年度の実輸出量は、前年度比 14.9%増の 2.0 百万トンとなっている。主要輸出先には、同政策の賛同国であるエジプトやロシア、パプアニューギニアが含まれている。

期末在庫量は、輸入量の方下方修正から前月より 0.6 百万トン下方修正され、前年度比 4.9%減の 101.4 百万トンの見込み。ただし、インドの期末在庫量（33.0 百万トン）と合計すると世界の期末在庫量の約 80%を占める。

コメー中国

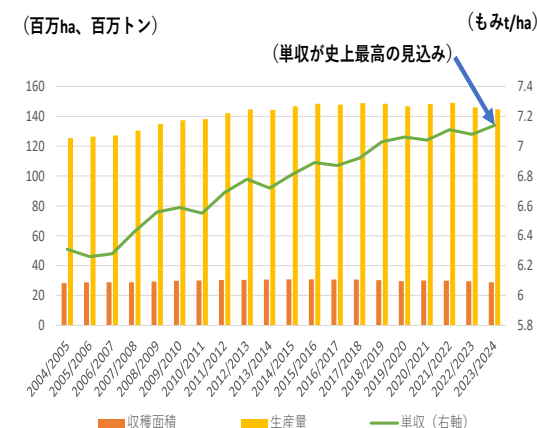
北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ（粳）米は東北部、江蘇省等で栽培、生産シェアは 3 割程度

（単位：百万精米トン）

年 度	2021/22	2022/23 （見込み）	2023/24（23年7月～24年6月）		
			予測値、〇はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	149.0	146.0	144.6 (144.6)	-	▲ 0.9
消 費 量	156.4	155.0	149.9 (148.0)	-	▲ 3.3
輸 出 量	2.1	1.7	2.0 (2.2)	-	14.9
輸 入 量	6.0	4.4	2.1 (3.3)	▲ 0.6	▲ 52.1
期末在庫量	113.0	106.6	101.4 (102.3)	▲ 0.6	▲ 4.9
期末在庫率	71.3%	68.0%	66.7% (68.1%)	▲ 0.4	▲ 1.3
（参考）					
収穫面積(百万ha)	29.92	29.45	28.95 (29.45)	-	▲ 1.7
単収(もみt/ha)	7.11	7.08	7.14 (4.96)	-	0.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February, 2024)
IGC「Grain Market Report」(11 January, 2024)（単収は精米t/ha）

図： 中国の生産量、収穫面積、単収の推移
（2004/05～2023/24 年度）



資料：USDA「PS&D」(2024.2.8)をもとに農林水産省にて作成

< タイ > 乾季米は灌漑用水不足や高温から減産見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、2023年5月から9月中旬にかけての平年を下回る降雨量から、前年度比4.4%減の20.0百万トンの見込み。

現地情報によると、11月中旬からの乾期の中、1月の降雨量は例年と比べても全国的に少なく、米の主要産地である北部で10ミリ、東北部と中部では10ミリ以下と、平年比をわずかに下回った。また、1月の気温は、全国平均で平年より1.4度高かった。3月以降次第に降雨量が増える見込みであるも、今年はエルニーニョ現象による天候不順の影響で、雨季の降雨総量は例年に比べて少なくなることが予想されている。

アセアン食料安全保障情報システム(2024.2)によると、乾季米は出穂期から登頂期にある。国際価格の上昇期待から、政府計画面積を上回る作付けがあったものの、作付面積は1.4百万ヘクタールと、灌漑用水や降雨不足から前年よりわずかに減少。水不足の影響から生育状況は芳しくなく、高温の影響で幼穂形成不良や小穂が見られ、生産量と単収とも昨年度より減少する見込み。

USDAによると、2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、タイ政府による収穫面積の増加見込み(11.07百万ヘクタールと史上最高)等を受け、2021/22年度比5.0%増の20.9百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、減産見込みから、前年度比6.2%減の8.2百万トンの見込み。

2022/23年度の輸出量は、貿易統計に基づき、前月予測からわずかに上方修正され、2021/22年度比13.0%増の8.7百万トン。

タイ米輸出業者協会によれば、2023年1～12月の輸出量は、前年同期比13.7%増の876.3万トンとなった。政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大しているインドネシアは、前年同期の9.2万トンから大幅増の141.1万トンと、最大の輸出先国となった。また、南アフリカが88.5万トン(前年同期77.5万トン)、検疫問題で7年間輸入を停止していたタイ産米の輸入を2022年に再開したイラクは85.4万トン(同160.0万トン)、米国は70.6万トン(同65.2万トン)をそれぞれ輸入した。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2024.2.8)によれば、2月6日までの週のタイ産米(長粒、2等精米)の輸出価格は、パーツ安や本年2月末の乾季米の流入期待から値を下げ、前月から12ドル/トン下落し、630ドル/トンとなった(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。2023年12月中旬以降、不安定な情勢が続く紅海を迂回することによる、欧州や中東向けの輸送コストの増加や輸送日数の増加が懸念されている。

期末在庫量は、輸入量の上方修正から前月よりわずかに上方修正されたものの、減産予測から前年度比15.6%減の3.3百万トンの見込み。

コメータイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	(単位: 百万精米トン)		
			2023/24 (24年1月～24年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.9	20.9	20.0 (19.7)	-	▲ 4.4
消 費 量	12.5	12.5	12.5 (13.0)	-	-
輸 出 量	7.7	8.7	8.2 (8.5)	-	▲ 6.2
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	0.1	100.0
期末在庫量	4.1	3.9	3.3 (2.6)	0.0	▲ 15.6
期末在庫率	20.5%	18.1%	15.7% (12.3%)	0.1	▲ 2.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.70	11.07	10.65 (11.00)	-	▲ 3.8
単収(もみt/ha)	2.81	2.86	2.85 (1.89)	-	▲ 0.3

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (8 February, 2024)
IGC 「Grain Market Report」 (11 January, 2024) (単収は精米t/ha)

表: タイの国別輸出量

国名	(単位: 万トン)		
	2022 年 1～12月	2023 年 1～12月	増減量
1 インドネシア	9.2	141.1	132.0
2 南アフリカ	77.5	88.5	11.0
3 イラク	160.0	85.4	-74.6
4 米国	65.2	70.6	5.5
5 中国	75.2	47.2	-28.0
6 マレーシア	18.6	42.0	23.4
7 日本	13.2	40.2	27.0
8 フィリピン	31.3	33.7	2.4
9 セネガル	23.2	28.2	5.0
10 カメルーン	20.4	20.0	-0.4
計	771.0	876.3	105.3 (前年比13.7%増)

資料: タイ関税局 (2024.2)

< ベトナム > 南部メコンデルタ地域で冬春作（乾季米）の収穫を開始

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が過去最高だった前年度の水準からわずかに減少も、収穫面積の増大により、前年度比 0.2%増の 27.0 百万トンの見込み。なお、肥料価格の高騰や高収益作物等（果物・野菜・養殖）への転換等により、生産量が史上最高となった 2014/15 年度（28.2 百万トン）を境に緩やかな低下傾向にある。

アセアン食料安全保障情報システム（2024.2）によると、①北部は、冬春作（乾季米）の播種が開始された。播種面積は 10.47 万ヘクタールで、前年度比 2.2%減となる見込み。②南部では、冬春作（乾季米）が生育期にある。現時点の播種面積は 1.77 百万ヘクタール。他方、主に南部のメコンデルタ地域では、乾季米の収穫が始まった。収穫面積は 9.2 万ヘクタールで、生育状況は良好。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、アジア諸国等からの精米輸入需要が落ち着く見込みから、前年度比 7.7%減の 7.6 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸出量は、2023 年 7～12 月の中国への輸出が、同年前半に比べて急減したことから、前月予測より 0.2 百万トン下方修正されたものの、フィリピンによる史上最高の輸入量の継続見込みや、インドネシアによる 2023 年中の追加需要見込みを受け、8.2 百万トンと前年度比 15.5%増で史上最高の見込み。特にインドネシアは、エルニーニョ等によるコメの減産見込みや、燃料価格高騰による投入財費用の高騰から、国内コメ価格が上昇。価格抑制のための在庫放出に加え、低所得世帯へのコメ配給等を受け、政府が設定する最低水準以下に在庫が低下。これを補うため、2023 年 1～12 月までに合計 350 万トンを輸入する見込み。2023 年 1～10 月までの輸入量(209.8 万トン)のうち、ベトナム産の輸入は 94.6 万トン（45.1%）。

ベトナム関税総局によれば、2023 年 1～12 月の輸出量は 813.2 万トンと、前年同期（710.5 万トン）に比べ 14.4%増加した。主な輸出先国は、フィリピン（313.5 万トン）、インドネシア（116.6 万トン）、中国（91.7 万トン）、ガーナ（58.7 万トン）の順。特に、インドネシア向けが前年度比 978.0%増加。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2024.2.8)によれば、ベトナム産米（長粒種、5 %碎米混入）の 2 月 6 日までの週の価格は、新穀の流入から、前月の価格より 23 ドル／トン下落し、645 ドル／トンとなった。

期末在庫量は、2022/23 年度の輸出量の減少から、前月予測より 0.2 百万トン上方修正されたものの、前年度比 22.6%減の 1.4 百万トンの見込み。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年 1 月～24年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	26.7	26.9	27.0 (28.0)	-	0.2
消 費 量	21.4	21.4	21.2 (21.9)	-	▲ 0.9
輸 出 量	7.1	8.2	7.6 (8.0)	-	▲ 7.7
輸 入 量	1.7	1.8	1.4 (1.5)	-	▲ 22.2
期末在庫量	2.7	1.8	1.4 (2.1)	0.2	▲ 22.6
期末在庫率	9.3%	6.0%	4.8% (7.2%)	0.6	▲ 1.2

(参考)
収穫面積(百万ha) 7.10 7.10 7.15 (7.11) - 0.7
単収(もみt/ha) 6.01 6.07 6.05 (3.90) - ▲ 0.3
資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」 (8 February, 2024)
IGC 「Grain Market Report」 (11 January, 2024) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain : World Markets and Trade」(2024.2.8)より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比  前月比 

・ボリビア等で上方修正されたものの、ブラジル等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

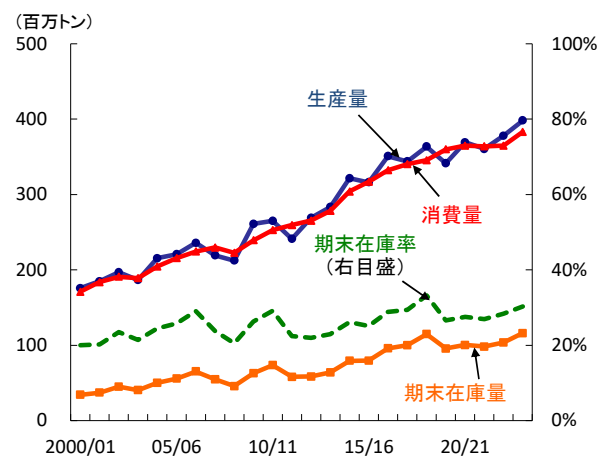
消費量 前年度比  前月比 

・インド等で上方修正されたものの、ベトナム、EU 等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

・ブラジル等で上方修正されたものの、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料：USDA「PS&D」（2024.2.8）をもとに農林水産省で作成

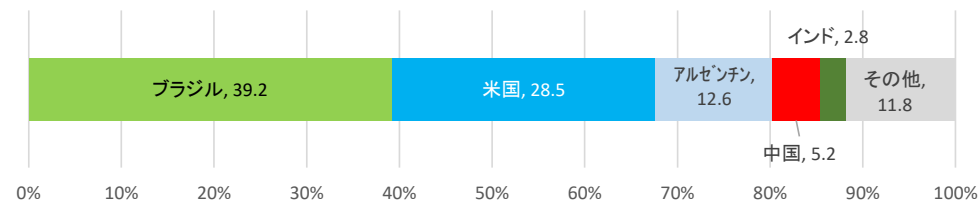
◎ 世界の大豆需給

（単位：百万トン）

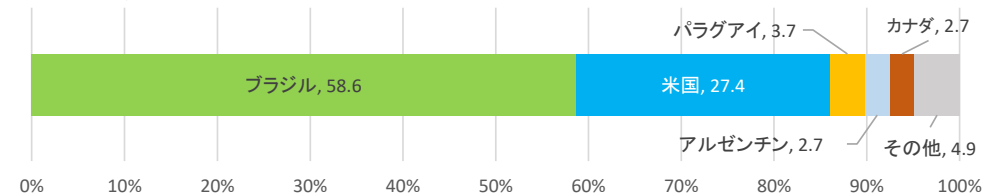
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	360.4	378.1	398.2	▲ 0.8	5.3
消費量	363.9	364.9	383.0	▲ 0.6	5.0
うち搾油用	314.5	314.2	329.3	▲ 0.1	4.8
輸出量	154.2	172.0	170.6	▲ 0.4	▲ 0.8
輸入量	155.5	164.4	167.9	▲ 0.5	2.1
期末在庫量	98.0	103.6	116.0	1.4	12.0
期末在庫率	26.9%	28.4%	30.3%	0.4	1.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（8 February 2024）

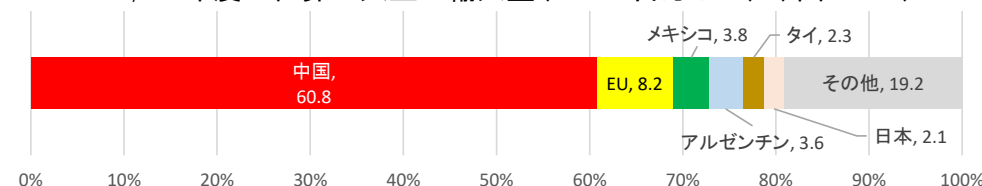
○ 2023/24 年度の世界の大豆の生産量 (398.2 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸出量 (170.6 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸入量 (167.9 百万トン) (単位：%)



（２）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 収穫面積の減少により、生産量は前年度より 2.5%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の減少を受け前年度より 2.5%減の 113.3 百万トンの見通し。大豆からとうもろこしへの作付転換により収穫面積が減少したとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、バイオ燃料・飼料用需要増による搾油の収益改善の見通しから、前年度より 4.8%増の 66.0 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、ブラジルとの激しい輸出競争を受けた低調な輸出ペースにより前月予測から 0.9 百万トン下方修正され、前年度より 13.7%減の 46.8 百万トンの見込み。史上最高の豊作見通しとなったブラジル産と比べ相対的な価格競争力が落ちていることが要因とみられる。また、米国国内のバイオ燃料用消費量が増加していることも背景にあるとみられる。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、2023/24 年度の輸出量が下方修正されたことを受け、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度より 19.2%増の 8.6 百万トンとなる見込み。期末在庫率は 7.6%で、過去 3 年平均（6.0%）を上回るものの、過去 5 年平均（11.0%）を下回っており、引き続き低水準に留まる見通し。

USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」（2024.2.8）によれば、本年 2 月の米国大豆価格は、2 月 7 日現在、ブラジルにおける収穫進展による世界的な豊作基調及び旧正月前のアジアの低調な需要を受けて、前月から 25 ドル/トン下落し 467 ドル/トン。

USDA によれば、2023 年 9 月～2024 年 1 月の輸出量は 2,884 万トンと、ブラジルとの激しい輸出競争を受けて前年度同時期の 3,687 万トンより 22%減。内訳は中国（1,781.9 万トン）、メキシコ（241.9 万トン）、イタリア（124.2 万トン）の順となっている。

USDA によれば、米国政府は、温室効果ガス排出削減のため、様々な原料のバイオマス利用を奨励している。2022/23 年度における主要な植物油のバイオ燃料向け生産量は前年度比 30.8%増の 8.7 百万トン。そのうち、大豆油のバイオ燃料向け生産量は前年度比 20.2%増の 5.7 百万トンで史上最高。2022/23 年度大豆油は増産となったものの、国内のバイオマス利用に向けられ輸出量が歴史的な低水準に留まったため、今後も動向を注視する必要。

大豆－米国

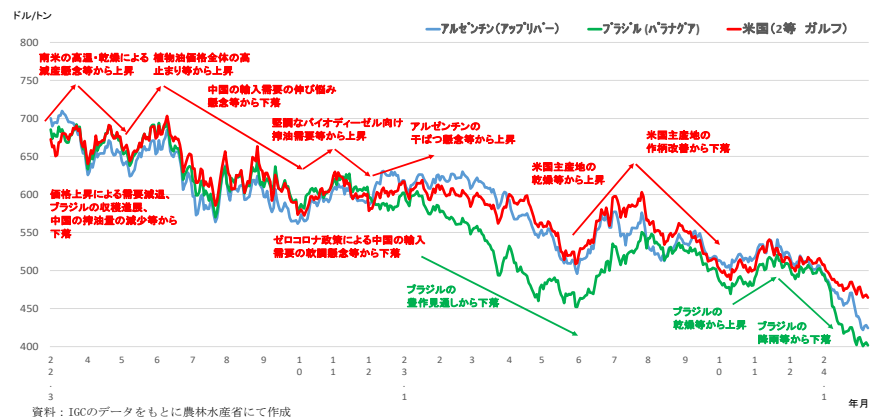
（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年 9 月～24年 8 月）		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	121.5	116.2	113.3	-	▲ 2.5
消 費 量	62.9	63.0	66.0	-	4.8
うち搾油用	60.0	60.2	62.6	-	4.0
輸 出 量	58.6	54.2	46.8	▲ 0.9	▲ 13.7
輸 入 量	0.4	0.7	0.8	-	22.4
期末在庫量	7.5	7.2	8.6	1.0	19.2
期末在庫率	6.2%	6.1%	7.6%	0.9	1.5
（参考）					
収穫面積(百万ha)	34.92	34.87	33.33	-	▲ 4.4
単収(t/ha)	3.48	3.33	3.40	-	2.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」（8 February 2024）

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格（FOB）の推移



< ブラジル > 2023/24 年度の生産量 (CONAB) は前年度より 3.4%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、主要生産州の中西部マット・グロッソ州南部やパラナ州での悪天候により単収が引き下げられたことを受け、前月予測から 1.0 百万トン下方修正されて 156.0 百万トン。作付面積は史上最高となるものの、単収が減少することから、生産量は史上最高の前年度より 3.7%減も、引き続き高水準を維持している。

ブラジル食料供給公社 (CONAB) の月例報告 (2024.2.8) によれば、2023/24 年度の実産量は、とうもろこし等から収益性が高い大豆に作付けがシフトすることで収穫面積が増加するものの、高温乾燥による単収減から前年度より 3.4%減の 149.4 百万トンの見通し。主要生産州のマット・グロッソ州とパラナ州等における降雨不足と高温を受けて、前月予測から下方修正された。作付け進捗率はブラジルで 2 月上旬時点で 99.4%とほぼ完了し、収穫進捗率は 14%と、前年度同時期の 9%を上回っているものの、高温乾燥により未熟粒が多くなっているとみられている。

USDA によれば、2 月上旬、南部において季節外れの高温乾燥が広がった一方、中西部のマット・グロッソ州において高温乾燥を和らげる降雨があった。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料向けの大豆粕需要が増加することから、前年度より 1.1%増の 57.5 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、10 月から 1 月の好調な輸出ペースを受けて前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、生産量が 2 年連続で高水準を維持し、価格競争力も高まる見込みから、前年度より 4.7%増の 100.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024 年 1 月の輸出量は 2.9 百万トンで、前年同月 (0.8 百万トン) に比べ 239.3%増となっており、中国向け輸出が昨年に引き続き堅調に推移していることが要因。輸出先は、中国 (2.0 百万トン)、タイ (0.2 百万トン)、ベトナム (0.2 百万トン) の順。大豆収穫後の 3 月に輸出最盛期を迎える。

2023 年 6 月、北部のマラニョン州イタキ港と南部のサンパウロ州サントス港を結ぶ南北鉄道が開通した。さらに、マット・グロッソ州から南部サントス港まで輸送する鉄道の拡張工事も行われており、これらのアクセス改善が輸出のボトルネックを回避する一助になることが期待されている。

大豆ーブラジル

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	130.5	162.0	156.0 (153.5)	▲ 1.0	▲ 3.7	
消 費 量	54.0	56.9	57.5 (56.5)	-	1.1	
うち搾油用	50.7	53.1	53.8 (53.5)	-	1.2	
輸 出 量	79.1	95.5	100.0 (96.7)	0.5	4.7	
輸 入 量	0.5	0.2	0.5 (0.5)	-	200.0	
期末在庫量	27.6	37.4	36.3 (2.6)	0.5	▲ 2.8	
期末在庫率	20.7%	24.5%	23.0% (1.7%)	0.2	▲ 1.5	

(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.60	44.60	45.90 (41.49)	0.30	2.9	
単収(t/ha)	3.14	3.63	3.40 (3.70)	▲ 0.04	▲ 6.3	
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(8 February 2024) IGC「Grain Market Report」(11 January 2024)						

ブラジルのクロープカレンダー(中部から南部)
2023/24年度大豆の作付けは、2023年9月以降、順次開始。
2024年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2023/24年度	2023年												2024年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等												収穫 23.6(百万t)								
冬とうもろこし	作付 3.9(百万ha)												作付 17.0(百万ha)								
大豆	マット・グロッソ州、パラナ州等												収穫 149.4(百万t)								

資料：CONAB穀物レポート (2024.2.8)

＜ アルゼンチン ＞ 2023/24 年度の生産量は、前年度より倍増

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥の影響を強く受け大幅な減産となった前年度から回復する見通しから、前年度の 2 倍の 50.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン政府によれば、2 月 14 日現在、作付けは完了。

ブエノスアイレス取引所週報（2024.2.15）によれば、作付面積は 17.3 百万ヘクタールと、2022/23 年度（16.2 百万ヘクタール）より 6.8%増加している。81%の大豆が「良～やや良」の作柄となっている。1 月下旬から 2 月当初まで高温乾燥が続いたものの、2 月上旬、主産地の大部分で降雨があり、土壌水分量は増加している。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、増産に伴い搾油量が回復することから、前年度比 16.9%増の 42.8 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内生産量の増加に伴い輸入需要が減少することから、前年度より 32.7%減の 6.1 百万トンの見込み。

2023/24 年度の実輸出量は、前月予測から変更はなく、干ばつにより減産し価格競争力が弱まった前年度から生産量が回復する見込みから、前年度より 9.8%増の 4.6 百万トンの見込み。

なお、2023 年 1～12 月の輸出量は、前年度の干ばつによる減産を受けて 185.9 万トンで前年度（550.6 万トン）より 66%減。輸出先は、中国（160.6 万トン）、米国（7.5 万トン）、チリ（2.0 万トン）の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%と設定。2022 年 3 月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2%引き上げたが、2023 年 1 月からは 31%に戻している。

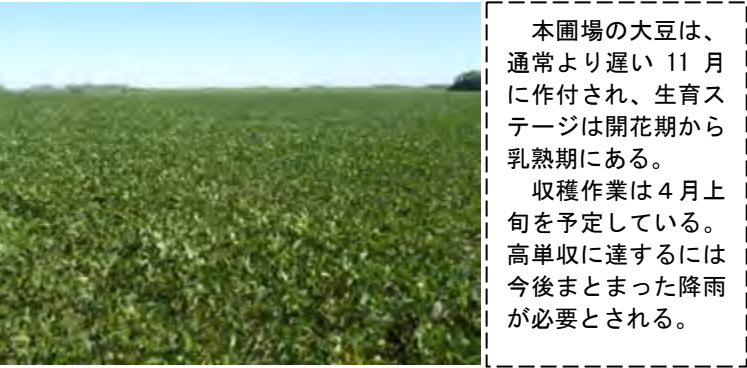
2023 年 12 月 10 日、新大統領に右派のミレイ氏が就任した。同 12 日、経済相は通貨ペソの公式レートを現行の 1 ドル＝350 ペソから 50%以上切り下げ、1 ドル＝800 ペソにした。また、大豆の輸出税は引き続き最大 33%に設定すると発表した。なお、「OIL WORLD Weekly」（2024.2.2）によれば、政府は、大豆油及び大豆粕の輸出税を 31%から 33%に引き上げることを検討していたものの、農業団体等の強い抵抗を受けて断念し、当面の間 31%のまま維持される見通し。ペソの更なる切下げも見送られている。

大豆ーアルゼンチン

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	(単位：百万トン)			
			2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	43.9	25.0	50.0 (48.5)	-	100.0	
消 費 量	46.0	36.6	42.8 (45.8)	-	16.9	
うち搾油用	38.8	30.3	35.5 (39.3)	-	17.1	
輸 出 量	2.9	4.2	4.6 (5.6)	-	9.8	
輸 入 量	3.8	9.1	6.1 (5.7)	-	▲ 32.7	
期末在庫量	23.9	17.2	26.0 (8.7)	-	50.8	
期末在庫率	48.9%	42.2%	54.8% (16.9%)	-	12.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	15.90	14.40	16.50 (15.87)	-	14.6	
単収(t/ha)	2.76	1.74	3.03 (3.06)	-	74.1	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2024)
IGC「Grain Market Report」(11 January 2024)

写真：北部サンタフェ州の大豆の圃場風景
(2024 年 1 月 29 日撮影)



本圃場の大豆は、通常より遅い 11 月に作付され、生育ステージは開花期から乳熟期にある。収穫作業は 4 月上旬を予定している。高単収に達するには今後まとまった降雨が必要とされる。

＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の生産量・消費量・輸入量は史上最高

【生産・生育状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、中国国家统计局による収穫面積及び単収の増加見込みを受けて前年度より 2.8%増の 20.8 百万トンで史上最高の見込み。

中国国家统计局「2023 年糧食生産量データ」（2023.12.11）によれば、2023 年の生産量は前年より 2.8%増の 2,084 万トン。播種面積が前年より 2.2%増加し、単収も前年より 0.5%増加したことが要因。

2 月 3 日に発表された中国共産党・国务院（内閣に相当）の中央一号文件には、引き続き大豆の作付け確保や単収の向上等の取組等について記載された。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な食料需要に加え、国内の畜産物需要から大豆粕需要が増加することから、前年度より 3.4%増の 120.5 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、ブラジルからの輸入増により前年度より 1.1%増の 102.0 百万トンと史上最高の見込み。

農業農村部によれば、2023 年 1 ～12 月の輸入量は、前年より 0.4%減の 9,577 万トンと前年並み。内訳は、ブラジル（6,750.0 万トン）、米国（2,309.2 万トン）、アルゼンチン（204.7 万トン）の順となっている。ブラジルと米国を合わせたシェアが 9 割以上を占める一方、前年 12 月はアルゼンチン、カナダ、南アフリカからの輸入量が前月から大幅に増加しており（それぞれ 259%増、413%増、前月なし）、輸入国の多様化に取り組んでいるとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 12 月号」によれば、12 月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、増産した新穀の流入を受けて前月（4,880 元/トン）から下落し、4,840 元/トンとなった。12 月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月並みの 5,700 元/トンとなった。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 6.6%増の 36.0 百万トンと史上最高の見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前月予測からの変更はなく、前年度より 0.9 ポイント増の 29.9%となる見込み。

大豆－中国

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	16.4	20.3	20.8 (20.8)	-	2.8
消 費 量	108.4	116.5	120.5 (120.5)	-	3.4
うち搾油用	87.9	95.0	98.0 (100.0)	-	3.2
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	11.1
輸 入 量	90.5	100.9	102.0 (102.0)	-	1.1
期末在庫量	29.3	33.8	36.0 (41.0)	-	6.6
期末在庫率	27.0%	29.0%	29.9% (34.0%)	-	0.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	8.42	10.24	10.47 (8.40)	-	2.2
単収(t/ha)	1.95	1.98	1.99 (1.95)	-	0.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (8 February 2024)
IGC 「Grain Market Report」 (11 January 2024)

表：中国の大豆輸入量と輸入先国

2023年12月			2023年 1 月～2023年12月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	498.0	50.7	ブラジル	6,750.0	70.5
米国	384.9	39.2	米国	2,309.2	24.1
アルゼンチン	39.0	4.0	アルゼンチン	204.7	2.1
カナダ	37.1	3.8	カナダ	139.4	1.5
南アフリカ	10.8	1.1	ロシア	123.8	1.3
ロシア	10.3	1.0	エチオピア	13.1	0.1
その他	2.2	0.2	その他	36.4	0.4
計	982.3	100	計	9,576.6	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2024/25 年度の生産量は 7.0 百万トンの見込み (AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2024.2.16）によれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 6.7%増、過去 5 年平均比も 6.8%増の 7.0 百万トンの見込み。単収が 3.09 トン/ヘクタールと、前年度並みの史上最高となり、収穫面積が 2.26 百万ヘクタールと前年度より 6.6%増と大幅に増加することによる。

カナダ統計局「Production of principal field crops, November 2023」（2023.12.4）によれば、収穫が終了した 2023/24 年産について、カナダ東部では、温暖な気候と良好な水分状況により作柄は良好であった。

AAFC によれば、この春に作付けされる 2024/25 年度の実生産量は、収穫面積が前年より増加するものの、単収が前年より減少し、前年度並みの 7.0 百万トンの見通し。背景には、堅調な大豆粕需要と輸出がある。大豆価格は前年より低下するものの、とうもろこし価格より高いため、カナダ東部の農家は大豆の作付けを優先するとみられる。土壌水分は現時点で十分。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 12.2%増の 2.9 百万トンの見込み。バイオ燃料需要増による搾油の収益改善が見込まれていることによる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、増産による輸出余力の増大を受けて、前年度より 7.3%増の 4.6 百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2023/24 年度（2023 年 8 月～2024 年 7 月）の 2023 年 8～12 月の輸出量は 267.4 万トンで、前年度（257.5 万トン）を上回っている。国別では、中国（115.6 万トン）が 40%以上のシェアを占め、次いでイラン（51.6 万トン）、アルジェリア（35.6 万トン）、イタリア（15.0 万トン）の順となっている。

なお、カナダ産大豆は、主産地がカナダ東部のため、主要な輸出ルートは、アジア向けは通常五大湖を通してパナマ運河経由で輸出されるルートとなっており、春先まで続くとみられるパナマ運河の水位低下の影響を注視する必要がある。

AAFC によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、増産により前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度から 26.3%増の 0.5 百万トンの見込み。

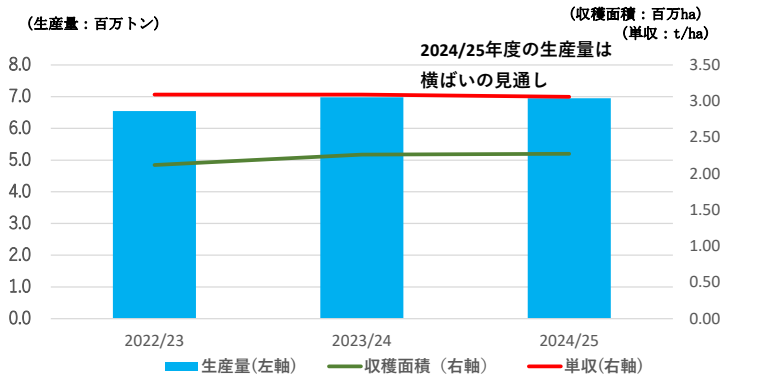
大豆－カナダ

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	6.2	6.5	7.0 (7.0)	-	6.7
消 費 量	2.3	2.6	2.9 (2.5)	-	12.2
うち搾油用	1.8	1.8	1.9 (1.8)	-	6.4
輸 出 量	4.3	4.2	4.6 (4.9)	-	7.3
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.5)	-	-
期末在庫量	0.4	0.6	0.7 (0.4)	-	4.8
期末在庫率	6.5%	9.5%	9.1% (5.7%)	-	▲ 0.4

(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.08	2.12	2.26 (2.26)	-	6.6
単収(t/ha)	2.99	3.09	3.09 (3.09)	-	-

資料：USDA「PS&D」
「World Agricultural Production」(8 February 2024)
AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(16 February 2024)

図：カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2024.2.16)をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2023/24年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	23年6月～24年5月	23年9月～24年8月	23年8月～24年7月	23年9月～24年8月
カナダ	23年8月～24年7月			23年8月～24年7月
豪州	23年10月～24年9月		24年3月～25年2月	
EU	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
中国	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月
ロシア	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		23年9月～24年8月
ウクライナ	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
ブラジル		24年3月～25年2月	24年4月～25年3月	23年10月～24年9月
アルゼンチン	23年12月～24年11月	24年3月～25年2月		23年10月～24年9月
タイ			24年1月～12月	
インド	23年4月～24年3月		23年10月～24年9月	
ベトナム			24年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2023/24年度は、米国の小麦では2023年6月～2024年5月、ブラジルのとうもろこしでは2024年3月～2025年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

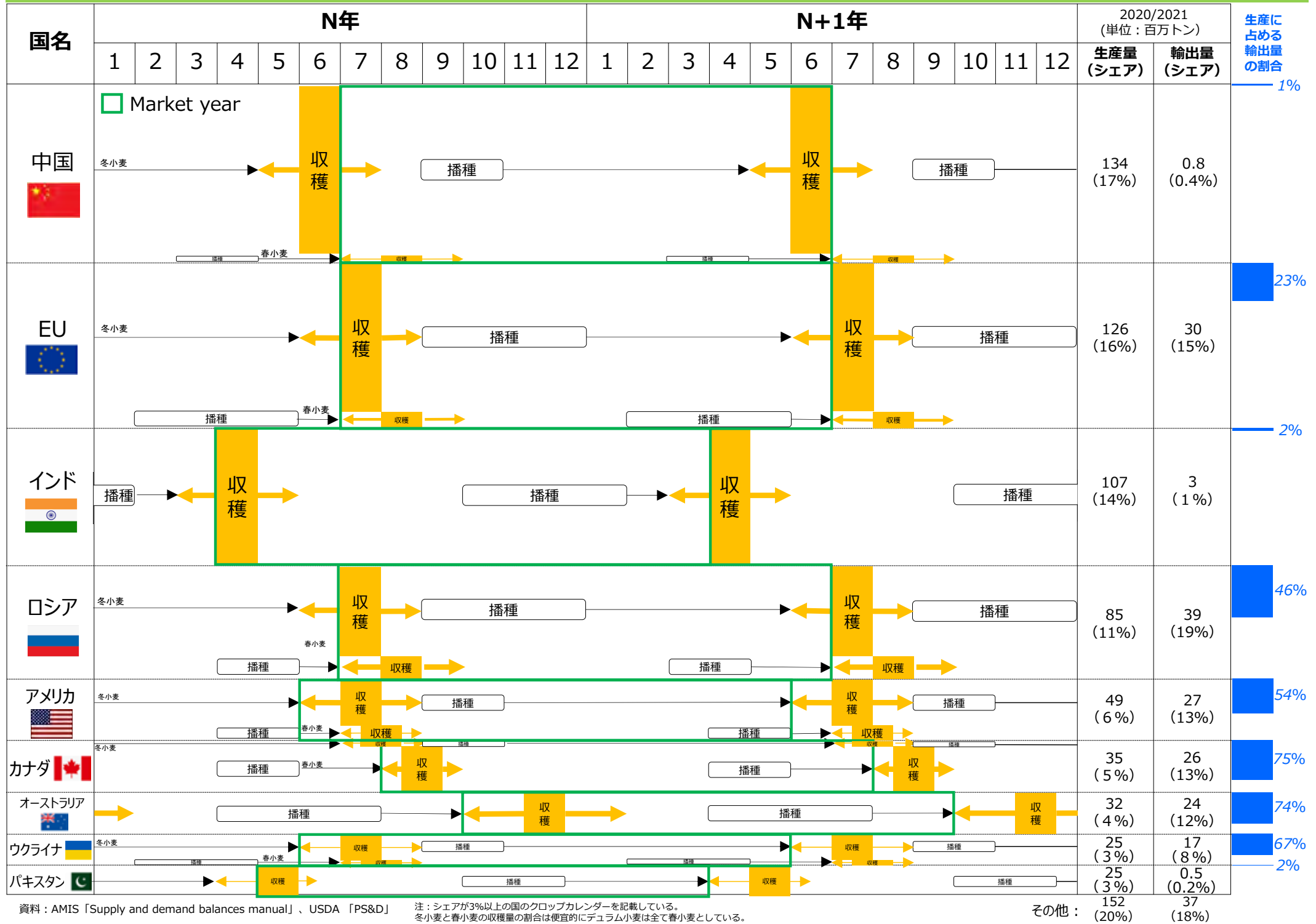
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏：℃＝(° F－32)÷1.8			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

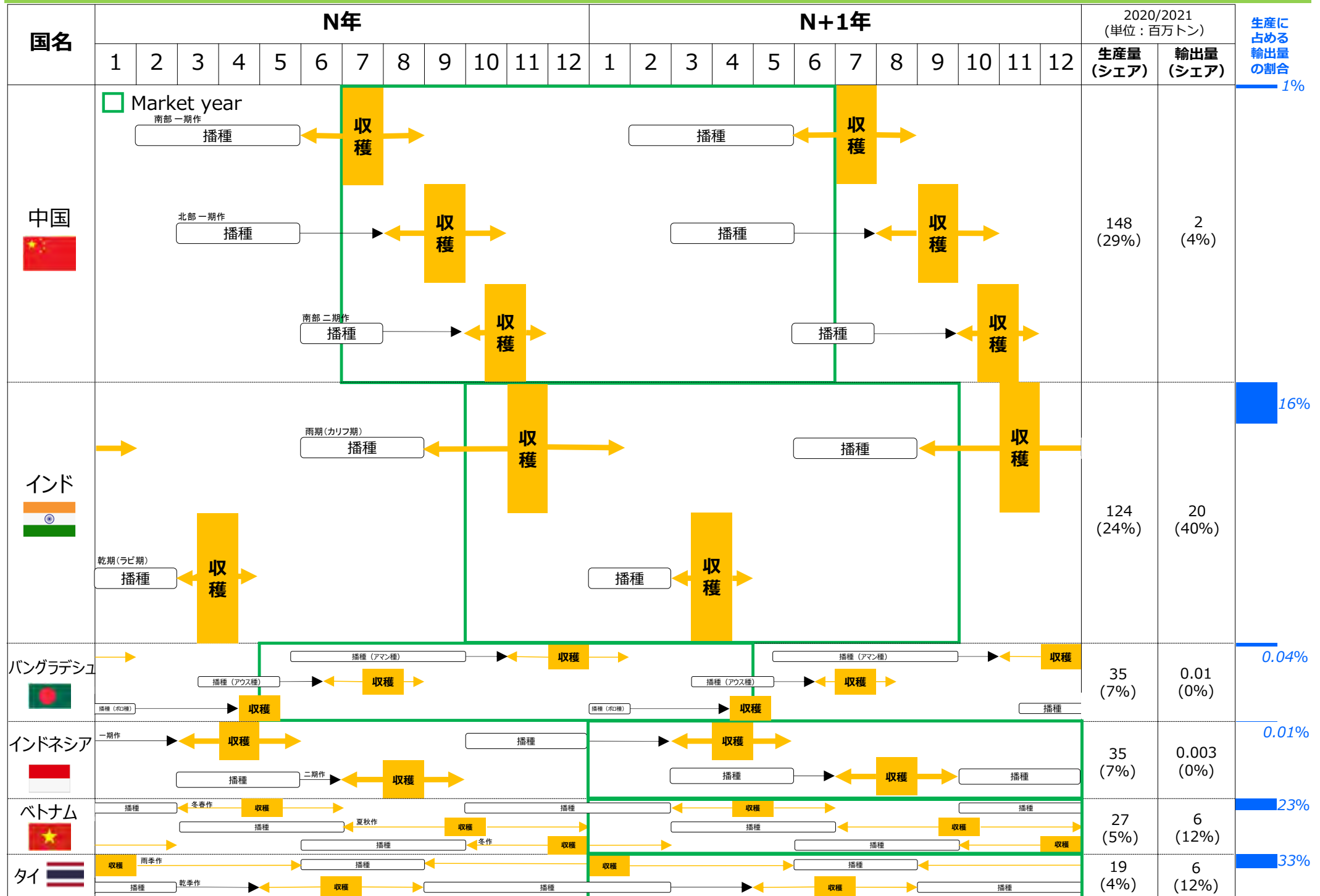
主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

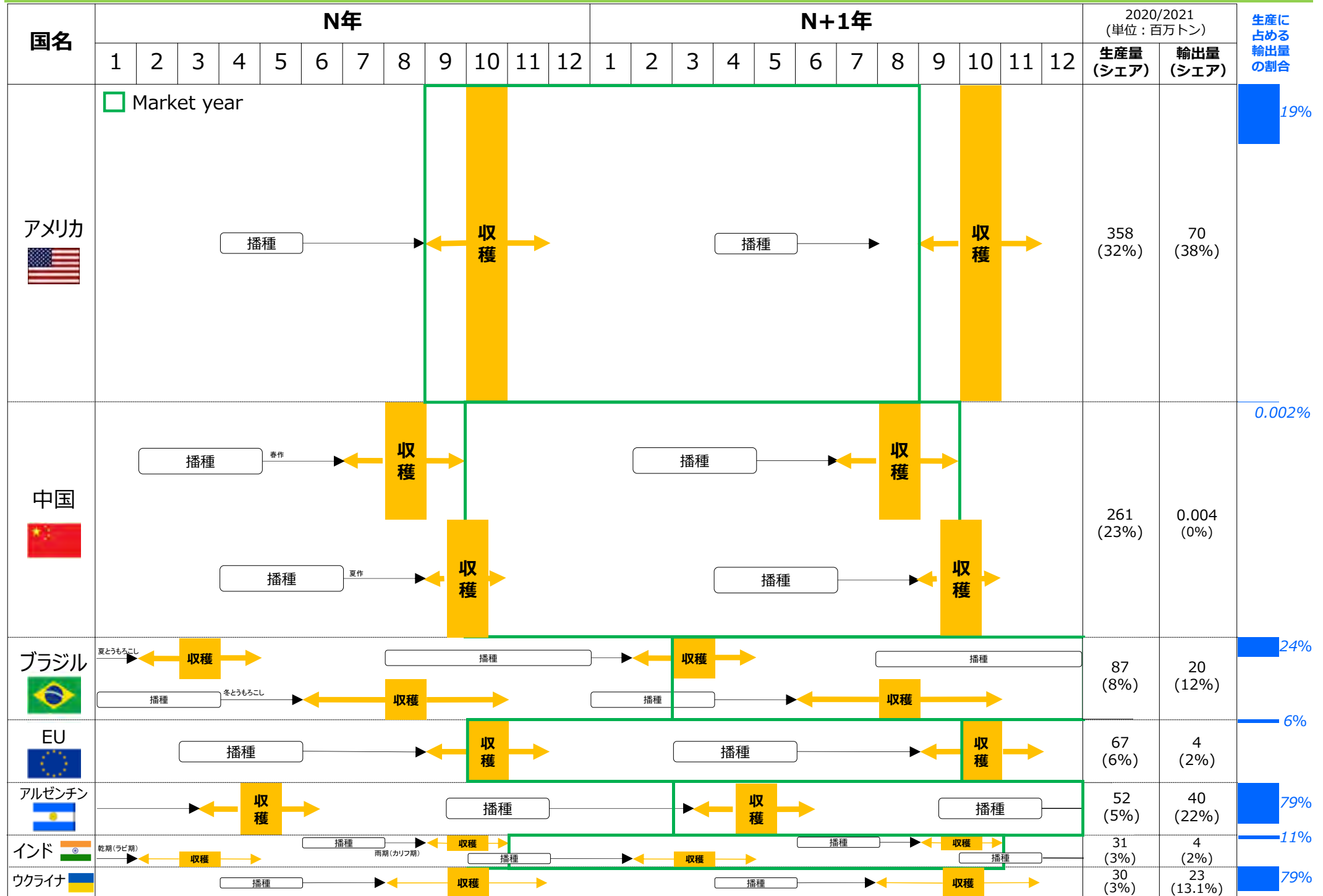
その他：

121
(24%)

16
(32%)

主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



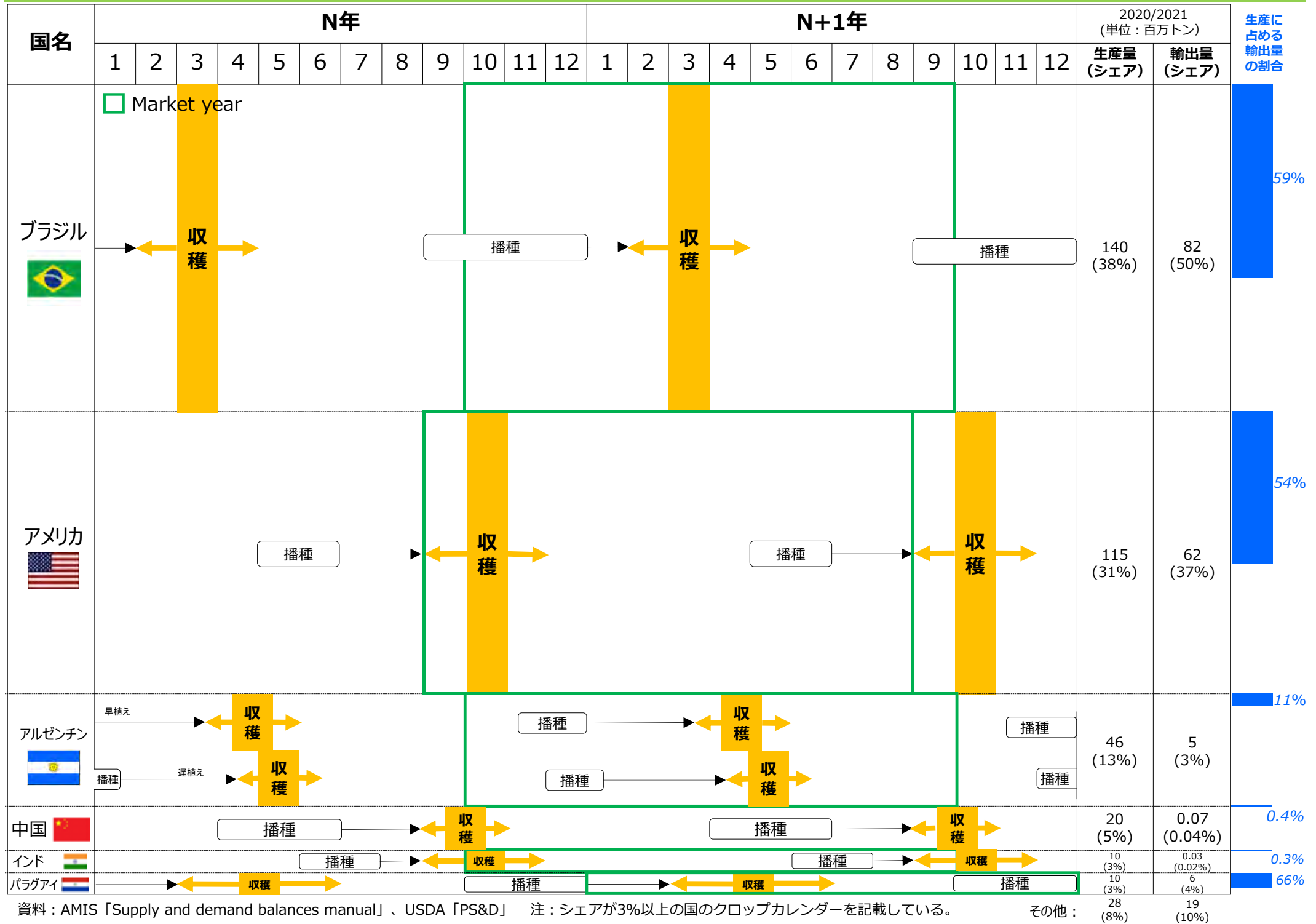
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他：242 (19%) 21 (11%)

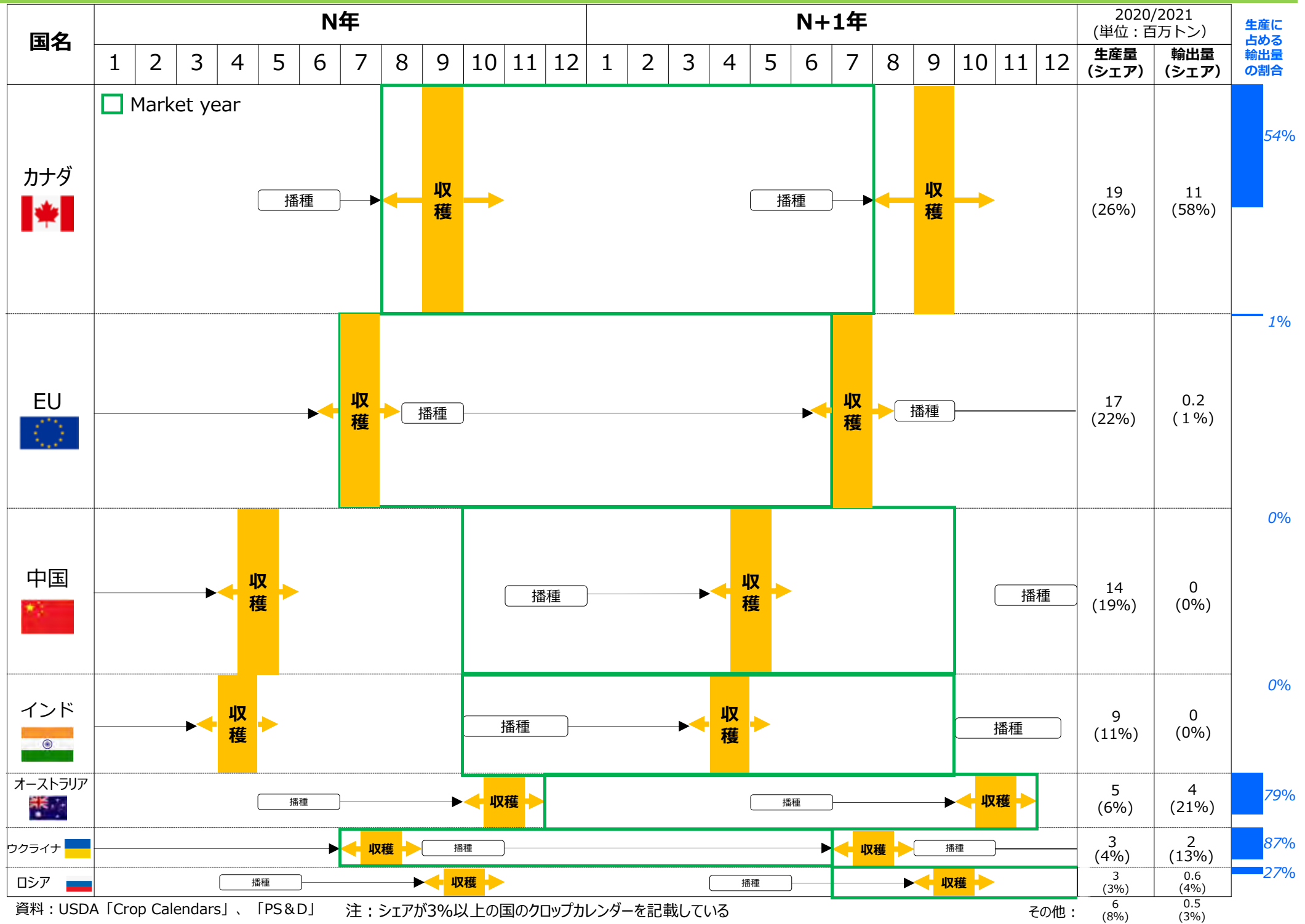
主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2024 年 2 月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度 2023/24 年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10 年先）、超長期（30 年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。



https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html